

日本歌唱芸術協会 本部：沖縄



第11号

会報

2025年9月号

- ドイツ留学のその後 — 思い出の家-----仲村渠 悠子 pp.1-3
- 私の歌う理由-----福田 美樹子 pp.4-5
- 公式演奏歴50周年リサイタルのご報告-----豊田 喜代美 pp.6-46
- 次代につなぐドラマチック・ソングス「貴志康一」作品 -

日本歌唱芸術協会（本部：沖縄）公式ホームページ <https://www.jsaa-okinawa.org/>

※公式ホームページではこれまでの全会報を写真はカラーで公開しております。

発行：日本歌唱芸術協会（本部：沖縄）

日本歌唱芸術協会（本部：沖縄）事務局：jsaa.okinawa@gmail.com

■ ドイツ留学のその後 — 思い出の家

仲村渠 悠子 ピアニスト

夫が韓国に単身赴任することになったとき、私は子どもたちとともにドイツに残ることを選びました。音楽と関わりながら、大学で講師として働く日々は、私にとって夢の延長でもあり、忙しくはありましたが、この地で教えたり演奏したりできることは、非常に喜びでした。

勿論、日常は楽しいばかりではなく、本番がある日はベビーシッターを雇う必要があり、時間のやりくりや細かな調整に追われることも多々ありました。それでも、音楽ができる環境を守りたい——その思いが、私の生活の軸になっていたのです。

私たちが暮らしていた家は、少し変わった造りをしていました。一階は古道具を扱う店舗で、がらくたのような雑貨が並び、その上に倉庫のような階を挟んで、私たちの住居がありました。倉庫には大きなバスタブや、巨大なサンタクロースの人形などが置かれていて、少し不気味な空間でしたが、子どもたちはその場所が大好きで、よく探検して遊んでいました。

ある夏の午後、私は少しだけ昼寝をしていました。玄関のドアは自動で閉まる仕組みなのですが、子どもたちが自由に出入りできるよう、一階の入口を開けたままにしていたのです。階段から足音が聞こえましたが、私はそれを子どもたちの足音だと思い込み、特に気にすることもなく、うとうとしていました。

しばらくして子どもたちが帰ってきて、「今、知らないおじさんがバイオリン持って出ていったよ。」

なんと！グランドピアノの下に置いていたはずのバイオリンが、ほんの数秒の間に持ち去られていたのです。それは、町の楽器屋さんからレンタルしていた娘のバイオリン！

私はすぐに子どもたちと外へ飛び出し、通りの向こうに見えたそのおじさんを追いかけてながら、警察に電話をかけました。彼は走って逃げるわけでもなく、ふらふらとした足取りで、まるで散歩でもしているかのようにのんびり歩いています。

まだ自転車に乗れない息子は、足で地面を蹴る木製のキックバイクで、誰よりも先におじさんを追いかけて、私と娘はその後を追いました。

「それ、私のバイオリンです」と声をかけると、その人は「ああ」と言って、あっさり手渡してくれました。拍子抜けするほどの反応でした。

そして私は、すぐに思い出しました——この人は、以前アイスクリーム屋さんで私が両替して、小銭を渡したおじさんだったのです。街中で座り込んでいて、靴が左右別々だったその姿が、いつも気の毒で、気になっていました。

善意で差し出した小さな支援が、まさかこんな形で返ってくるなんて。

警察が到着し、事情を説明すると、彼は酔っぱらったような口調でのんびりと言いました。

「え？盗んでないよ。ほら、彼女が持ってるじゃないか。」

私が手にしているバイオリンを指さしながら、まるで私が嘘をついているような言いがかり、なんという！

警察官は彼のことをよく知っているようで、「またやっちゃったか、おじさん」といった調子で、彼と並んで歩きながら、近くの市営住宅のようなところ(元イギリス兵がいたといわれる建物で、生活困窮者のために使われているよう)に連れて帰って行きました。

この家では、他にもさまざまな出来事がありました。夏休みから戻ると、一階の窓が割られてベニア板で覆われていたこともありました。その下には段ボールが敷かれ、あきらかに誰かが寝ていた形跡が残っていました。庭に飾った雑貨はすぐに盗まれ、チェリーの実を摘む人が現れ、屋根に飛び乗る姿を見たこともあります。

警察官に「我が家は、庭のものがよく盗まれるんです。パトロールを少し頻繁にしていただけませんか？」とお願いしたところ、「そんなことより、引っ越した方がいいですよ」とあっさり言われてしまいました。まあ、確かに、治安を優先させるなら今すぐにも引っ越した方が良い状況、ごもつとものお返事です。でも、音楽ができる家はそう簡単に見つかるものでは

ありません。24 時間、誰にも遠慮せずに音を出せるこの家は、私にとってかけがえのない場所でした。

夫に相談したくても、ドイツと韓国の時差は 8 時間、リアルにこちらの状況を伝えられないもどかしさ。音楽ができる環境を優先してきたけれど、夫が不在の暮らしは、心にぽっかりと穴が開いたようで、その寂しさは日ごとに増していきました。

彼がドイツに来るのは年に 2 回、夏と冬にそれぞれ 1 か月ほど。家族が揃う時間は限られていて、その間の怖かった話、不安だった出来事は、私たちの武勇伝となり楽しく語られるのですが、実際のその時は夜も眠れないほどの恐怖でした。

4 年半続いた夫不在のドイツ生活、親しくしていたギゼラおばさんは、心配して毎週月曜日に我が家を訪れ、子供たちに勉強を教えてくださいました。元々学校の先生だった彼女は、以前の職場の体育館で子供たちとボール遊びをしてくれたり(彼女は体育の先生だった)、遠出してピクニックに連れて行ってくれたり、教会の催し物、子供向けのミュージカル、動物園、毎週ありとあらゆるところに連れ出してくれました。

ギゼラおばさんは、夫が指揮していた合唱団のメンバーの一人で、芸術をこよなく愛し自らもピアノを弾きます。私が作曲した『みみぐすい』ピアノ小品集の中にある「An Gisela」はそんな彼女のために書いた曲です。

その他、合唱団の方々にも本当にたくさん助けていただきました。

私たちが住んでいた家は、もともとは貸し出しが認められていない物件でした。建物の基準法に達しておらず、大家さんは取り壊す予定だったそうです。そんな中合唱団の一人が大家さんに掛け合ってくれて、住めるように手配してくれたのです。腐っていた床を張り替え、ペンキを塗り、2週間ほどかけて、私たちが暮らせる家に整えてくれました。

廃墟のように見えた家が、どんどん息を吹き替えしていきます。中でもお気に入り、屋根裏部屋で、冬

は雪が入り込んでしまうので、隙間に新聞紙を詰め込んでいました。

サンタクロースが、この屋根裏からやってくると信じている子供たちは、天窓にサンタさんへのお手紙を貼り付けていて、彼が来た時のために、窓横にナッツの入ったお皿も用意していました。私はネズミが来やしないかと心配で、毎日お皿を空にしに行くのですが、それをみた子供たちは「今日もサンタさんがきた！この家はどこの家よりも穴が多いから、入りやすいんじゃない！？」と、仲良しのソフィーちゃんを呼んで、探偵ごっこが始まります。

何といってもこの家の魅力は、ビー玉を転がすと流れていく斜めの床と、森の中のような木々におおわれていること、そして周りに人が住んでいないこと。少し離れたところに不思議な音楽が聞こえてくる、裸足で歩く住民がいて、彼らもまた 3 階建ての一見廃墟に見えるその家を満喫している様子。毎晩、焚火をしていて、その横の空き地から行方不明者の遺体がみつかったという噂があり、探偵好きのソフィーは、そこで何かの儀式がなされているのでは、と興味津々でした。

この家は、音楽ができるというだけでなく、人の手と心で作られた場所。多少の不便や危険があっても、私はこの家に強い愛着を持っていました。

日本への帰国が決まり、この家を去る日の夜、娘はベランダから 空が二つに割れる流れ星を見たといっています。

ことあるごとに、ベランダで風と会話をしていたという娘は、日本に来てから風と会話が出来なくなったといいました。そんな、不思議な話もあるのかもしれない、と思わせる神秘的なこの家。日本に戻る直前までお世話になりました。

私たちのあとに 1 年ほど知人が住みましたが、今は誰も住んでいなくて、近々取り壊される予定だとか。裏の通りには大きなスーパーマーケットもできて、以前より人通りも多く、すっかり景色は変わってしまったようです。

思い出のつまったあの家を、もう一度見ることはで

きないけれど、今も感謝とともに思い出しています。

あの頃、練習していた曲を弾くたびに、優しくきらめく光が、静かに瞼に浮かびます。

それは、過ぎ去った日々を包み込むような、穏やかで、あたたかな光です。

○ このベランダで、侵入者を撃退する子供たち。日差しの暖かい日は、朝食を楽しんだ。



○ ソファの上には雨水キャッチーの洗面器。チェロに見立てて、長棒でアンサンブルを楽しむ息子。



○ デトモルトの思い出の家。庭のチェリーは、よく空き家と勘違いした人たちに摘まれていた。



○ 娘の親友、ソフィの洗礼式。沢山の親戚、友人らが招かれ、厳かであり、晴れやかな、素晴らしい式だった。



■ 私が歌う理由

福田 美樹子 声楽家

私はなぜ歌うのか——その問いは、これまでの人生の歩みのなかで幾度も私の心に浮かび、そして深く沈んでいきました。答えはいつも一つです。私は、聴いてくださる人の魂の尊厳を浮かび上がらせ、そこに力を与えるために歌っています。

私たちは日々、忙しさを「やらなければならないこと」に追われ、自分自身に帰る時間を失いがちです。歌は、そうした日常の奥深くに眠る“本来の自分”へと呼びかけるものだと私は思っています。

悲しみや絶望、愛や希望——歌が語る物語は多様ですが、それらはすべて聴く人の魂の扉を叩くためにあります。あるときは涙を誘い、あるときは恐れを呼び起こし、またあるときは笑いとともて心を解き放つ。私はその一つひとつの物語を通して、お客様の魂をノックしていくことを願っています。そして、私の高音のコラトウーラの響きが、人々の中に眠っていた生命力や勇気を呼び覚まし、元気を取り戻していただくきっかけになれば——それこそが私の歌う最大の理由です。

そのために、私は日々の鍛錬します。歌うという行為は、肉体と精神の両方を高め続ける営みだと信じています。

私が敬愛してやまないフランシス・プーランクは、毎朝 11 時になると必ずピアノに向かい作曲をしていたといいます。

パリに生まれ、パリで生涯を終えた彼の音楽は、まさに「パリ訛り」で詩を語らないと表現できない独特の響きを持っています。詩人や画家、同時代の芸術家たちと日常的に交流を持ち、美が生まれるパリで時間を生きたプーランク。

その音楽を私が演奏するとき、2025 年という現代に再び命が吹き込まれ、私の声と肉体を通して音楽がよみがえるのだと感じます。

そして、それをコンサートホールで聴き手の皆さまと分かち合うことこそ、歌う者の大いなる喜びです。

歌うための身体を整えることも、私にとっては大切な日課です。

まず、食べるものに気を配ります。私は少しグルテンにアレルギーがあるため、小麦粉をできるだけ控え、白砂糖も控えます。6 年ほど続けており、そのおかげで体調が格段に整い、声の調子も安定してきました。

スペインや、フランス留学中はクロワッサンやバゲットをよく食べていましたが、今は自分の体の声に耳を傾け、慎重に選んでいます。

喉のケアはもちろん、体全体のケアも欠かせません。毎朝 2~3 キロほど走り、早起きして瞑想を行います。プールでの運動も取り入れ、頭をクリアに保つよう努めています。頭が澄んでいると、プーランクをはじめとする作曲家たちがその音に込めた想いが、より深く理解できるようになるのです。

また、体は驚くほど正直です。合わない食べ物を摂ったときは動きが鈍くなり、精神的にも落ち込むことがあります。そうしたときは、「なぜ落ち込んでいるのか」「どんな感情が湧いているのか」と内側の声に耳を澄まし、自分の感情を丁寧に見つめ、ケアするようにしています。そうして心と体の状態が整うと、挑戦する力が湧いてきます。

「こんな曲を歌ってみたい」「このオペラに挑戦してみよう」という意欲が自然と生まれてくるのです。

逆に、心身が曇っていると、新しいレパートリーやプロジェクトへ一歩を踏み出す勇気が出てこないものです。

年齢を重ねるほど、意識的に自分に負荷をかけることの大切さを感じます。若い頃は一晚寝れば回復した体も、今ではそうはいきません。だからこそ、積極的に体を動かし、駅の階段を二段飛ばしで上がったり、駅から目的地まで走ってみたりと、意識的に身体を目覚めさせるよう努めています。今ではいつもスニーカーを履くようになりました。

水分と良質な塩分をたっぷり摂り、毎日お風呂に浸かってデトックスすることも習慣です。沖縄に滞在する時には海に身を委ねることも、私にとっては大切なデトックスの時間です。定期的に鍼にも通い、体を整えています。

そして何より大切にしているのは、家族や友人たちとの時間です。家族を優先しながら、夜に練習を行い、次の日の本番に備えることもありました。家族や、音楽の仲間、一緒に身体を鍛える仲間の存在は、私の歌の大切な支えとなっています。

こうして日々の暮らしやケアの一つひとつが私の中で「すべてが歌の糧になる」と思えるようになりました。

定期的にフランスやスペインを訪れ、現地の友人たちと交流し、宿泊させてもらったり、ドイツの先生を訪ねたり—そうしてヨーロッパの文化や言葉に触れることは、自分がヨーロッパ音楽を歌う上での確固たる信念を築くためにも欠かせません。

また、日本語表現を磨く過程で女優として舞台や映画に参加する機会にも恵まれました。舞台での発声法や、演技を支える精神の在り方、心をオープンにする方法、舞台上で観客と一体感を得る身体の開き方や精神の放ち方など、多くのメソッドを学びました。その経験によって、パフォーマンスの際に自分と観客のあいだにあった見えない壁が少しずつ消えていき、今ではすべての方が喜びに満ちた表情で終演後帰っていかれるのを実感できるようになりました。それは私にとって、何ものにも代えがたい幸福です。

新しい曲に取り組むとき、最初は苦手意識が先に立ち、どの引き出しを開ければよいのかがなかなか見つからないことがあります。しかし、探し続け、構築し、本番で最高の表現にたどり着けたとき、まるで「今この瞬間に作曲された音楽」を歌っているかのような感覚が訪れます。それこそが私の喜びです。

音楽の心髄に到達するためには「自分を見てほしい」という承認欲求のままではうまくいきません。むしろ、一度「自分」という存在を手放し、音楽そのものの中に入り込むこと。そうすると、不思議なことに、自分の本当の個性が自然と浮かび上がってくるのです。

私はまだまだ道半ばです。音楽活動と人生の歩みは、これからも誠意をもって積み重ねていきたいと思っています。ここまで歩んでこられたのは、支えてくださる皆さまのおかげです。心から感謝しています。

そして、私はまた新たな挑戦へと歩み出したいと思っています。

歌は、魂を呼び覚まし、光を灯す力を持っています。私はこれからも、その力を信じ、私自身の声を通して人々の心の奥へと語りかけていきたい。

それが、私が歌う理由です。



○ 2025年7月 フランス・アルリイ音楽祭(フリユルメ教会)で演奏するベドリッシュ弦楽四重奏団と筆者

■ 公式演奏歴 50 周年リサイタルの報告 次代につなぐドラマチック・ソングス「貴志康一」作品

豊田喜代美 声楽家 博士(知識科学)

おかげさまで公式演奏歴50年となった。1975年の「新人演奏会」(読売新聞主催,東京文化会館大ホール)が執筆者・豊田喜代美の最初の公式演奏であり、50周年になる本年9月23日にサントリーホール・ブルーローズで「豊田喜代美公式演奏歴 50 周年記念リサイタル～次代につなぐ「貴志康一」作品～」を開催した。目的は「貴志康一」その人と作品を次代につなぐことであり、これまで聴いてくださっている方々と共に西洋クラシック音楽を日頃聴いていない方々、小中高校生、大学生を、できるかぎりお誘いした。また、もう一つの目的は 25 年前から行っている、発声の主観に客観(科学的視点)を加えることで発声機構を調整しながら「楽器としての身体」の維持・成長の実証である。貴志康一歌曲は全てオーケストラ伴奏で作曲されており、豊田が初めて貴志康一歌曲を演奏したのは東京都交響楽団定期演奏会であった(ライブ CD 有)。貴志自らドイツのベルリンフィルハーモニーを指揮し、マリア・バスカが歌っていることから示されているようにオペラ・アリアを歌うのとまったく同じ身体使用であった。

歌唱芸術協会(本部:沖縄)の皆様にご報告させていただくにあたり、演奏会プログラムそのままを見て頂くことが適切と考え、掲載させていただく(字数超過については超過分の執筆者支払いなどを理事会にはかる)。自身の50年間の演奏記録を見ては当時の緊張感が蘇った。演奏感覚が消えずに今も心身に残っていることに驚いた。

プログラムの最初に目次を記した。プログラム掲載文章は明朝体で記す。

○ ご挨拶

公式演奏歴 50 周年記念リサイタル ― 感謝をこめて次代につなぐ・貴志康一作品」にお越しくださり、まことにありがとうございます。心より御礼申し上げます。本日は、ヴァイオリンの澤 和樹 氏、ピアノの渡辺 健二 氏と共に、演奏いたします。

私は 1987 年東京都交響楽団「第一回日本の作

曲家」演奏会(東京文化会館)で初めて貴志康一作品を歌い、最初の譜読みで貴志康一の純真が強烈に心に沁みました。溢れんばかりの躍動感が嬉しくてその日は興奮して良く眠れませんでした。その時から貴志作品の演奏研究を続けており、本演奏会での未発表曲の世界初演を幸いに思います。更に、貴志は別名でジャズ風やブルース風などの曲を数多く作曲したことをインタビューでお伝えした際、インタビュアーの先生が貴志が別名で作曲した理由を考察下さり、心が惹かれました。準備が整いましたら発表したいと思います。

貴志がベルリンで出版した歌曲にドイツ語で記した「日本の情感を西洋人の心に寄せる」という願いは成就したことが当時のドイツ新聞評で確認でき、豊田もドイツ・ボン(ラ・レドゥートウ)での貴志作品演奏が非常に喜ばれました。CD に復刻された貴志指揮のベルリンフィルと演奏するマリアバスカの豊かな声量とスケールの大きさを聴き、また、交響曲《仏陀》の楽譜に「ワーグナーのタンホーザーのごとくに」と貴志が記していることなどから、貴志の歌曲をピアノ伴奏で演奏する際も「オペラアリアの様に表現することを貴志は望んでいる」と私なりに理解しております。

17 才からスイス、ドイツに留学して公式に作曲と指揮で活躍し、帰国後に指揮者として認められ大いに将来を期待されて銀座に事務所を設置して更に活動しようとしていた時に 28 才で逝去した貴志康一は、将来にどんな構想を描いていたのでしょうか。1994 年から豊田と共に貴志康一を研究している村瀬博春氏の論考「貴志康一 日本人による西洋音楽理解に関するケーススタディー」を掲載させていただきます。貴志康一に思いを馳せる一つの手掛かりになれば幸いです。また、50 年間の豊田の演奏歴 1 つひとつを、当時を思い浮かべながら…感謝をこめてプログラムに記させていただきました。そして貴志の母校、甲南中学校・高等学校校長の山内守明先生は、本日、貴志康一の年譜をプレゼントくださり、プログラムには豊田の母校、桐朋女子高等学校普通科校長の内田美保子先生と共にお言葉を下さいました。山内守明先生、内田美保子先生、そしてウィーン国立音楽大学のマルクス・ハドゥラ教授、お言葉をありがとうございます。感謝申し上げます。

これからも一貫して演奏作品の理解と練習すること

に一生懸命に努めて参りたいと思います。「この世を去る瞬間まで歌唱技術は向上する」と言うボイスコーチを信じて、25 年前に教えられて実践している「身体を声楽の楽器として科学的視点で見ることで声楽の主観と客観のバランスを取る」という歌唱方法を探求して参りたいと思っております。皆様におかれましては、大いに「貴志康一」の作品を楽しんでいただけましたら幸いに思います。

清冽に音楽に生きた貴志康一、それを全力で支えた父・弥右衛門様とご家族様…謹んで御霊に 本演奏会をお捧げいたします。感謝をこめて、豊田喜代美

○ Prof. Markus Hadulla よりのお言葉
舞台デビュー50周年おめでとうございます。

長く、自己成長や仕事へのモチベーションを維持するという健全なキャリアがあってこそ達成できる節目であり、まさに誇りとすべき出来事です。

作曲家・貴志康一の音楽による素晴らしいプロジェクトのご成功をお祈り申し上げます。

Univ.-Prof. Markus Hadulla (マルクス・ハドゥラ) ウィーン国立音楽大学(mdw)リート解釈学教授

Ich gratuliere Ihnen zu Ihrem 50 jährigen
Bühnenjubiläum.

Das ist ein Meilenstein, der nur mit einer langjährig
gesunden Karriere, mit steter Selbstentwicklung und
Motivation bei der Arbeit erklommen

werden kann und auf den man zurecht stolz sein darf.

Für Ihr wunderbares Projekt mit der Musik des
Komponisten Koichi Kishi wünsche ich Ihnen viel
Erfolg.

Univ.-Prof. Markus Hadulla

Professor für Liedgestaltung an der Universität für
Musik und darstellende Kunst Wien (mdw)

■プログラム掲載の貴志康一歌曲歌詞は割愛する。

○ 《 豊田喜代美さんのコンサートに寄せて 》

甲南高等学校・中学校 校長 山内 守明

甲南学園は1919年平生鈞三郎をはじめとする神戸の財界関係者の有志によって甲南中学校として創立し

ました。その後、1923年には旧制七年制高等学校となり戦後の学制改革を経て現在の甲南高等学校・中学校、甲南大学に至っています。

創立者平生鈞三郎は建学の理念を「人格の修養と健康の増進を重んじ、個性を尊重して各人の天賦の特性を伸張させる」とし、この理念のもと数多くの卒業生が各界で活躍してまいりました。

その中の一人に貴志康一がいます。貴志康一は在学時代にヴァイオリンを学び、その後スイス、ベルリンに留学、日本で初めてストラディバリウスを購入・演奏しました。特にベルリンでは、巨匠フルトヴェングラーのもとで指揮者・作曲家としての才能を開花させ、高い評価を得ました。貴志はベルリン・フィルによる自作曲の録音も行っており、この中には日本歌曲も含まれています。

今回、豊田喜代美さんの公式演奏歴 50 周年記念リサイタルにおいて「豊田喜代美公式演奏歴 50 周年記念リサイタル～次代に繋ぐ・貴志康一」と題して貴志康一の歌曲を取り上げていただくこととなりました。貴志康一は 28 歳の若さで夭折した音楽家であるため、その活動期間が短く、黎明期の音楽史の中で埋もれてしまいそうな存在ですが、当時圧倒的な輝きを放っていた貴志の音楽を、今再現できることを大変嬉しく思っています。時代を超えて歌い継がれるべき音楽を、豊田喜代美さんの情熱と研鑽によって現代に甦らせてくださったことに深く感謝申し上げますとともに、今後ますますのご活躍をお祈りいたします。

貴志康一とストラディバリウス・キングジョージ



○ 《 豊田喜代美さんの公式演奏歴五十周年記念
リサイタルに寄せて 》

桐朋女子高等学校校長 内田美保子

この度、本校の卒業生であり、長年声楽家として活躍されている豊田喜代美さんが、公式演奏歴五十周年を記念するソプラノリサイタルを開催されること、心よりお慶び申し上げます。

豊田さんは桐朋女子高等学校を卒業された後、桐朋学園短期大学部芸術科音楽専攻に進学され、そこで声楽に目覚めて桐朋学園大学音楽学部演奏学科声楽専攻に編入学され、現在まで声楽家として活躍してこられました。

私はこれまで、音楽の道に進まれる方は、幼少の頃からその道一筋に進んで来られたのだろうと思い込んでおりましたが、豊田さんの場合、幼少の頃からピアノを学ばれたものの、中学時代にバレーボール部の活動に打ち込み、音楽ではなくスポーツの道をお考えになった時期もあったとのこと。豊田さんは本校在学当時、体育祭で短距離走とリレーの選手に選抜されて情熱を傾け、その経験を通して気付きを得たと語っていらっしゃいます。音楽とスポーツは一見対照的な分野ですが、「身体を操る」という点において共通点がありますのでその両方を目指したご経験をお持ちの豊田さんだからこそ可能になった表現があるのかもしれないと想像しております。

豊田さんは、ご自身を音楽の道へ導いたものは一人一人の個性を重んじる桐朋女子の教育理念と、その理念を反映したカリキュラム、そして周囲の友人や教員の存在であったとおっしゃっています。ご卒業後にご友人と本校の八ヶ岳高原寮に宿泊なさったというお話も伺いました。このようなお話を伺うと、豊田さんがいかに桐朋女子の教育をご自身に活かしてくださったかが感じられ、弱輩の身ながら、桐朋女子の教員の一人として本当にありがたく思います。

この度のリサイタルでは、“感謝をこめて次代になく「貴志康一」の歌曲”という副題の通り、夭折の天才作曲家といわれる貴志康一の歌曲を未発表曲も含めて演奏なさるとのことです。

貴志康一の歌曲をより多くの人に知らしめ、ひいては、日本の情感を音楽を通して世界に広

めんとする強いお気持ちを感じます。このような演奏を聴く機会を得たことに感謝し、豊かな時間を共有させていただこうと思います。



○ 豊田 喜代美 *Kiyomi Toyoda* 声楽家,ソプラノ

桐朋学園大学音楽学部声楽科卒業。ドイツ・ケルン音楽舞踏大学マスタークラス留学。北陸先端科学技術大学院大学博士前期・後期課程修了。博士(知識科学/博士論文「クラシック音楽歌唱における知識創造モデルスキルサイエンスからの接近」)。声楽を、萩谷納、柴田睦陸、柴田喜代子、E.ボゼニウスに師事し、中山悌一の薫陶を受けた。ボイスコーチのN.スターノ、S.パッティ、コレパティオアのF.フェッラーリス、F.エーガーマン、H.フィールテル、W.フックスベルガー、S.ローチに師事した。

オペラ作品では主に東京二期会、日生オペラ劇場、東京オペラプロデュース主催公演などに出演し、《フィガロの結婚》ケルビーノ・スザンナ、《ドン・ジョヴァンニ》ツェリーナ、《イドメネオ》イリア、《コジ・ファン・トゥッテ》デスピーナ・フィオルデリージ、《セヴィリアの理髪師》ロジーナ、《ペレアスとメリザンド》メリザンド、《こうもり》ロザリンデ、《魔弾の射手》アガーテ、《夕鶴》つう、《ヴォツェック》マリー、《蝶々夫人》、《ファルスタッフ》ナンネッタ、《ホフマン物語》全4役、コンチェルトンテ《トスカ》、他、日本創作オペラ作品初演は、間宮芳生《夜長姫と耳男/夜長姫/水戸芸術館柿落し》夜長姫、池辺晋一郎《呼び交わす山河/預源院/石川県立音楽堂柿落し》、モノオペラー柳慧《火の遺言》、NHKオペラー柳慧《平泉炎上》かえで、他20作品以上の主役を歌っている。オーケストラ作品では、新日本フィル、日本フィル、東京都交響楽団、東京交響楽団、NHK交響楽団、新星日響、

シティフィル、大阪フィル、大阪センチュリー響、関西フィル、オーケストラ・アンサンブル金沢、札幌交響楽団、九州交響楽団、群馬交響楽団、名古屋フィル他の定期演奏会に出演し、ベートーヴェン「ミサ・ソレムニス」「交響曲第九番」、モーツァルト「レクイエム」「モテット」他、J.S.バッハ「マタイ受難曲」他、ブルックナー「ミサ曲」他、ヘンデル「メサイア」他、ブラームス「ドイツ・レクイエム」他、マーラー「交響曲第二番」「交響曲第四番」「子供と角笛」「交響曲第八番」Sop II L.ポップ、B・ヴァイクルと共演、ブーレーズ「プリスロンプリ」日本初演、ウエッバー「レクイエム」、他のソリストを演奏。『N響90周年記念シリーズ/若杉弘指揮/ヘンデル「メサイア」モーツァルト編』、『新日本フィル/朝比奈隆/《ニーベルングの指輪》全曲』他、の演奏会ライブがCD化。米国のシラキューズ交響楽団ではウエッバー作曲「レクイエム」、北オランダ交響楽団定期演奏会とのモーツァルト作曲「モテット」では3回の演奏会全てで全聴衆のスタンディングオーバーセッションを受けた。これまでに共演の指揮者は小澤征爾、若杉弘、朝比奈隆、渡邊暁雄、秋山和慶、尾高忠明、高関健、大野和士、小林研一郎、岩城宏之、小泉和裕、井上道義、沼尻竜典、大友直人、黒岩秀臣、ホルスト・シュタイン、ロビン・オニール、ヘルベルト・ケーゲル、ズデニェク・コシュラー、ジェームズ・ロツホラン他。

NHKニューイヤーオペラコンサート、題名のない音楽会他のT.V、FM出演。教会音楽家(ドイツ国家資格C)。沖縄県立芸術大学教授(2010-2017)。東京大学非常勤講師(2018-2021)。

第11回ジローオペラ賞(受賞対象:ロジーナ)受賞。第16回サントリー音楽賞(受賞対象:デスピーナ、ホフマン物語4役、毎日ゾリステン・リサイタル、天地創造のソリスト)受賞。

CDは1997年リリース木下牧子『浪漫歌曲集』(FOCD9496)現在ロングセラー中。2023年11月オペラ《Mulier fortis/勇敢な婦人・細川ガラシャ》コンチェルタンテ(旧東京音楽学校奏楽堂)。2024年5月CDリリース:貴志康一歌曲(赤いかんざし、かもめ、かごかき、行脚僧、天の原)ピアノ渡辺健二。木下牧子モノオペラ「暁の星」夏目漱石“夢十夜”世界初演、ピアノ仲村渠悠子(FOCD9898)。

2025年6月研究論文『声楽家・柴田睦陸著「発声論」

の今日的検証と声楽発声研究の展望』日本声楽発声学会誌 声楽発声研究No.15発行,共著:豊田喜代美・森幹男。

二期会、日本声楽発声学会、ウィーンハプスブルク宮廷芸術友好協会、グレゴリオ聖歌学会,各会員。日本歌唱芸術協会(本部:沖縄)代表理事。

公式ホームページ<https://mulierfortisgratia.com/>

リサーチマップ<https://researchmap.jp/gratiamusic1.11.4>

■ プログラムに、1994年から共同研究を行っている村瀬氏の以下の論考を掲載した理由は、本記念リサイタルは、次代に「貴志康一」その人と作品をつなぐ願いをこめて開催したものであり、貴志康一に心を寄せる確かな手がかりが必要と思い掲載した。また、ホールの大スクリーンに写真による貴志の母校、甲南中・高等学校校長先生による貴志の年譜のプレゼンを実施した。

○ 貴志康一 日本人による西洋音楽理解に関する
ケーススタディー

村瀬 博春

※初出 2001年3月、譜例・写真は省略

はじめに

日本は戦前から西洋音楽の世界有数のマーケットであり続け、またここ十数年来の日本各地の西洋音楽専用ホールの開館数は目を見張るものがある。そして小澤征爾氏が2002年のシーズンから、西洋音楽の頂点とも言えるウィーン国立歌劇場の音楽監督に就任することが決定したことは、この ような流れの極致を象徴するかのようでもある。それゆえこうした動向を踏まえて、改めて日本人による西洋音楽の理解について論考することは、多少とも意義があるのではないだろうか。そこで抽象論となることを避けるために、今回は、近年夭逝の天才音楽家として評価が高まってきた貴志康一の業績に即して論考することとした。なお本論における西洋音楽とは、ヨーロッパを中心にルネサンス期以降多彩な展開を遂げた、いわゆるクラシック音楽を指す。

日本における西洋音楽の本格的な受容は明治時代に始まるが、歴史上に確認される西洋音楽との接点は16世紀に遡る。断片的な記録によれば、織田信長は天正9年(1581)安土のセミナリヨを突然訪れ、生徒たちの

クラヴィオやヴィオラ演奏を非常に喜んで聴いたと伝えられている。さらに天正18年(1590)に帰国した遣欧使節が翌年上洛し、聚楽第で豊臣秀吉に謁した折りにリュート、ハープ、レベック、クラヴィオの合奏を行い、秀吉は熱心に聴き入ったとも伝えられている(註1)。

以上の事実から、鑑賞や演奏における日本人の西洋音楽に対するある種の適性が垣間見えてくる。そして、小澤征爾氏がウィーン国立歌劇場の音楽監督に就任することが決定したことや、日本の至る所にパイプオルガンを設置した、良質の音響を誇る西洋音楽専用のホールが開館していること、さらには、日本が現在も「西洋音楽消費大国」であるという事実も、こうした歴史的な適性と無縁ではないと考えられる。

その一方で、キリスト教信仰を持たない日本人に西洋音楽は理解できないという、特に欧米人による意見もある。1975年に朝比奈隆氏が大阪フィルハーモニー交響楽団とともに作曲家アントン・ブルックナーゆかりのオーストリアの聖フローリアン教会で、ブルックナーの交響曲第7番の演奏会を開催しようとしたところ、開演前に外国の紳士が朝比奈氏を訪ねて、あなた方にブルックナーは理解できないという趣旨の発言をしていたのは、その象徴的な逸話であろう。(なおその紳士は終演後には現れなかったそうである)。

確かに室町時代末期から桃山時代にかけての日本における西洋音楽はキリスト教伝道と密接に結びついていた。また、歌オラショに認められるように、日本における西洋音楽の命脈は、唯一キリスト教典礼音楽によって400年以上にわたって断絶されることなく保たれてきた事実もある。

しかし、故セルジウ・チェリビダッケや、ギンター・ヴァントが来日公演で特にブルックナーを演奏した際に、その真摯な鑑賞態度で老巨匠に感銘を与えた日本の聴衆は、恐らく大部分がキリスト教信仰を持っていないだろう。また筆者自身しばしば経験することであるが、特にヨーロッパのオーケストラは、来日公演で、母国での公演以上に芸術的完成度の高い演奏をする。それはなぜだろうか。そして、故ヘルベルト・フォン・カラヤンがヨーガを日常生活に取り入れたり、チェリビダッケが禅思想に深く傾倒して孤高の境地を開拓していったりした事実は何を意味するの

だろうか。

以上の点から、西洋音楽には、「西洋」という枠組みのみに固執していたのでは看過されてしまう、極めて本質的な構造があるのではないかとの展望が開ける。それはすなわち、西洋音楽は日本を含めた東洋思想によって補完されるとの展望である。それゆえ貴志の業績を今日再検証することの意義は、この展望を少しでも具体化し、日本人が「日本人であること」を通して、西洋音楽にどのような可能性を開拓することができるかについての指針を明確化することにある。

1 生涯

本章では、誕生から逝去まで、貴志の生涯を概観するとともに、適宜行為の意義や時代背景について筆者の解釈を織り込んでゆくこととしたい。なお、貴志の年譜については毛利真人氏の労作「貴志康一年譜」に多くを負っていることを、謝意とともに記しておきたい。

貴志康一は明治42(1909)年3月31日、現在の大阪府吹田市に生まれた。父親の弥右衛門は紀州土族の出身で、東京帝国大学哲学科で美学を学び、文学、絵画、音楽など西洋の文化を深く愛好すると同時に、臨済禅に帰依し、関西における茶道の振興にも大きく寄与した。母親のカメは百年来続いた仙洞庄屋で代々文人や数寄者を輩出した家柄の出である。

ヴァイオリンを嗜んだ母の手ほどきにより9歳からヴァイオリンを弾き始め、また10歳からは油絵も描き始め、しばしば父の友人であった太田喜二郎(文展、帝展、日展作家)の指導を受けた他、芦屋の東にある打出窯で作陶も行った。この頃は音楽よりも造形芸術に傾倒していた模様で、将来は画家になりたいと常々語っていたという。11歳の時に世界的ヴァイオリニスト、ミッシェル・エルマンの実演に接し、深い感銘を受けて本格的にヴァイオリンを学ぶ決心をする。そこには、色覚検査で若干の問題が指摘され、周囲から画家への道が困難であることを諭されたことも少なからず影響したようだ。

1920年代の関西には、ロシア帝国の崩壊にともなう亡命した優秀な音楽家が多数在住しており、貴志の西洋音楽への眼は、そうした主にユダヤ系ロシア人の音楽家によって開かれていった。1923年貴志14歳の時、ロシア人ヴァイオリニストのミハエル・ヴェクスラーが偶々散歩の途中で貴志の練習の模様を聴いた

のが機縁となって、師事するようになったのははじめ、同年から指揮者のヨーゼフ・ラスカを家に招いて音楽理論と和声を学んだ。1925年にはプロの音楽家となることを正式に決意し、大阪放送局(JOBK)が結成したオーケストラに、ヴァイオリン奏者として在籍した。翌1926年には朝比奈氏の師となる指揮者のエマヌエル・メッテル(ユダヤ系ロシア人・1878～1941)が同オーケストラの専属指揮者として来日し、貴志はオーケストラ活動をとおして、メッテルやラスカから西洋音楽の基礎を学んでいった。さらに同年、同じくロシア人ヴァイオリニストのエフゲニー・クレーンにも師事するが、貴志は次第に本場で本格的に西洋音楽を学ぶ必要性を痛感していった。

貴志の父親と親交があった時計商が、ジュネーブ音楽院の校長の息子であったことが機縁となり、1926年12月単身で海路スイスに渡り、翌年ジュネーブの国立音楽院ヴァイオリン科セカンドクラスに入学し、レオポルト・アウアー門下のアーロン・クラッセに師事する。プルミエ・プリ(1等賞)を得てファースト・クラスに進級し、1928年6月、2等賞を得て卒業している。同年クラッセの紹介で、名ヴァイオリニストで教授法にも定評のあるカール・フレッシュから指導を受ける機会を得、ベルリンに居を構えてベルリン高等音楽院で正式にフレッシュに師事すると共に、音楽理論をロバート・カーンに学ぶ。

1929年には念願のストラディヴァリウス“キング・ジョージ三世”を入手し、シベリア鉄道経由で帰国し、翌年にかけて大阪、京都、東京で演奏会を開催する。当時の演奏会記録によれば、1929年10月25日にJOBKで近衛秀麿のピアノ伴奏によりブルッフの協奏曲第1番他を演奏し、1930年1月25日には日本青年会館でレオ・シロタの伴奏によりベートーヴェンの『クロイツェル』他を。また1月30日には同じく日本青年会館で近衛秀麿指揮、新交響楽団をバックにブルッフの第1番とメンデルスゾーンの協奏曲などを演奏している。これらの演奏会評は概ね好意的であるが、それは貴志が学生であることを前提としたものであり、手放しの絶賛ではなかった。しかし、この時期誰よりも貴志自身がヴァイオリニストとしての自己の資質に、ある種の限界を感じ始めていたと考えられる。

1930年5月頃に再度渡欧をし、ベルリン高等音楽院で、ヴァイオリンをフレッシュの高弟ヨーゼフ・ヴォルフシュタールに、作曲をパウル・ヒンデミットに師事する。同時に、ラインハルト演劇学校にも通い、主に夜間に演劇を学ぶ。翌1931年2月にヴァイオリンの師ヴォルフシュタールが急逝し、貴志は以後新たな師にヴァイオリンを直接師事することはなかった。またこの少し後に、ストラディヴァリウスを有利な条件で売却している。その他に注目したいのは、ベルリンで日本を紹介する文化事業の開催を計画していることで、こうした日独、東西文化の架橋としての活動は、この後重要な意味を持つようになる。

この年の最大の出来事は、往年の名指揮者ヴィルヘルム・フルトヴェングラー(1886～1954)の薫陶を受けたことである。これは、貴志が正式にフルトヴェングラーに指揮法や作品解釈を師事したというよりは、友人として、また音楽の偉大な先達として親しく接したと考えるのが妥当なようである。フルトヴェングラーが、貴志や京極高鋭とされた人物と共に撮影した写真を終生大切に保管していた事実は、フルトヴェングラーの、貴志に対する特別の思いを彷彿とさせる。その後のフルトヴェングラーとナチスの確執や、フルトヴェングラー自身のスイスへの亡命、そしてベルリンが連合軍の進攻により壊滅状態になったことなどの状況を考えると、1枚の写真が保持されることがどれだけ大変なことかは想像に難くない。

貴志は1931年の7月に帰国し、まず貴志家にゆかりの深い京都花園妙心寺の塔頭、徳雲院に逗留する。1929年に帰国した際にも、まず同所に逗留していた事実ともあわせて、この行動パターンは注目する価値がある。もちろん、静かに旅の疲れを癒すことはこの逗留の重要な目的であったことだろう。それでは、その癒しの構造はどのようなものであったのか。結論から述べれば、自己の文化的アイデンティティーの再確認による、個々の体験の経験化と位置付けることができる。

若い貴志にとってヨーロッパでの体験は、まさにカルチャーショックの連続であったことだろう。また同時に、家族の理解によってそのような体験をすることができたことに対して、是非とも芸術上の成果をもって報いたいという強烈な思いも抱いていたことだろう。それゆえ貴

志にとって、個々の体験を体系付け、そこから芸術的独創性を現出させるような「知」の構築が急務の課題であったことは疑いない。この「知」の構築作業の過程で、個々の体験が人生において意義と価値を持つ経験となり、そうした体験の骨肉化の感覚が自己に自信と落ち着きを与え、そのことが癒しとなるのである。

そして、そこには当然日本人としてのアイデンティティーの再確認が基底となっている。つまり、日本人としてのアイデンティティーが西洋文化に接した際に、その同一性と差異性を測る尺度となるのであり、その計測行為によって西洋文化との接触体験が知へと進化してゆくのである。またその前提として、前回の中国、東南アジア、エジプトを経てヨーロッパに入った体験も含めて、異文化との出会いが日本人としてのアイデンティティーを根本的に問い直す契機となっていたことも確認しておく必要がある。それゆえ、臨済禅は貴志にとって幼少時からの精神的バックボーンであることを考えれば、帰国後ヨーロッパでの様々な体験の印象が褪せないうちに、こうした知の構築作業を行う 場所として妙心寺を選んだのは必然性があったと考えられる。

すなわち、他者を知ることは自己を知ることであり、同時に自己を知ることとは他者を知ることであるという、生命の認識進化のプロセスのマクロな展開がここに確認されるのである。

妙心寺逗留の後、貴志は意欲的に文化活動に着手する。まず1931年9月には日本芸術の発展、機関誌や映画による世界の紹介、および外国の芸術、学術の紹介を目的とした「日本芸術協会」の設立を計画した。顧問には浜田青陵、羽田亨、太田喜二郎らが名を連ねたが、実現には至らなかった。しかし翌

10月には、ドイツ語による随筆「私の家族」がドイツの女性誌『Die Dame』に掲載され、その中で日本の年中行事などを広く紹介している。また同じ頃に貴志学術映画研究所を設立し、カラーフィルムを用いてロケーションを行い『海の詩』(辻部政太郎責任構成)、『十分間の思索』(中井正一責任構成)の制作が進められ、貴志の意図は別な形で実現していった。(なお、この2本の 映画は翌年10月に大阪と京都で上演されている)。同時に、この年帰国後7回の貴志自身による ヴァイオリンの演奏会が開催された。

翌1932年春、貴志は日本文化紹介映画の脚本を数本執筆するとともに、その基礎となるロケーションを行う。また、ピアノ、独唱、琴、尺八、ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロによる舞踊劇『祭り』を5月3日に発表し、その中で歌曲「天ノ原」、「赤いかんざし」、「里人の踊り(風雅小唄)」、「かごかき」が創唱された。このうち、「赤いかんざし」、「かごかき」の2曲が10月に『浪花民謡』として三木開成館から出版された。同月21日、コロンボ、ナポリ経由で海路渡欧。なおこの年、交響曲『仏陀』とヴァイオリン協奏曲の構想に着手した模様である。

1933年5月貴志はベルリンにて、ウーファ社の協力により日本で撮影されたフィルムをもとに文化映画『鏡 - 日本家庭の伝統』の制作に着手する。この映画は、この年の10月にベルリン動物園ウーファ・パラストにて上映され注目を集めた。また、この映画に使用した音楽を素材として、交響組曲『日本組曲』を作曲する。この時期貴志は指揮者、作曲家のエドヴァルド・モリッツに指揮法やオーケストレーションを学んでおり、同時にヴァイオリン協奏曲の第一楽章が完成する。

1934年3月29日、ウーファ・フィルム・アクティエンゲゼルシャフトの主催、日独協会の後援によりウーファ劇場ウニヴェルズムにおいて、「日本の夕べ」が開催された。

これは文化映画『鏡』と『春』の上映と、貴志の指揮、ウーファ交響楽団による『日本組曲』、ヴァイオリン協奏曲第1楽章(独奏:ゲオルク・クーレカンプ)、8曲の日本歌曲(独唱:マリア・バスカ)の演奏によって構成されたものである。この「日本の夕べ」には各国大使や大臣が列席するなど、華々しい雰囲気の中に作曲家、指揮者としての貴志の欧州楽壇デビューが飾られた。

またビルンバッハ社から『7つの日本歌曲』が出版された。歌詞はローマ字表記の日本語と、ローレ・コルネルによるドイツ語の訳詩が併記され、中扉のタイトルには、表現主義やユーゲントシュティルの趣味を反映した文字が使われている。このユーゲントシュティルへの傾向は、当時のドイツには、ユーゲントシュティルの雰囲気はまだ色濃く残っていたことを示している。それゆえドイツでの貴志の芸術活動や、その概ね好意的な受容は、ワイマール体制からナチスの体制への移行過程における文化状況、特にその重層性を示すものとして興

味深い。見方を変えれば、このユーゲントシュティル趣味が、その後の日本とドイツとの文化的、政治的、軍事的な結び付き強化の土壌となったと考えることもできる。

この年の6月には、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団と交渉を始め、またフルトヴェングラーに自作を紹介してもらおうべく働きかけを行っている。また8月にはホテルに籠もり、作曲に没頭し、オペレッタ『なみ子』、交響曲『仏陀』、交響組曲『日本スケッチ』、ヴァイオリン協奏曲の第2、3楽章などが完成されたものと考えられる。

貴志の在欧中最大の快挙とすることができるのは、1934年11月18日にベルリン・フィルハーモニー管弦楽団を指揮した演奏会である。(なおベルリン・フィルに日本人が客演したのは、近衛秀麿以来2人目である)。

プログラムは、最初がグルックの『アルチェステ』序曲、2曲目が貴志の交響曲『仏陀』、3番目にマリア・バスカを独唱とするオーケストラ伴奏版による貴志の歌曲「花売り娘」、「行脚僧」、「芸者」、「かごかき」、「富士山」、「力車」。休憩を挟んで4曲目にドビュッシーの『牧神の午後への前奏曲』、5曲目に貴志の『日本スケッチ』、最後がR. シュトラウスの交響詩『ティル・オイレン・シュピーゲルの愉快ないたずら』であった。

この演奏会について、当時の新聞はこぞって絶賛した。しかしその一方で、後年、貴志についてベルリン・フィルを指揮して成功を収めたこと自体は驚くにあたらないと主張する向きもあった。その理由は、同オーケストラは劣悪な指揮者でも良い演奏ができるからだというものである。

確かに、ある意味で指揮者を選ばないというベルリン・フィルの特質は、今日も継承されている。指揮者の大げさな身振りを全く無視して、コンサートマスターをはじめ楽員全員が譜面台をのぞき込んで演奏するというベルリン・フィルの「微笑ましい」光景は、筆者自身しばしば目にする。

それでは、貴志のベルリン・フィルへのデビューもその程度のものであったのだろうか。この点を判断する手がかりとして、現在残されている、貴志が同オーケストラとSPレコードに録音した『日本組曲』、『日本スケッチ』の演奏がある。言うまでもなく貴志の作品は、ベルリン・フィルにとってベートーヴェンの交響曲のような自家薬籠中のものではない。ましてや、音楽で日本的情緒

を表現するとなると、単に音符を音にするのみならず、日本の音楽、ひいては日本の文化についての大きな知識は当然前提となる。それゆえ、いかにベルリン・フィルの高度な演奏能力をもってしても、貴志とオーケストラとの間に共通の芸術的な理解がない限り、演奏は瓦解してしまう。

しかし、遺された録音は明確な音楽的感興を伝えており、特に自然な小節(こぶし)の付けかたなど、日本の情緒の表出についての完成度は特筆される。それゆえ、貴志の意図にベルリン・フィルが深い理解と共感をもって応えていることは明かであり、この録音から、1934年11月18日の演奏会がいかに感銘深いものであったのかを、容易に想像することができるのである。(貴志の成功に対する批判的な論評には、多分に裕福な家庭に育った若年者であることへの妬みがあったことは想像に難くない)。

なお、一部の記録には、貴志はこの後2回ベルリン・フィルを指揮したとされている。例えば1935年1月15日付のフランスの新聞クリエール・ムジカル紙には、“再度”ベルリン・フィルを指揮したと記されているほか、貴志は1935年1月14日に、ウィーン在住の声楽家田中路子に宛て、2月下旬に自作の歌曲を数曲、自身の指揮、ベルリン・フィルの演奏で歌って欲しい旨の手紙を出している。またその文中で、ベルリン・フィルへ出演料を払わねばならないので、田中への出演料は勤弁願いたいとも書かれている。つまりこの演奏会は、ベルリン・フィルの主催公演ではなく、貴志が私的に企画したものであることがわかるが、田中がどのように対応したかは不明である。

ベルリン・フィルの100年史(100Jahre Berliner Philharmonisches Orchester 1982)には、11月18日の演奏会の記録はあるが、それ以外の貴志と同オーケストラの演奏についての記録はない。しかし、貴志の私的な企画による演奏会は公式の記録には載らないだろうし、オーケストラ側がその演奏会により臨時収入を目論んだとすれば、意図的に演奏会の記録は残さなかつたらう。

それゆえ、100年史に掲載されていないことをもって、貴志とベルリン・フィルの演奏会が1934年11月18日以降開催されなかつたと結論付けることはできない。ま

た、先述の貴志とベルリン・フィルとの録音が1935年3月27、28の両日であることから、前年11月のデビュー演奏会以来、この両者が何の接触も持たなかったと考えるのは不自然であり、私的な演奏会が開催された可能性は極めて高い。また、実際録音で聴く演奏の完成度の高さも、複数の公演およびその準備の作業を経て、オーケストラが貴志の作品にさらに深く習熟していった結果と考えることもできる。

この録音の翌日の1935年3月29日早朝、貴志はベルリンを発ち、空路ナポリに向かい、そこから海路帰国の途についた。この帰国はいささか唐突な印象を与える上、自作の映画フィルムの扱いや、オペレッタ『なみ子』に係る諸権利の交渉を、ドイツ在住の知人に委ねている事実も注目される。またその一方で、貴志は帰国後ベルリン・フィルの日本招聘を計画し、交渉に着手している。

これらの事実は、貴志がベルリンにおける今後の活動にある種の不安を抱いていたことを窺わせる。ドイツにおける日本文化への関心は、むしろ貴志の帰国後に急速に高まっていったことを考えれば、当時の貴志には無限の可能性が広がっていたはずである。それだけに、この時期の急な帰国は不可解と言えなくもない。それゆえ、ここに政治的な要因を想定することもできるのである。なおこの点に関しては、後で詳述したい。

5月3日に帰国した貴志は、マスコミ各社への挨拶を早々にすませて、妙心寺を訪れる。そして6月以降、日本における音楽文化発展の基盤整備や、日本と海外の文化交流を目的とした組織設立の準備活動を始めた。また、9月12日に大阪で宝塚交響楽団を指揮してシューベルトの『未完成交響曲』、ベートーヴェンの『コリオラン序曲』そして自作の歌曲を演奏し、指揮者としての本格的な日本デビューを果たした。続く11月26日には新交響楽団(現NHK交響楽団)を指揮し、ベートーヴェンの『コリオラン序曲』、チャイコフスキーの交響曲第6番『悲愴』、シューベルトの『未完成交響曲』、ワーグナーの『ニュルンベルクのマイスタージンガー』前奏曲を演奏し大きな成功を収めた。

当時の新響は、かつての常任指揮者近衛秀麿と袂別して改組した直後であり、若くて才能あふれる貴志の登場により、オーケストラは清新な活力を発揮した。特

に36年2月の定期公演におけるベートーヴェンの『第九交響曲』は、“現在の日本として聴き得られるほとんど最高の「第九」演奏であった。(諸井三郎)”と絶賛される歴史的な演奏であり、3月に追加公演が実施された。

さらに4月の定期公演ではドイツの文化親善大使として来日したピアニストのウィルヘルム・ケンプと協演し、ベートーヴェンの4番、バッハのヘ長調、モーツァルトの21番の協奏曲を演奏した。ほか、5月にはケンプのお別れコンサートでモーツァルトの20番、ベートーヴェンの1番、5番の協奏曲を協演した。

そして、5月28日の新響とのベルリン・オリンピック日本代表サッカー選手壮行演奏会で、ブラームスの『大学祝典序曲』とベートーヴェンの『第九』を演奏したが、結果的にこれが貴志の生涯最後の演奏会となった。(註2)

一連の新響との演奏会で、貴志は多忙のあまり自らの健康をかえりみることができなかつたのであろうか、腹膜炎を悪化させて6月に入院を余儀なくされた。9月には病状が悪化し一時危険な状態となったが、父親をはじめ家族の献身的な看病の甲斐あって回復にむかった。しかし同年10月27日に妹照子が、また11月7日には父弥右衛門が相次ぎ亡くなるなど不幸が重なったことが貴志の健康の回復を妨げ(註3)、翌1937年11月17日、楽壇復帰の願いもかなわず28歳の若さで、大阪で逝去した。

以上、貴志康一の生涯を概観した。言うまでもなく貴志が生きた時代は、日本が第2次世界大戦に突入してゆく時期である。この時代の日本には、世界に対する自国のアイデンティティーを正当に認知させたいとする国家的な意志が働いていたと考えることができる。結果としてこうした精神的風潮は、一面で国家主義的な傾向を加速させた。1933年の国際連盟脱退も、そのような潮流に位置付けることができる。そしてそこには、政治、経済、軍事面のみならず、独自の文化的伝統を有する国家としてのトータルな国際的評価が未だ確立されていないことに対する、強烈な苛立ちもあったことは容易に想像できる。

たとえば西田幾多郎の姪にあたる高橋文は1936年から39年にかけてベルリン、フライブルクに留学したが、

彼女の「フライブルク通信」その他の随筆には、当時ヨーロッパにおいて日本が、“戦争に強いだけの野蛮な国”と見なされていることへの不満が、こうした状況を少しでも自分で改善して行かねばならないという決意とともにしばしば記されている。

ベルリンに本格的に居を構えた以後の、貴志の活動の根底にも高橋文と同様な思いがあったことは明白である。そして特にカラー映画など、当時の最も先進的な媒体を駆使して日本を広くヨーロッパに紹介しようと尽力したことは、ヨーロッパにおける日本観を、優れた文化を有する大人の国家として根本的に、かつ有効に改善しようという貴志の痛切な思いのあらわれと解釈することができる。そして貴志の作曲活動も、そうした思いが出発点となっていることは改めて述べるまでもない。詳細は次章で述べるが、貴志にとっては、映像に付随した音楽をさらに深化させ、映像の助けなしに、ヨーロッパの聴衆が、日本文化の根幹に関わるイメージ(像)を構築できるようにすることが究極の課題であったことは想像に難くない。

さて、貴志の滞欧時期はナチスが政権の基盤を確立してゆく時期にあたる。そこで本章の最後に、貴志の政治観について言及しておきたい。

まず、貴志のナチス観については、帰国後、特にヨーゼフ・ゲッベルスが設立した帝国音楽協会を念頭に置いて、ナチスの音楽政策を好意的に評価していることが注目される(随筆「思ひいづるままに」『音楽世界』1936年新年号)。しかし、それはR.シュトラウスやフルトヴェングラーを要職に就けた初期の時点に関するもので、この論評をもって貴志を非難するとすれば、それは余りに早計である。恐らくR.シュトラウスやフルトヴェングラーも、当初は貴志と同じ見解であったことだろう。実際、ナチスが国民の広い支持を得て政権を獲得したことを考えれば、当時のドイツの世論も文化に限らず、概してナチスの政策を評価していたことは明らかであり、貴志の言動も理にかなっているのである。

ナチスによる反ユダヤ主義と外国人排斥の傾向は、1933年の政権獲得から1938年11月9日のいわゆる「水晶の夜」に至るまで徐々に加速していったと考えられる。しかし、特に反ユダヤ主義に関しては、最初のうちはベルリン在住の外国人に目立たぬように運動が進

められていたようだ。(註4)

続いて、フルトヴェングラーやヒンデミットとの関係が、ベルリンにおける貴志の社会的な立場に何らかの影響を与えたのかについても検証しておく必要がある。なぜなら、貴志がベルリン・フィルハーモニー管弦楽団を指揮して輝かしい成功を収めた1934年という年は、フルトヴェングラーの評伝では、フルトヴェングラーが、ナチスから親ユダヤ的で退廃的な芸術家と目されていたヒンデミットを公に擁護し、当局の姿勢を批判した、いわゆる「ヒンデミット事件」として銘記される年だからである。

フルトヴェングラーがドイチェ・アルゲマイネ・ツァイトウング紙に論評を掲載したのは、11月25日であり、貴志がベルリン・フィルハーモニーに登場したちょうど1週間後のことである。フルトヴェングラーもヒンデミットも、貴志のベルリンにおける恩人であることから、恩人がナチスと確執を生じれば、貴志の活動にも、ナチス当局から何らかの否定的な影響が及ぶという状況が、まず想定される。また後述するように、貴志の交響曲『仏陀』は、当時ナチスがユダヤ人の作曲家であったゆえに演奏を制限したとされるグスタフ・マーラーの交響曲第9番の主題を継承した部分があることから、フルトヴェングラーと当局との確執が決定的となった後では、この点が当局の攻撃的となったことも考えられ得る。それゆえ、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団との演奏会が、もう少し後に予定されていたならば、その実現は困難な状況に陥ったかも知れない。

しかし現在のところ筆者は、「ヒンデミット事件」前後で貴志とナチスの関係に変化があったのか。また、変化があったとすれば、それはどのようなものだったのかを明確に伝える資料を確認していない。ただ「ヒンデミット事件」以後のベルリンにおける演奏会や録音の状況を見る限りにおいては、貴志がナチス当局により何らかの活動の制約を受けていた痕跡は確認できない。また、フルトヴェングラーの「ヒンデミット事件」の論評を“手ぬるい”とし、この論評をもってフルトヴェングラーがナチス当局と緊張関係に入ったというのは過大評価だとする一部の意見があることも事実であり、「ヒンデミット事件」が社会に及ぼした影響は、フルトヴェングラーの評伝が伝えるほど大きくはなかったという見方も

できなくはない。

ただ、1935年に貴志が帰国を決意し、しかも映画の上映権等を委譲している事実から推して、自分が日本とドイツを頻りに往復できるような状況ではないとの判断をしたことは確かである。日本とドイツとの文化交流が、むしろその後ますます活発になってゆくことを考えると、貴志がドイツにおける活動の継続を断念したことは不可解と言えなくはない。ここに社会的な立場の微妙な変化を想定することもできるだろう。現時点でそれ以上のことを言うことはできない。いずれにせよ、ホロコースト前のナチスの活動や関係した人物の行動について、先入観抜きで再考する必要性を痛感する。

こうして貴志の生涯を振り返ってみると、確かに夭逝は悲劇的な事実ではあるが、見方を変えれば貴志は当時としては、最も良い時期を生きたといえることができる。特に1937年の日独伊防共協定から40年の三国同盟締結に至る日本とドイツの軍事的連携強化のプロセスを考えれば、貴志が持っていた日本文化に対する誇りと、ドイツ文化に対する造詣と敬意が、自身の本意とは全く別の次元で利用された可能性も否定できない。そうした状況となれば、貴志は今日肯定的に再評価されることはなかった。

貴志の没後、その存在は大戦前後の混乱により日本では急速に忘却されていった。しかし1949年、湯川秀樹博士が日本人初のノーベル賞を受賞した際の祝賀晩餐会で、貴志のヴァイオリンとピアノのための小品「竹取物語」が演奏されたことは、貴志のヨーロッパにおける成功の記憶が完全には忘却されていなかったことと、貴志は国際社会から国家主義に迎合した作曲家とは見なされていなかったことを端的に示している。

その後遺族の尽力により、貴志の母校である兵庫県芦屋市の甲南高等学校に1978年に貴志康一記念室が開設され、辻久子独奏、朝比奈隆指揮大阪フィルハーモニー交響楽団による貴志のヴァイオリン協奏曲が記念演奏された。その後指揮者の小松一彦氏、声楽家の豊田喜代美氏らが記念室に眠る交響曲『仏陀』や日本歌曲などの作品の意欲的な日本初演を行うとともに、録音や、さらなる関係資料の調査が行われた。

筆者が貴志の世界を知ったのも、こうした方々の真摯な努力があつてのことである。

註1:海老沢有道『洋楽伝来史 キリシタン時代から幕末まで』日本基督教団出版局1983年、皆川達夫『バロックの音楽』講談社現代新書を参照した。

註2:『N響40年史』(日本放送協会 1967年)は、貴志について2ページを割いている。貴志の没後30年という節目の年に刊行されたこの書物は、在世中から没後に至る貴志の評価を伝える貴重な資料と考えられるので、ここに全文を紹介しておく。

ここで、極めて短時間の接触ではあったが、貴志康一とワルター・ヘルベルトの二人について記しておくことは意味のないことではあるまい。いずれも当時の楽員聴衆に少なからぬ感銘を与えた指揮者であったからである。貴志康一は初めヴァイオリニストとして活躍したが、ドイツから帰国後1935年、9月12日大阪で指揮者としてデビュー、ついで11月26日、神宮外苑の日本青年館において、新響による帰朝演奏会を催した。ベートーヴェン作曲「コリオラン」序曲、チャイコフスキー作曲「交響曲第6番」、シューベルト作曲「交響曲第8番」、ワーグナー作曲「名歌手」序曲の全曲をスコアなしで指揮することは、今日では常識的であるが、そのころは正に画期的な光景であった。貴志はこれ以後、しばしば新響を指揮して楽壇の話題をさらったが、ひとときわ注目をひいた演奏は、1936年2月19日第164回定期公演のベートーヴェン「第9交響曲」、および4月22日 第166回定期公演ケンペ協演によるバッハ、ベートーヴェン、モーツァルトのピアノ協奏曲などであった。「第九交響曲」に関して、“貴志氏の指揮は極めて淡々としたもので、氏の第2回演奏会に於いて見たようなねぼっこさは洗われていた。第4楽章の解釈が最も面白かった。第1楽章は今少し堂々とした感じでありたかった。第2楽章はテンポが遅かったための不満が間々あったが、リズムがはっきりしていて面白かった。このような大物を指揮して、とにかくこれだけの優秀な効果を挙げ得た貴志氏の手腕は買われていい。(折田洋、音楽新聞、1936年3月1日)”

“この公演が新響改組以来の最も充実した演奏会であり、またわが第九上演史の上に画期的な足跡を残した事は疑いの無いところであろう。この輝かしい成績は偶然の賜物ではなく、全演奏者の異常な努力の結果であることは、演奏そのものがこれを証明している。殊に

その根底には新響自体の飛躍的成長が最大の原因に数えられなければならない。中でも3楽章アダジオの出来栄は素晴らしい。また第2楽章スケルツォは細部の粗雑さと線の太い悪魔的な感覚の希薄なために感銘を弱めていたとはいえ、従来わが国で行われた精彩の無い演奏を遙かに凌駕するものであった。(中略) 貴志康一氏の指揮については私は次のように考える。かれは今日迄のわれわれの持った最も才能ある指揮者である。殊にその表現の精力的な豊穡さと決断性は従来水準を遠く抜いている。(後略)(山根銀二 東京日日新聞) ”

“当時の出来栄は現在の日本として聞き得られるほとんど最高の「第九」演奏であった。貴志氏は去る3日の発表会に於いて示した危期をほとんど完全に乗り越えて今や新しい立場を把握しつつある。氏は管弦楽、独唱者及び合唱に対し、統一的表現を与え演奏全体を自己の思う所に導いていった。(後略)(諸井三郎 東京朝日新聞)” 等々の批評が寄せられた。また、4月14日の演奏会終了後、独奏者のケンプが「今夜の演奏は素晴らしい芸術的演奏でありました。こんな立派な演奏は私としてはベルリンでもそう何回も経験していません。新響がこんな立派な芸術的演奏を示されたことはまことに感激に堪えません」と語ったにもかかわらず、4月16日の東京朝日新聞紙上で大田黒元雄が「協奏曲の場合の新響の出来はどうも香ばしくなかった。多忙のために練習不足なことはわかっているけれど、それにしても 貴志君が例によって全部暗譜でしかも正確に指揮した熱心な努力を思えば、楽員諸君も真剣に勉強してもう少ししっかりと責任を果たすべきであったろう」と評したので、新響は大田黒宛の公開状を発表したほどであった。貴志の指揮振りについては、「内容空疎」(東京朝日新聞2月5日)と危惧する向きもないわけではなかったが、多くは「当代の超日本人的指揮者」(尾原 勝吉、フィルハーモニー23巻7号 1951年)と見ていたようである。彼は惜しくも1937年11月、29歳の生涯を閉じた。(一部を現代表記に直したが、漢字の選択は原文を尊重した)。

註3:この間の経緯については、貴志の父弥右衛門が創刊した茶道雑誌『徳雲』最終号に、貴志自身が書いた「父」という一文が明確に伝えている。なお『徳雲』は

弥右衛門の逝去をもって廃刊となり、最終号を弥右衛門の追悼特集とした。またこの「父」が、結果として貴志の絶筆となった。以下に全文を紹介する。

6月12日、東京に於て突然盲腸炎を病つて以来父には一入の心配をかけた。病高ずるに従い父の憂慮も例え様なものであった。一方小生を慰め又励まし陰では憂ひに満ちた表情で部長や主治医の先生より度々病状を念の行く迄聞かれ、その看病に最善を盡す事を依頼される父は見ても涙ぐましいものであったそうだ。毎日ホテルから病院へ通ってくれた。その道で朝6時には最早山王神社浅草に詣でて居られた。「信念の力」が医術と相まって病状の進展に多大の影響を及ぼすものならば、父は この「信念の力」を以て小生を蘇らせてくれたのであると信じてやまない。

世に盲目的愛と云ふものがあるが其に一見似た様で、凡そ内容を異にする絶対的愛と云ふものが やはりこの世に存在する。盲目的愛は理性を喪失し恰も激流が滔々と堤を切って流れ出ずる如く何ら確たる信念、理性的判断見通し、計画を持たずして愛に溺れるもの。其れに反して絶対的愛は一言にして表すならば神の御心に等しきものである。

今亡き父は実に子煩悩であった。彼の全生命は我等8人の子供の為に存在し彼の一生涯は全く我等のために捧げられたものである。父は如何にして我々を幸福に導き得るかをあらゆる犠牲を払って 成し遂げてくれた。小生にとりては父の愛は極めてこの絶対的愛に近いものと信ずる。この度の小生の病気が父の死因の一端となった事は小生としては返す返すも嘆かはい無念な事と考え、又照子の死に際して父の受けたあの深刻なる打撃は又一面如何に彼が我々を愛しきっていたかを語るものとして感謝の念に耐えない。小生が嘗て冗談に父に「お父様に御恩返しをしてお父様を喜ばしたい。」と言った言葉は、今は儂い虚無の煙となって僕の胸を覆っている。

「父」の文面は、教養人としての貴志の人となりを実に示している。子供の教育も『徳雲』の刊行も、弥右衛門にとっては、自己の「教養哲学」を敷衍する場所として同一地平線上にあるものであった。それゆえ、貴志もその点を十分意識して、他のエッセイとは異なる文体に依っている。特に、父と親交があった西田幾多郎からの

思想的感化を感じさせる点は興味深い。

註4:ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団の第1ヴァイオリン奏者で、少年時代をベルリンで過ごしたヘルムート・シュテルンは、著書『ベルリンへの長い旅』(真鍋圭子訳、朝日新聞社 1999年)で、1936年ベルリン・オリンピック当時の状況として、“このころはまだ、反ユダヤ主義的プロパガンダを聞くことはほとんどありませんでした”と記している(同書36ページ)。また同書228ページには“日本人は信仰や宗派によって、人を差別したり迫害したことはありませんでした。ですからナチ・ドイツの病的なまでのユダヤ人に対する狂信的憎悪を理解することができず、したがって支持もしなかったのです。ユダヤ人を排斥せよというドイツからの強い圧力に、日本人は終戦のときまで抵抗し続けました。”とユダヤ人の立場で記している。

2 交響曲「仏陀」

今日貴志の事跡に注目する意義は、「夭逝の天才」ということに対するシンパシーではなく、本論冒頭にも述べたように、西洋音楽は日本を含めた東洋思想によって補完されるとの展望を少しでも具体化し、日本人が「日本人であること」を通して西洋音楽にどのような可能性を開拓することができるかについての指針を明確化することにある。そこで本章では、貴志の代表作である交響曲『仏陀』の解釈をとおして、この問題を論考したい。

最初に、ヒンデミットやフルトヴェングラーとの親交など、滞欧時の貴志の知的環境に留意しながら、貴志は西洋音楽をどのように捉えていたのか、という問題を考察してみたい。

フルトヴェングラーは、“作曲は混沌の形象化である”と述べている。「混沌」とは、誤解を招きやすい術語だが、フルトヴェングラーの次の言葉により、その意味の射程を把握することができる。“人間は、理性と混沌との間におかれた生命を生きている。すなわち人間によって征服された世界と、非合理的なもの、把握しがたいもの、窮めがたいもの、超越的なもの、すなわち神との間にある生命を。”(芦津丈夫訳『フルトヴェングラー音楽ノート』白水社 1999年 181ページ)。

さらにフルトヴェングラーは、次のように述べている。“芸術としての音楽は共同体を前提としている。造形芸術や文学の場合も、そうでないわけではない。しかし音楽界、とりわけ公開の場においては、この共同体が聴衆として直接的な、いわば人格化された役割を演じてきた。造形芸術家の社会においては、今日しばしば市場からの、つまり大衆相手の市場からの独立ということが礼賛され、高く評価されている。音楽に関するかぎり、そのようなことは考えられない。ここではいぜんとして、個人の、いわゆる大衆的成果からの独立ということが極端な個人主義であると見なされている。それのみか、音楽が現在においても共同体を前提としているという事実は、他のいかなるものにもまして、私たちの人間、自然、神との結びつきを失うべきではないとの警告であるように思われる。”(フルトヴェングラー前掲書196ページ)。

またヒンデミットは、中世におけるアウグスティヌスとボエティウスの音楽思想の高い次元の統合こそが、現代人の音楽に対する理想的な態度であるとしている。それゆえ音楽とは人間の魂を崇高なもの、人間以上のもの、理想的なものに向かわせるものであり、作曲家はそうした音楽の倫理力を利用して、最大限の効果をもたらすように技術的な努力をしなければならない。そして演奏家と聴衆は、このような音楽の価値を理解するために、献身的な努力を傾けなければならないと主張している。(ヒンデミット『作曲家の世界』佐藤浩訳 音楽之友社 1999年を参照した。)

この両者に共通するのは、音楽を、作曲者、演奏者、聴衆の協同により、人間を超越的なもの、根源的なものへと向かわせる媒体であるとする人文主義的な音楽観である。それは西洋世界において音楽が、学問として位置付けられてきた伝統に加え、単に思弁的な音楽ではなく、演奏会のような共同体としての場において、新たな「知」としての精神的価値の創出を行うことが、音楽の最も本質的な存在意義であるとする立場である。

そこで、このような音楽観の背景について概観しておく必要がある。

西洋においては、ギリシア時代以来芸術は自然の模倣であると位置付けられてきた。そして音楽については、紀元前6世紀頃に活躍したピュタゴラスが、協和する音

程の数的秩序を発見し、そこに 宇宙の根本原理が表象されていると考えた。こうした思想は連綿と継承され、特に西洋音楽がドイツ語圏においてめざましい展開を遂げた18世紀末から20世紀初頭にかけてのロマン主義を中心とする時代は、当時の自然観、世界観を反映して新たな局面を迎えた。この時代は、プロティノスの思想から強い影響を受けたゲーテの著作に見られるように、自然はダイナミックな構造を持つ能産的なものと捉えられていた。それゆえ西洋音楽は、自然のダイナミズムによって形成された、人間の営為を含む「世界」の根本原理を模倣・表象することを本質とし、特に交響曲のジャンルにおいてその 傾向は顕著となった。

たとえば『運命』と通称されるベートーヴェンの交響曲第5番が、太古から神の力を象徴すると位置付けられている3という数を踏まえて、3つの音によるモチーフを全曲の根本原理としているように、世界生成の根源的一者としての神による統治、人間を支配する運命の力、神による人間の救済などがベートーヴェン以後、ブルックナーやブラームス、マーラーらによる交響曲の基本的なイデー(理念)となった。

表現内容とともに、音楽の具体的な表現手法についての歴史的展開について概観しておきたい。

音楽における表現の可能性が飛躍的に拡大したのは、17世紀から18世紀にかけてのバロック時代、特にバッハの作品においてである。バロック音楽の最大の成果は、修辞学を踏まえて音楽による思想や感情の表現手法を体系化したことである。特定の音の使い方が、特定の観念と明確に対応するという音楽の修辞学は、先述のベートーヴェンの『運命』モチーフの例でも明らかのようにその後の音楽に多大な影響を与えた。それゆえバッハが音楽の父と形容されるのは、思想の担い手としての音楽の地位を不動のものとして確立したことによるのである。

音楽の修辞学の伝統は、ロマン主義の時代、特に『マイタイ受難曲』の復活演奏を契機とするバッハの再認識運動により、新たな展開を迎えた。

特に、ワーグナーは、バロック以来の伝統をさらに発展させた「指導動機」の手法によって音楽に重層的な意味の体系をもたらし、観念的な世界の表現に、新たな可能性を開拓した。この「指導動機」の手法は、ブルック

ナーやマーラーの交響曲にも影響を与え、キリスト教の根本思想や、18世紀から19世紀の哲学や文学の思潮に立脚した作品が誕生した。

以上の歴史的展開から、西洋音楽を学ぶポイントは次のように要約される。すなわち、作曲の前提として高度な哲学的思弁が要請されるとともに、そこに演奏者や聴衆に伝達可能なフォルムを与えるための、音楽の言語的体系についての素養が必要となるのである。それゆえ、先述のように音楽に対して人文主義的な姿勢を貫いたフルトヴェングラーやヒンデミットは、貴志にとってまさに理想的な師であった。そして同時に、交響曲『仏陀』の完成度が示しているように、貴志にはその教示を十分咀嚼することができる人文主義的素養があったことも強調しておきたい。

貴志は『仏陀』と同時期に発表された『7つの日本歌曲』のドイツ語による序言で、作曲の趣旨をこう記している。“この7つの日本歌曲は、日本の詩と音楽をヨーロッパの感性に近づけるものである。それは、民族の感情に深く根ざした東洋音楽固有の情緒を勘案しながら、日本の古典芸術と西洋の現代の音楽文化とのジンテーゼを見出す試みとなるものである”。

先述のように、西洋において、日本文化に関する理解の深化をもたらすことが、貴志のベルリンにおける活動の基本理念であった。家族の紹介に交えて、日本の年中行事にも言及したエッセイのドイツの女性誌(Die Dame)への寄稿や、茶会の様子などを紹介する映画を製作・上映したことも、「君恋し」などの当時の流行歌を交え、活動写真の音楽を連想させるような情景描写に富んだ管弦楽曲を作曲したことも、すべてこの理念に基づく活動であった。

そして、ベルリンにおける貴志の作曲活動には、明確な方向性が見られる。それは、万人が容易に共感できる感情の次元の理解から、西洋人に対して高度な哲学的思弁の動員を要請し、日本文化の根幹に関する、さらに深い理解を目指すというものである。先に引用した『7つの日本歌曲』の序言は、こうした方向の中間に位置付けることができる。

そこで、言葉の扶助や、直接的な音画的描写を離れてこの最終課題に挑戦したのが、交響曲『仏陀』なのである。

貴志が「仏陀」というテーマを選んだのは、自身のエッセイ「私の家族」に見られるように、まず仏教が、作曲の主体である自己、ひいては日本全体の文化的アイデンティティの根幹であるという自覚があったことが挙げられる。同時に西洋には、西洋の文化的基盤＝キリスト教、東洋の文化的基盤＝仏教という図式が19世紀には確立しており、たとえばワーグナーがその延長に日本を位置付けていたという事実があったこと。またフルトヴェングラーが、1925年の手記において、“ヨーロッパキリストは、衝動の昇華(高揚)。インドー仏陀は、衝動の(真の)克服。”と述べているように、その図式は貴志がベルリンで学んだ時代もヨーロッパの教養に強い影響を与えていたことが背景にあったことによる。

そこで交響曲『仏陀』の分析をとおして、貴志がこの作品でどのような思想を具現しようとしたのかという問題について論考してみたい。

貴志のメモによれば、当初『仏陀』は釈尊の両親と、釈尊の誕生から成道に至る道程を7つの楽章によって叙事詩的に表現するものとして構想されたようだ。それによると、第1楽章：印度“父”、第2楽章：ガンジスのほとり“母”、第3楽章：釈尊誕生“人類の歓喜”、第4楽章：摩耶夫人の死、第5楽章：“生病老死”、第6楽章：“出家を決意す”、第7楽章：成道偈となっていた。また、各楽章の大まかなイメージは出来上がっていたようで、第5、第6楽章については“初めはオーボエまたはクラリネットがインド風のメロディーが面白いリズムの上にえがく。コーダの如く最後の深遠な和音で出家の決心を表す。”第7楽章については、“ワーグナーの『タンホイザー序曲』の最後の如く力強く。”と記されている。

しかし初演は、通常の交響曲と同様4楽章の形式で行われ、しかもその際には未完成との注記はなされていない。つまり貴志は、普遍的な人間存在を扱うことが近代的な交響曲一般にみられるイデーであることを再考し、叙事詩を離れて、古典的な形式を踏まえて、先行する作品との連関を明確にすることにより、自己のイデーをヨーロッパの聴衆に対して明確に伝達することができるかと判断し、4楽章で完結する作品として作曲の方針を変更したと考えられる。なお初演時のタイトルは『仏陀の生涯』であり、現存する総譜には『仏陀』とのみ記されていることから、より観念的な内容への志向が

伺われる。

第1楽章は、ガンジスの滔々(とうとう)たる流れを暗示するような低音の3つの音による音型によって始まる(譜例1)。この音型はグレゴリオ聖歌の基本ネウマであるポレクトゥスとトルクルスを組み合わせたものである。ベートーヴェンの『運命』交響曲と同様、この音型の意味は神の力や、根源的な摂理を象徴するものと解釈される。この音型は終楽章の末尾にも登場し、全体の枠構造を形成している他、中間の2楽章でも重要な役割を演じていることから、この交響曲の根本原理と位置付けることができる。同様の音型が同じように全曲の根本原理となっている代表的な例としては、フランクのヴァイオリン・ソナタや、ブラームスの交響曲第2番などがあり、貴志はそうした伝統に立脚したのである。

貴志がこの音型に託したものは『仏陀』という表題に則して、宇宙の統一的真理である一条妙法(いちじょうみょうほう)であり、またそこから帰結される、人間の死すべき運命と解釈される。このようなイデーが、終楽章がいずれも死の想念に結びついているブルックナーの交響曲第9番、マーラーの第6番、同じく第9番を念頭に置いて措定されていることは、主題の直接の引用や書法の継承から明らかである。

しかし、ブルックナーおよびマーラーの交響曲第9番が、共に作曲者自身の死への諦観を色濃く反映しているのに対して、貴志の『仏陀』は、「四苦」としての生病老死に、いかに対峙してゆくかが、人間の本質的な課題であることを明確に表明している。

そのことは『仏陀』の第1楽章の第1主題から読みとることができる(譜例2)。この主題はマーラーの交響曲第6番第4楽章の、運命に挑む人間を描いた第1主題(譜例3)と、行進曲風な性格や 歌謡的な主題が続くなどの点で類似性が認められる。この主題によって「法」から一個の人格が分節されるのであり、それは、四苦を担った人間実存を表象するものであると考えることができる。この点は『仏陀』第1楽章の第1主題が、バッハの最晩年の作品『フーガの技法』の主題の原型となった讃美歌『深き淵より』(譜例4)

を踏まえることで、苦悩がモチーフであることを強調していることから検証される(譜例5、6)。

それゆえ『仏陀』においては、この四苦の滅却による涅槃寂靜(ねはんじゃくじょう)という究極の悟りが全曲を貫く根源的なイデーであると解釈することができる。(註1)

この点は、第4楽章の構造を分析することにより検証される。

第4楽章は、「アダージョ」というゆっくりとしたテンポの指定がなされている。この指定は、名高い中世の悲恋物語に立脚したワーグナーの楽劇『トリスタンとイゾルテ』の前奏曲における苦悩の指導動機を継承し、「人生の告別」と作曲者自らが語ったブルックナーの交響曲第9番(未完)と、その音楽語法を踏襲したマーラーの交響曲第9番がいずれも終楽章をアダージョと指定していることを踏まえたものである。

テンポの設定により、作品のイデーの方向を示した上で、貴志はベートーヴェンの交響曲第9番第1楽章以来、圧倒的な力を出す手法として位置付けられてきたユニゾン(斉奏)により、死を表象する(譜例7)。続いて、マーラーの交響曲第9番第4楽章の諦観に満ちたロンド主題(譜例8)をソリティーそのままに継承して(譜例9)、死の諦観をその字義どおり、死すべき存在としての人間の本質を直観することと捉え、その悟りにより、人間は涅槃寂靜の境地に至ることができるとするイデーへと聴衆を誘導する。そして最後に、冒頭の一乗妙法の音型が、変ホ短調から今度は変ロ長調に転調されて回帰し、至福の情感に満たされて交響曲は終結する。

この涅槃寂靜の表出も、西洋音楽の伝統に立脚したものである。まず、交響曲の冒頭と末尾に同一の音型や主題を登場させて枠構造を形成する手法は、ハイドンやモーツァルトなど古典派の作曲家が、ミサ曲の冒頭と末尾、すなわち“主よ憐れみ給え”と“主よ我らに平安を与え給え”で同一の主題を用いるという伝統的な様式を踏まえたものである。そして、ミサ曲における“憐れみ給え”と“平安を与え給え”は、同じ神への呼びかけであるが、苦悩からの呼びかけと、キリストによる救済を介しての呼びかけという、教義における意味の深化を反映して、暗闇から光明の聴覚的表現としての短調から長調への転調がしばしば行われ、交響曲でもその手法は踏襲されている。(註2)

それゆえベートーヴェンの交響曲第9番が、交響曲史上の最高傑作と評価されるゆえんは、「苦悩をとおしての歓喜」という交響曲の伝統的様式そのものに内在するイデーを、シラーの頌歌『歓喜に寄す』による終楽章で完璧に顕在化させた、その卓抜な手法なのである。

また、貴志は交響曲の最終部分に半音上昇する楽句(譜例10)を登場させるが、これはベートーヴェンが『莊嚴ミサ曲』の終曲“主よ我らに平安を与え給え *Dona nobis pacem*”において、*pacem*(平安を)と合唱する際に(譜例11)至福感を強調するために用いた手法であり、絶対的な心の安らぎとしての涅槃寂靜という貴志のイデーは、この楽句によってさらに明確に聴衆に伝達されるのである。

貴志はこのように、キリスト教—仏教というヨーロッパの精神史における一般的な対概念に則して、キリスト教義に立脚した交響曲の伝統的な様式によって、仏教のイデーを遺憾なく具現している。また『仏陀』では、表現している世界が東洋一般ではなく、日本であることを強調するために、ドビュッシーが交響詩『海』などで日本の情緒の表出として用いた、全音階ふうの楽句が随所に配置されていることも付記しておきたい。

それゆえ、貴志の『仏陀』は、単に日本人による交響曲創作の試みや、異国趣味の表出などと片づけるべきではない。むしろ、『仏陀』はドイツ・オーストリアの文化圏で18~19世紀に著しい展開を見せた交響曲が、1911年のマーラーの死去を境に衰退の方向に向かい、同時に、交響曲を含め音楽が深遠なイデーの表出から乖離しつつあった時に、フルトヴェングラーらの人文主義的姿勢を継承して、日本文化を切り口として、ヨーロッパの偉大な文化の所産である交響曲形式の閉塞状態を開き、その価値の再認識にヨーロッパ楽壇を向かわせることを企図した労作と位置付けるべきである。

こうした貴志の努力が十分報われたことは、『仏陀』がベルリン・フィルで初演された翌日の、1934年11月19日付のロカール・アンツァイガー紙の次のような論評が、何よりも雄弁に物語っている。

“フィルハーモニー・オーケストラの賓客指揮者として、極めて独特な特徴を有するベルリン滞在中の有名な貴志康一氏はグルック、ドビュッシー、シュトラウス等の他に彼の作品—交響曲「仏陀の生涯」、歌曲とオーケスト

ラ曲「日本スケッチ」を発表した。これらの作品は、彼が欧州音楽、オーケストラを完全に我が物としていることを示し、かつ、欧州の表現手段を援用して、アジア的なものを表そうと試みている。その欧州の音楽様式に対する理解もさることながら、さらに驚嘆すべきは、印象派的音楽の音質に表されている彼の才能である。この作曲家は人を魅了して止まない、無我の境地にあるがごとき神速なる動作をもって指揮する。”(貴志康一後援会編『貴志康一の芸術について』による)

おわりに

貴志康一の業績をふりかえって帰結されることは、日本人が西洋音楽を理解するためには、日本の文化的アイデンティティを再認識し、日本人になりきることが必須の前提となるということである。本論で度々述べたように、異文化の理解は、自国文化の理解に比例して深化してゆく。つまり、自国の文化を座標軸とし、個々の特質に関して、その同一性と差異性を計測してプロットすることが、異文化を理解することである。理解することとは、共通の認識像が構築されることであることを考えれば、この座標軸なしには、理解はおぼつかないのである。

ここで貴志自身の言葉を引用したい。“僕はかつてベルリン・フィルハーモニーオーケストラを指揮してレコード吹込をした際、楽員の規律が余りにも厳正たるものに驚いてメンバーに語った事がある、「僕は東洋の文化、芸術に非常な尊敬とプライドを持っている。例えば茶の湯に見る如き厳然たる雰囲気は、この物質文明のクライマックスたる欧州大都會のベルリンでは到底味わい得ないものと思っていた。ところが今諸兄の前に立って諸兄のこの真剣な厳肅な態度に接し、まさに茶の湯の精神と符号するもののある事を私は痛切に感じた」と。”(貴志康一:「新響練習所スケッチ」『フィルハーモニー』1936年3月号)。

これは参加者個々が、共通する1回限りの超越的な目標のために、自己の資質を最高の形で発揮する真剣勝負の場として茶会と録音セッションを比較したものである。そして、貴志がオーケストラの規律というトピックで茶会を引き合いに出したことにより、西洋の伝統的なオーケストラ文化や、演奏行為に臨む楽員の姿勢が理

解できたと共に、ベルリン・フィルの楽員も、日本の茶会が極めて高度な精神的営為であることを理解したのである。この引用箇所は、先述の、自国文化の理解が異文化理解の座標軸となるということの好例と言える。西洋音楽に関して、音楽という視点で単純に邦楽を引き合いに出すのではなく、茶の湯に言及したことによって、双方が、相手の文化に対するより深い理解を得ている事実に変更して注目したい。

それでは最後に、本論の冒頭に述べた日本人の西洋音楽に対する適性を視野に入れながら、西洋音楽の今後、日本人は何をなすことができるか、という問題を考えてみたい。バッハ以降の西洋音楽の顕著な構造はポリフォニーである。それは、西田幾多郎の表現を借りれば、「個別的多」と「全体的一」の「絶対矛盾的自己同一」としての時間空間的曼荼羅であり、華嚴思想から見れば「事事無礙法界」そのものである。これは同時に、厳密な西洋の論理における同一律や矛盾律では割り切れない世界である。この“割り切れなさ”が「西洋」という枠組みの綻びである。そして、この綻びが西洋音楽の本質に関わっているところが実に興味深い。

必ずしも主語を定立することなく機能する日本語の構造から、「事事無礙法界」を違和感なく理解できるのは、日本の文化的アイデンティティを認識した日本人のみである。そしてこのことが、日本人の西洋音楽に対する生得的な適性に密接に関わっている。それゆえ、日本人が自己の文化的アイデンティティを再認識する最も有効な手段は、まず西洋音楽と真剣に対峙することなのである。それゆえ、西洋音楽の教育は、他でもない日本人としての文化的アイデンティティ確立のために 必須なのであり、学校教育においてそれを邦楽と置換するなどという短絡的な発想は、文化に対する根本的な無理解以外の何ものでもない。西洋音楽との出会いにより、日本人としての文化的アイデンティティへの認識が深化すれば、必然的に、日本の風土に育まれた固有の文化を保持しなければならないという意識は涵養される。そうした意識の土壌においてこそ、日本の伝統文化に関する教育が生きてくるのである。社会教育、生涯学習の機関として、古代から現代までの日本の芸術文化の紹介を重要な使命とする石川県立美術館が、西洋音楽の普及や研究にも力を置く根本

的な理由もここにある。そこで、こうした事例も十分に勘案して、高い視点からの、長期的なヴィジョンを持った教育カリキュラムの編成を望みたい。

以上は、日本人サイドの問題である。逆に、欧米の演奏家にとっては、西洋音楽が根本的に内包する矛盾した特質を、例えば曼荼羅のような日本文化の所産をイメージすることによって、より高次の文化的アイデンティティーの認識のうちに昇華させることができるのである。それゆえ欧米の演奏家が、来日公演で本国以上の高い完成度の演奏をしばしば聴かせるのは、先に引用した貴志による茶会の例えのように、日本の聴衆が醸し出す独特の緊張感溢れるシュティムク(雰囲気)から、日本文化のエッセンスを敏感に感じ取っていることによると考えることができる。来日時のチェリビダッケの禅寺訪問は、そうした延長線上にある、より主体的な日本文化探求の行為といえよう。

そこで、欧米の演奏家が、禅寺を訪問しないまでも、たとえば西田幾多郎の「形而上学的立場から見た古今東西の文化形態」(高橋文によるドイツ語訳がある)などを手がかりとして、日本文化の根本構造をさらに深く理解すれば、その演奏はさらなる価値を創出することができる。そして少なくとも、欧米の演奏家の一般教養として、バッハやロマン主義の作曲家に強い影響を与えたドイツ神秘思想が、日本文化における「日本的なるもの」の根幹を成す密教や禅の思想と同根であることは、広く理解してもらいたいものだ。それゆえ、ここに西洋音楽の将来に対して日本人および日本文化が貢献する具体的なヴィジョンが示されるのである。

このように、西洋音楽と日本文化を必然的な連関において捉え直すことは、日本人にとっても、欧米人にとっても、主客の分化から高次の主客合一に至る認識の深化を経て、各々の文化的アイデンティティーの再認識をもたらすことが期待されることから、極めて有意義である。それはまた、広義の東西文化間の相互理解と相互尊重の理想的なモデルでもある。

貴志康一が西洋音楽に携わった究極の目的も、ここにあったことは改めて強調するまでもない。

註1:このイデーの典拠は『ブッダのこぼれ話』(1120~1123)の箇所から求められる。「わたくしは年をとったし、力もなく、容貌も衰えています。眼も

はっきりしませんし、耳もよく聞こえません。わたくしが迷ったまま途中で死ぬことのないようにして下さい。— どうしたらこの世において生と老衰とを捨て去ることができるかそのことわりを説いて下さい。それをわたくしは知りたいのです。」師(ブッダ)は答えた。「ピンギヤよ。物質的な形態があるゆえに、ひとびとが害われるのを見るし、物質的な形態があるゆえに、怠る人々は(病などに)悩まされる。ピンギヤよ。それゆえに、そなたは怠ることなく、物質的な形態を捨てて、再び生存状態に戻らないようにせよ。」

「四方と四維と上と下と、これらの十方の世界において、あなたに見られず聞かれず考えられずまた識られないなものもありません。どうか理法を説いて下さい。それをわたくしは知りたいのです。この世において生と老衰とを捨て去ることを。」「ピンギヤよ。ひとびとは妄執に陥って苦悩を生じ、老いに襲われているのをそなたは見ているのだから、それゆえに、ピンギヤよ、そなたは怠ることなくはげみ、妄執を捨てて、再び迷いの生存に戻らないようにせよ。」

また、涅槃寂静については同書1086~1087に次のように述べられている。

(ブッダが答えた。)
「ヘーマカよ。この世において見たり聞いたり考えたり識別した快美な事物に対する欲望や貪りを除き去ることが、不滅のニルヴァーナの境地である。このことをよく知って、よく気を付け、現世において全く煩いを離れた人々は、常に安らぎに帰している。世間の執着を乗り越えているのである。」(以上 中村元訳 岩波文庫)

註2:本論では、短調と長調の対置のみが、相反する観念を表出する手段であると主張するものではないことを付記しておきたい。マッテゾンの「調性格論」においても、“ある人達は、短調か長調かという点にすべての秘密が隠されていると考える。つまり彼らは、一般的に言ってあらゆる短調は必ずや悲しげなものであり、これに対してすべての長調は概して楽しげな性質を持つ、と説明するのである。こうした考え方をする人は、すべての点でまったくの間違いを犯している、というわけではない。が、やはり、研究不足のそしりは免れない。”(礪山雅訳)と述べられている。それゆえ、調性選択の背景を考察する際には、楽曲全体の構造を検証し、相反す

る観念を表出すべき必然的なイデーの措定がまず前提となる。そこで初めて、他の手法の検証と併せて調性の選択が、相反する観念の表出を意図したものであるか否かを結論付けることができるのである。

そして貴志の『仏陀』の場合は、特に総休止や、いわゆるブルックナー・リズムの多用など、「最高のミサ曲」(野村良雄)としてのブルックナーの交響曲に見られる特徴的な書法を明確に踏襲していることを例証として、本論における解釈の妥当性は保証されるのである。

参考文献

- ・貴志康一作品集 貴志康一刊行会 1978年
村瀬博春「バッハの『フーガの技法』成立に関する展望と、その十九世紀音楽への影響例」石川県立美術館『紀要』第7号 所収 1991年
- ・『阪神間モダニズム』同展実行委員会編 淡交社 1997年
- ・『フルトヴェングラー 音と言葉』芦津丈夫訳 白水社 1999年
- ・『フルトヴェングラーの手記』芦津丈夫訳 白水社 1983年
- ・『フルトヴェングラー音楽ノート』芦津丈夫訳白水社 1999年
- ・『高橋文の「フライブルク通信」』浅見洋編 北國新聞社 1995年
- ・岩野裕一 『王道楽土の交響楽』音楽之友社 1999年
- ・村瀬博春 「仏陀の悟りを交響曲にした男 - 夭逝の音楽家 貴志康一をめぐる -」『北國文華』復刊 4号 北國新聞社 2000年1月 所収
- ・日下徳一 『貴志康一 よみがえる夭折の天才』音楽之友社 2001年

本稿執筆にあたり、貴志康一の令妹山本あや氏をはじめ、貴志家ゆかりの方々から、数多くの貴重なご教示、資料のご提供を賜ったことを深い感謝をもって付記したい。

四半世紀ぶりの後記

以上の論考は、論者が2000年に石川県立美術館『紀要』第11号(2001年3月刊)に寄せた、ほぼ原文で

ある。脱稿後四半世紀を経て再読し、貴志康一の生涯への感懐を新たにする。同時に、音楽のみならず美術、文学も含めて、安易なわかりやすさを追求するあまり、芸術作品の本質を考究する姿勢が現在に至って世界的に退潮していることに衝撃を禁じ得ない。

オーケストラに着目するならば、演奏技術水準は格段に向上した。その背景には、効果的な演奏家の教育システムが機能している現実がある。しかし、破綻の少ない均質性は枝葉の美しさを表出することができても、根幹が等閑にされている感は否めない。かつては、巨匠と呼ばれる指揮者が、別の指揮者のリハーサル会場に姿を見せただけで、オーケストラの音が変わることがあった。それは、巨匠とされるゆえんが、音楽精神を体現していたからではなかったか。

バッハ以降、特にドイツ文化圏において、音楽は特定の目的を離れて内省的な深化を志向するようになった。交響曲は、その典型といえる。明治時代以降日本政府は欧化政策を推進したが、当の欧州では日本が文化国家として応分に尊重されていたとは言い難い。そこで貴志康一は、西洋音楽の語法によって日本文化の真髓を伝えることを喫緊の使命として自らに課した。交響曲『仏陀』は、歴史に銘記すべき里程標である。

貴志は、ハイドン以降ブルックナーそしてマーラーに至る、ミサ曲の進化形としての「受難による救済」、「闇の混沌から光明」、「苦悩を通しての歓喜」という交響曲の観念的形式を、見事に仏教思想に換骨奪胎した。しかし、『仏陀』は飽くまで里程標であり、貴志にはさらに遠大な構想があったと思われる。その裏付けとなるのが、日本歌曲である。かつてルターが俗謡をコラールに取り入れ、その聖俗一致の思想はバッハの表現世界の基盤となった。したがって、西洋音楽が誕生以来志向してきた高次の思弁への導入には、感情への訴求が極めて有効であり、マーラーに見られる歌曲と交響曲の相補的關係性は、貴志の創作に重要な指針を与えた。

それゆえに、今日貴志の歌曲に着目する意義は、その早すぎる死によって頓挫してしまった、西洋における日本理解の促進・深化という貴志の遠大な構想に思いを致し、相互理解と相互尊重に立脚した多文化の共生世界構築の一助とすることにある。貴志において相互に嵌入した東西の思弁と音楽は、日本人が西洋クラシ

ック音楽の担い手となる歴史的使命があることを証示する。生成AIの著しい進化によりHomo sapiensの本質が問われる現在こそ、音楽を通して思索することは、人間が人間であるための必然的要請であることを理解すべき時ではないだろうか。Sapere aude!

(むらせ ひろはる/石川県九谷焼美術館 館長
博士(知識科学)

村瀬博春:上智大学哲学科卒業。北陸先端科学技術
大学院大学修了(課程博士,知識科学)。

野村良雄、今道友信、渡辺護、に師事。

リサーチマップ <https://researchmap.jp/alleukeinen>

○ 豊田喜代美50年間の公式演奏歴

1975年-2025年(記載漏れ有。無記録は空欄)

■プログラムに記した50年間の公式演奏には、J.S.バッハ、ヘンデル、ハイドン、モーツァルト、シューベルト、ブラームス、ワーグナー、マーラー、ブルックナー、R.シュトラウス、ベルクなど各作品を複数回、他に日本人作曲家オペラ作品、演奏超難曲ブーレーズ作品などオーケストラとの演奏体験が貴志康一作品演奏に活着ていることを自覚できた演奏会であった。

1975.9 第45回読売新聞新人演奏会 演奏曲:ドニゼッティ作曲 オペラ《シャモニーのリンダ》よりアリア プーランク作曲 歌曲「セ」 ピアニスト:於:東京文化会館

1976.2 二期会オペラ公演 ワーグナー作曲《タンホイザー》小姓役 指揮:飯守泰次郎 演出:鈴木敬介 管弦楽:於:東京文化会館

1976.9 東京オペラ・プロデュース公演 No.2 ヘンツェ作曲《不思議なお芝居》参事の娘役 指揮:木村彰宏 演出:出口典雄 共演者:川村敬一 原田茂生 河内桃子 子門真人 小田清 於:東京聖三一教会

1976.10 二期会オペラ公演モーツァルト作曲《フィガロの結婚》花娘役 指揮:演出:管弦楽:於:東京文化会館

1976.1 桐朋学園大学音楽学部オペラ公演 モーツァルト作曲《フィガロの結婚》ケルビーノ役 指揮:尾高忠明 演出:長沼廣光 管弦楽:桐朋学園オーケストラ 副指揮:増井信貴

共演:加賀清孝アルマヴィーヴァ伯爵 大島幾雄フィガロ 名古屋木実スザンナ 他 於:日本都市センターホール

1977.6 二期会オペラ公演 モーツァルト作曲《魔笛》童子役 指揮:演出:鈴木敬介管弦楽:於:東京文化会館

1977.1 東京オペラ・プロデュース公演 No.3 ドビュッシー作曲《ペレアスとメリザンド》メリザンド役 指揮:若杉弘 演出:佐藤信 管弦楽:東京フィルハーモニー交響楽団 共演者:近藤伸政 中村邦子 木村俊光 山村民也 於:東京郵便貯金ホール

1978.2 コーロ・ヌオーヴォ第5回演奏会 J.S.バッハ作曲「カンタータ182番」ソプラノ・ソロ 指揮:萩谷納 於:石橋メモリアルホール

1978.9 【ドイツ】ケルン音楽舞踏大学主催 オッフェンバツハ作曲オペラ《ホフマン物語》アントニア役 オペラ・ハイライト公演 於:ケルン音楽舞踏大学ホール

1979.3 【ドイツ】ヴァイトウィッヒ 聖マルクス教会公演 モーツァルト作曲「レクイエム」ソプラノ・ソロ

1979.9 東京オペラ・プロデュース公演 No.11 ロッシーニ作曲 歌劇《セヴィラの理髪師》ロジーナ役 指揮:黒岩英臣 演出:佐藤信 管弦楽:共演者:高丈二 中村健 勝部太 山村民也 於:東京郵便貯金ホール

1980.2 コーロ・ヌオーヴォ第8回演奏会 J.S.バッハ「ロ短調ミサ曲」 Sop.ソロ指揮:萩谷納於:石橋メモリアルホール

1980.2 二期会オペラ公演 モーツァルト作曲 歌劇《フィガロの結婚》ケルビーノ役 指揮:佐藤功太郎 演出:鈴木敬介 管弦楽:於:東京文化会館大ホール

1980.3 東京都交響楽団第134回定期演奏会 メンデルスゾーン作曲「真夏の夜の夢」ソプラノ・ソロ I 指揮:ペーター・マーク 共演:大倉由紀枝 於:東京文化会館大ホール

1980.7 NHK第37回青少年音楽祭 ハイドン作曲 オラトリオ「四季」ハンネ役 指揮:ホルスト・シュタイン 共演:佐々木正利 多田羅迪夫 国立音楽大学合唱団 管弦楽:NHK交響楽団 於:NHKホール

1980.11 青少年のための「日生劇場オペラ教室」 ロッシー

ニ作曲 歌劇《セヴィラの理髪師》ロジーナ役 指揮:管弦
楽:演出:鈴木敬介 共演:小林一男 大島幾雄 高橋修一
斎藤俊夫 他 於:日生劇場

1980.11 二期会オペラ公演 マスネー作曲《ウェルテル》
ゾフィー役 指揮:管弦楽:演出:栗山昌良 於:日生劇場

1981.1 新日本フィル・ニューイヤーコンサート ハイドン作
曲 オラトリオ「四季」ハンネ役 指揮:共演:管弦楽:新日本
フィルハーモニー交響楽団 於:東京文化会館大ホール

1981.1 VIVA OPERA G.C.メノッティのオペラ二題
《電話》ルーシー役 演出:杉理一 指揮:福森湘 於:モーツ
ァルトサロン

1981.1 日本の作曲家 '81 公演 出版作品を中心とした演
奏会Ⅷ 小森昭宏作曲「1日の物語」ソプラノ独唱 於:草
月会館ホール 司会:芥川也寸志

1981.2 東京オペラ・プロデュース定期公演 No.14 ミヨー
作曲《オルフェの不幸》ユリディス役 指揮:松本紀久雄
演出:中村喙夫 訳詞:村田健司 共演:村田健司 鎌田直純
林ひろみ 唐木暁美 邱玉蘭 管弦楽:於:中野文化センター

1981.2 東京交響楽団第268回定期演奏会ベルリオーズ
作曲歌劇《ファウストの劫罰》マルガレーテ役 指揮:小林研
一郎 共演:小林一男ファウスト 大島幾雄メフィストフェレス
佐藤征一郎ブランデル 於:東京文化会館

1981.3 ライン川の音楽と旅情のタベ シューマン作曲「女
の愛と生涯」全曲 於:ドイツ文化会館ホール

1981.4 プロムジカ合唱団第7回定期演奏会 シューベルト
作曲「ミサ曲第6番」ソプラノ独唱 指揮:萩谷納 共演:
於:浅草公会堂

1981.5 バッハ合唱団第49回定期公演 J.S.バッハ作曲
「教会カンタータ第21番」ソプラノ独唱 指揮:大村恵美子
管弦楽:於:石橋メモリアルホール

1981.6 N響特別公演 ベートーヴェン作曲「交響曲第9
番」ソプラノ・ソロ 指揮:共演:管弦楽:NHK 交響楽団 於:
NHKホール

1981.9 1981.10 文化庁移動芸術祭オペラ公演 モーツァ

ルト作曲 歌劇《フィガロの結婚》ケルビーノ役 指揮:小泉
和裕 演出:鈴木敬介 管弦楽団:オーケストラ:京都市交響
楽団 共演:平野忠彦 Bar 伯爵 宮原昭吾 Bar フィガロ 齋
藤昌子 Sop スザンナ 春日成子 M.Sop マルチエリーナ 齋
藤忠生 Ten クルチオ 小田清 Bar バルトロ 斎藤俊夫 Bar
アントニオ 諸貫香恵子 Sop バルバリーナ 装置デザイン:若
林茂熙 照明プラン:吉井澄雄 衣装デザイン:渡辺園子 舞
台監督:小栗哲家 合唱:二期会合唱団 チェンバロ:金井紀
子 於:延岡市公会堂 弥彦文化会館 近江八幡文化会館
水俣市文化会館 鹿屋市文化会

1981.11 CMA合唱団第32回定期演奏会 ヘンデル作曲
「メサイア」ソプラノ・ソロ 指揮:原田稔 管弦楽:東京パッ
ハ・カンタータ・アンサンブル 合唱:CMA 合唱団 共演:郡
愛子 佐伯雅巳 渡辺明 Bar 於:郵便貯金ホール

1981.12,1981.11 二期会オペラ公演 オッフェンバック作
曲《天国と地獄》ダイアナ役 指揮:佐藤功太郎 演出:なか
にし礼(訳詞 台本) 萩本欽一 管弦楽:東京交響楽団 共
演:島田祐子ユーリディス 立川澄人ジュピター 中村健オル
フェウス 毛利純子世間 丹羽勝海ブルート 齋藤昌子キュー
ビッド 木村珠美ビーナス 装置:朝倉撰 照明:沢田祐二
衣装:コシノ・ジュンコ 於:日生劇場 神奈川県民ホール

1981.12.18,20,21, 九州交響楽団 ベートーヴェン作曲
「交響曲第9番」第九のタベ大分・小倉・福岡 ソプラノ・ソロ
指揮:黒岩英臣 共演:郡愛子 牧川修一 蓮井求道 管弦
楽:九州交響楽団 於:小倉市民会館 福岡サンパレス 他

1981.12 新日本フィルハーモニー交響楽団特別公演/小澤
征爾 ベートーヴェン作曲「荘厳ミサ曲」ソプラノ・ソロ 指
揮:小澤征爾 管弦楽:新日本フィルハーモニー交響楽団 オ
ルガン:志村拓生 合唱団:晋友会合唱団 合唱団指揮:関谷
晋 共演:小見佳子 山路芳久 高橋啓三 於:昭和女子大学
人見記念講堂

1981.12 小澤征爾カテドラルシリーズ第12回公演 ベート
ーヴェン作曲「荘厳ミサ曲」ソプラノ・ソロ 指揮:小澤征爾
管弦楽:新日本フィルハーモニー交響楽団於:東京カテドラル
聖マリア大聖堂 オルガン:志村拓生 合唱団:晋友会合唱団
合唱団指揮:関谷晋 共演:小見佳子 山路芳久 高橋啓三

1981.12 新日本フィルハーモニー交響楽団 小澤征爾特別
演奏会 ベートーヴェン作曲「荘厳ミサ曲」ソプラノ・ソロ 指

揮:小澤征爾 管弦楽:新日本フィルハーモニー交響楽団 オルガン:志村拓生 合唱団:晋友会合唱団 合唱団指揮:関谷晋 共演:小見佳子 山路芳久 高橋啓三 於:昭和女子大学 人見記念講堂

1982.1 ニューイヤー・オペラ公演(二期会) モーツァルト作曲《フィガロの結婚》ケルビーノ役 指揮:佐藤功太郎 演出:鈴木敬介 共演:管弦楽:於:新宿文化センター大ホール

1982.1 三友合唱団特別演奏会 フォーレ作曲「レクイエム」ソプラノ独唱 指揮:萩谷納 共演:大島幾雄 於:石橋メモリアルホール

1982.2, 1982.1 二期会オペラ公演 モーツァルト作曲《ドン・ジョヴァンニ》ツェルリーナ役 指揮:小泉和裕 管弦楽:東京交響楽団 共演:大島幾雄 ドン・ジョヴァンニ 佐藤征一郎 レポレロ 岩崎由紀子 ドンナ・アンナ 大川隆子 ドンナ・エルヴィラ 高丈ニトン・オッターヴィオ 斎藤俊夫・マゼット 木川田燈・騎士長 装置:若林茂熙 照明:吉井澄雄 衣装:渡辺園子 舞台監督:小栗哲家 於:東京文化会館

1982.2 東京オペラ・プロデュース公演 No.17 ドビューシー作曲《ペレアスとメリザンド》メリザンド役 指揮:黒岩秀臣 演出:佐藤信 管弦楽:東京交響楽団 共演:越智則英ペレアス 島村武男グロー 高橋大海アルケル 戸田敏子ジュヌヴィエーブ 演出・美術:佐藤信 照明:吉井澄雄 衣装:緒方規矩子 舞台監督:田原進 演出助手:松本重孝 副指揮:加納明弘 大野和士 合唱:コロス・TOP・セレクトィオナム プロデューサー:竹中史子 松尾洋 於:東京文化会館大ホール

1982.3 桐朋学園オーケストラ第57回定期演奏会 ベートーヴェン作曲「交響曲第九番」ソプラノ・ソロ 指揮:共演:春日茂子 管弦楽:桐朋学園オーケストラ 於:郵便貯金ホール

1982.3 宗教音楽研究会創立35周年記念演奏会 ブラームス作曲「ドイツ・レクイエム」ソプラノ独唱 指揮:共演:管弦楽:於:日比谷公会堂

1982.5 プロムジカ合唱団第9回定期演奏会 A. カンプラ作曲「レクイエム」ソプラノ・ソロ 指揮:共演:管弦楽:於:浅草公会堂

1982.6 NISSEI MUSIC CONCERT '82 青春のコー

ラスアルバム ドイツ学生歌・山の歌 ソプラノ独唱 プログラム:狐の行進を迎える歌(狐狩りの歌) アイゼンバルト博士 おおそのかみの学生の栄光よ クランブーリ 祝福は飲むことにあり わが道づれよ万歳! 現生を楽しめ 気楽な放浪者 ガウデアムス 古いさすらいの歌(別れ) ターラウのエンヘン 菩提樹 クールプファルツの狩人 ローレライ こいつはつらいことに ウェルナーの野ばら おお、もみの木よ お前はぼくの胸の中にいる ブラームスの子守歌 三つの百合 あの下の低いところ 狩人の歌 誠実な愛 他 指揮:佐藤功太郎 ピアノ:森島英子 共演:宮原省吾 Bar 二期会合唱団 於:日生劇場

1982.7 三友合唱団第22回定期演奏会 モーツァルト作曲「レクイエム」ソプラノ独唱 指揮:萩谷納 ピアニスト:共演:於:石橋メモリアルホール

1982.7 二期会創立30周年記念 ガラ・コンサート ヴェルディ作曲《椿姫》から抜粋 於:東京文化会館大ホール

1982.9.22,23(マチネ),24 二期会オペラ公演 ヴェルディ作曲《ファルスタッフ》ナンネッタ役 訳詞:中山悌一 指揮:小澤征爾 演出:栗山昌良 共演:宮原省吾 Bar ファルスタッフ 勝部太 Bar フォード 高丈二 Ten フェントン 入江進 Ten カーユス 篠崎義昭 Ten バルドルフォ 松本宰二 Bar ピストーラ 秋山恵美子 Sop アリーチェ 志村年子 M.Sop クイックリ 小泉弥生 M.Sop メグ・ページ 於:東京文化会館大ホール 装置:和田平介 衣装:緒方規矩子 照明:沢田祐二 舞台監督:加藤三季夫 副指揮:佐藤功太郎 管弦楽:新日本フィルハーモニー交響楽団 合唱:二期会合唱団

1982.10.3,6,8,12,14 文化庁移動芸術祭オペラ公演(二期会) ロッシーニ作曲 歌劇《セヴィラの理髪師》ロジーナ役 指揮:佐藤功太郎 演出:鈴木敬介 共演:小林一男 Ten 伯爵 斎藤俊夫 Bar バルトロ 大島幾雄 Bar フィガロ 高橋修一 Bas バジリオ 志村年子 M.Sop ベルタ 小佐野輝雄 Bar アンブロジーオ 装置デザイン:若林茂熙 照明プラン:吉井澄雄 衣装デザイン:渡辺園子 舞台監督:小栗哲家 副指揮:増田宏昭 チェンバロ:金井紀子 ギター:斎藤勇 合唱:二期会合唱団 管弦楽:群馬交響楽団 於:土浦市民会館, 花巻市文化会館, 秋田県民会館, 富山県民会館, 茅ヶ

崎市民文化会館

1982.11 二期会オペラ公演 ロッシーニ作曲 歌劇《セヴィラの理髪師》ロジーナ役 於:日生劇場 指揮:演出:共演:管弦楽:

1982.11 CMA合唱団第33回定期公演 J.S.バッハ作曲「口短調ミサ曲」Sop.ソロ 於:郵便貯金ホール

1982.12 コーロ・ヌオーヴォ第12回演奏会 J.S.バッハ作曲「クリスマス・オラトリオ」ソプラノ・ソロ 指揮:管弦楽:共演:於:石橋メモリアルホール

1982.12 広島交響楽団第64回定期演奏会 ベートーヴェン作曲「交響曲第9番」ソプラノ独唱 於:広島市公会堂 指揮:共演:管弦楽:

1983.3 合唱団鯨創立15周年記念演奏会 J.S.バッハ作曲「マタイ受難曲」ソプラノ独唱 指揮:黒岩英臣 管弦楽:アンサンブル・アルス・ノーバ 共演:伊原直子 鈴木寛一 伊藤俊三 芳野靖夫 多田羅迪夫 於:東京カテドラル聖マリア大聖堂

1983.4 宗教音楽研究会第54回定期演奏会 J.S.バッハ作曲「マタイ受難曲」ソプラノ・ソロ 指揮:共演:於:東京文化会館大ホール

1983.4 東京都交響楽団第175回定期演奏会 フォーレ作曲「レクイエム」ソプラノ独唱 指揮:共演:管弦楽:東京都交響楽団 於:東京文化会館大ホール

1983.5 小澤征爾 長野県民文化会館信濃毎日新聞社創刊110周年記念 シェーンベルク作曲 モノドラマ《期待》ソプラノ独唱 指揮:小澤征爾 管弦楽:新日本フィルハーモニー交響楽団 於:松本社会文化会館

1983.5 新日本フィルハーモニー交響楽団第110回定期演奏会 シェーンベルク作曲 モノドラマ《期待》ソプラノ独唱 指揮:小澤征爾 管弦楽:新日本フィルハーモニー交響楽団 於:東京文化会館

1983.5 第9回民音現代作曲音楽祭公演 河南智雄作曲「オンディーヌーソプラノとオーケストラのためのー」ソプラノ独唱 指揮:尾高忠明 管弦楽:東京フィルハーモニー交響楽団 於:東京文化会館大ホール, ザ・シンフォニーホール

1983.6 ニューフィルハーモニー第4回定期演奏会 モーツァルト作曲「レクイエム」ソプラノ独唱 指揮:共演:管弦楽:ニューフィルハーモニー於:簡易保険ホール

1983.7 二期会オペラ公演 オッフェンバック作曲 歌劇《天国と地獄》ダイアナ(狩猟の神)役 指揮:佐藤功太郎 管弦楽団:東京フィルハーモニー交響楽団 総監督:中山悌一 指揮:佐藤功太郎 演出:なかにし礼, 萩本欽一 演出助手加藤三季夫 振付:小井戸秀宅 装置:朝倉摂 衣裳:コンノ・ジュンコ メイクアップ:川邊サチコ 照明:沢田祐二 舞台監督:加藤三季夫 合唱指揮:河地良智 副指揮:増井信貴, 山崎滋, 江上孝則 オーケストレーション(バッカスの歌):青島広志 けいこピアノ:小谷彩子, 中野佳子 装置助手:島田郁代 衣裳助手:竹田季代 舞台監督助手:大仁田雅彦, 平石五己, 加藤和美, 中村敬一 装置製作:俳優座舞台製作部 衣裳製作:東京衣裳 小道具:ザ・スタッフ 照明:A・S・G かつら:丸善 履物:神田屋 制作担当:立川清登 ジュピター立川清登、オルフェウス中村健、ユーリディス島田祐子、プルート丹羽勝海、キューピッド斎藤昌子、バッカス佐藤征一郎、ジュノー桐生郁子、ヴィーナス木村珠美、ハンス・スティックス、坂上二郎(ゲスト)、モルフフェウス篠崎義昭、マルス松本宰二、マーキュリー越智則英、世間:毛利準合唱二期会合唱団 バレエ仲田幸代, 河野恵理, 三村みどり, 石川愛子, 橋田恵子, 沢木美恵子, 松本克美, 河野由美 助演:熊岡健夫, 杉浦理恵, 島可津見, 曾根裕 管弦楽:東京フィルハーモニー交響楽団 於:東京新宿文化センター

1983.9-10 文化庁移動芸術祭オペラ公演 ロッシーニ作曲「セヴィラの理髪師」ロジーナ役 指揮:佐藤功太郎 演出:鈴木敬介 於:富士宮市民文化会館 加茂文化会館 島根県民文化会館大ホール 大分県民文化会館

1983.11 日生劇場開場20周年記念特別公演 モーツァルト五大オペラ モーツァルト作曲《コジ・ファン・トゥッテ》デスピーーナ役 指揮:飯守泰次郎 演出:鈴木敬介 共演:大倉由紀枝 Sop フィオルディリージ、秋葉京子 M.Sop ドラベッタ、大島幾雄 Bar グリエルモ、小林一男 Ten フェランド、佐藤征一郎 Bar ドン・アルフォンソ 合唱:二期会合唱団 管弦楽:新星日本交響楽団 チェンバロ:森島英子 装置:若林茂樹 照明:吉井澄雄 衣裳:渡辺園子 舞台監督:小栗哲家 歌唱指導:中山悌一・高橋大海 合唱指揮:増井信貴 副指揮:岡田

司、金井敬、川本敬治、林紀人、増田宏昭、山崎滋、コレペテ
イトウア：松井和彦、金井紀子、岡田司 音楽スタッフ：金井紀
子、森島英子、小谷彩子、久保晃子、中野佳子、武藤理恵
演出助手：平尾力哉、松本重孝、直井研二 装置助手：柘植
清一郎、井村さつき、小林優仁 衣装助手：磯野祐子 舞台
監督助手：大仁田正彦、菅原多敬弘、加藤和美、飯田貴幸、
池田正宣、小須田紀子、大沢裕、中村敬一、斉藤太嘉志、西
村亜郎 舞台技術：日生劇場技術部、俳優座舞台製作部、
A・S・G 制作進行：平尾力哉、家坂真理 装置制作：俳優座
舞台製作部 小道具制作：アトリエ・カオス、ザ・スタッフ、高
津装飾美術 衣装制作：工房いち、東京衣裳 かつら制
作：丸善 彫刻制作：日本彫刻美術研究所 履物制作：神田
屋 制作協力：(財)二期会オペラ振興会 後援：東京放送、
(財)二期会オペラ振興会 制作協力：東京コンサーツ 管弦
楽：於：日生劇場

1983.12 第九演奏会 ベートーヴェン作曲「交響曲第9番」
ソプラノ独唱

指揮：管弦楽：於：新宿文化センター大ホール

1983.12 東京都交響楽団特別演奏会 ベートーヴェン作
曲「交響曲第9番」ソプラノ独唱

指揮：管弦楽：東京都交響楽団 共演：於：東京文化会館大
ホール 練馬文化センター

1983.12 BETHOVEN SYMPHONY No.9 CHORAL
ベートーヴェン作曲「交響曲第9番」ソプラノ・ソロ

指揮：管弦楽：共演：於：ザ・シンフォニーホール

1984.4 合唱団鯨第32回定期演奏会 ハイドン作曲オラト
リオ「四季」ソプラノ・ソロ

指揮：黒岩英臣 管弦楽：新星日本交響楽団 共演：小林一
男 多田羅迪夫 於：簡易保険ホール

1984.4 コーロ・ヌオーヴォ創立10周年記念第14回演奏会
J.S.バッハ作曲「マタイ受難曲」ソプラノ独唱

指揮：共演：管弦楽：於：石橋メモリアルホール 1984.5 都響
ファミリーコンサート メンデルスゾーン作曲「真夏の夜の夢」
ソプラノ独唱 指揮：管弦楽：於：杉並公会堂

1984.6 プロムジカ合唱団第13回定期演奏会 フォーレ作
曲「レクイエム」ソプラノ・ソロ 日本フィルハーモニー交響
楽団特別演奏会 指揮：共演：於：東京文化会館於：浅草公

会堂

1984.7 井上道義／大阪フィル 海の交響曲 ヴォーン・ウイ
リアムス作曲「海の交響曲」ソプラノ独唱 指揮：井上道義
共演：管弦楽：大阪フィルハーモニー交響楽団 於：フェスティ
バルホール

1984.9 民音創立20周年記念 オペラ公演 オッフェンバッ
ク作曲《ホフマン物語》ステラ・オリンピア・アントニア・ジュリ
エッタ(全4役) 指揮：小澤征爾 演出：鈴木敬介 共演：林
誠、岡村喬夫、他 管弦楽：新日本フィルハーモニー交響楽団
於：東京文化会館

1984.10 東京ロイヤルフィルハーモニーオーケストラ第3回
定期演奏会 モーツァルト作曲「モテット」ソプラノ・ソロ 指
揮：管弦楽：共演：於：

1984.11 プロムジカ合唱団第14回定期演奏会 ハイドン作
曲「天地創造」ソプラノ・ソロ 指揮：管弦楽：於：浅草公会堂

1984.11 毎日新聞社主催 毎日ソリスト 豊田喜代美ソ
プラノリサイタル 演奏曲：モーツァルト作曲「モテット」
KV.165 デュパルク作曲 悲しい歌、ロズモンドの屋敷
中田喜直作曲「六つの子供の歌」うばぐるま、鳥、風の子供、
たあんき ぼんき、ねむの木、おやすみ シューベルト作曲
ガニメード、水の上で歌う、アヴェ・マリア R. シュトラウス作
曲「最期の四つの歌」春、九月、眠りにつこうとして、夕映え
に ピアノ渡辺健二 於：イイノホール

1984.12 ベートーヴェン第九合同演奏会 ベートーヴェン
作曲「交響曲第9番」ソプラノ・ソロ
指揮：管弦楽：於：郡山市民文化センター大ホール

1984.12 日本フィルハーモニー交響楽団特別演奏会 ベー
トーヴェン作曲「交響曲第9番」ソプラノ・ソロ 指揮：ヘルベ
ルト・ケーゲル 管弦楽：日本フィルハーモニー交響楽団 共
演：春日成子 M.Sop 市原多朗 Ten 芳野靖男 Bar 於：東京
文化会館 神奈川県民ホール 簡易保険ホール 日比谷公
会堂 厚生年金会館

1984.12 第9シンフォニーの夕べー大阪フィルハーモニー
交響楽団公演 ベートーヴェン作曲「交響曲第9番」ソプラ
ノ・ソロ 指揮：朝比奈隆 管弦楽：大阪フィルハーモニー交響
楽団 共演：勝部太 Bar 他 於：フェスティバルホール

1985.1 新日本フィルハーモニー交響楽団第126回定期演奏会 モーツァルト作曲《コジ・ファン・トゥッテ》フィオルディリージ役 指揮:井上道義 管弦楽:新日本フィルハーモニー 共演:名古屋木実デスピーナ 佐藤誠一郎アルフォンソ 勝部太グリエルモ 他 於:東京文化会館

1985.2 二期会オペラ公演 モーツァルト作曲《魔笛》パミーナ役 指揮:ズデニェク・コシュラー 演出:鈴木敬介 共演:大島幾雄ドン・ジョヴァンニ 池田直樹レポレロ 曾我栄子 トンナ・アンナ 仁科義子:ドンナ・エルヴィラ 中村邦男マゼット 高橋啓三騎士長 装置:若林茂熙 照明:吉井澄雄 衣装:渡辺園子 舞台監督:小栗哲家 於:東京文化会館

1985.2 日本フィルハーモニー交響楽団 ベートーヴェン「第九」ソプラノ・ソロ 共演:春日成子 齋場知昭 勝部太 指揮:管弦楽:日本フィルハーモニー交響楽団 於:唐津市文化会館

1985.2 現代の音楽展 '85「声楽曲のタペーその4」末吉保雄作曲「ヴォカリーズの音楽—ソプラノと5人の奏者のために—」ソプラノ独唱 於:イイノホール

1985.2 第10回九州公演 日本フィルハーモニー交響楽団公演 ベートーヴェン作曲「交響曲第9番」ソプラノ・ソロ 指揮:於:唐津市民会館

1985.3 題名のない音楽会 ゲスト(第16回サントリー音楽賞受賞者として)

司会と解説:黛敏郎 指揮:福田一雄 管弦楽:東京交響楽団 共演:中屋早紀子 構成:藤田敏雄 於:渋谷公会堂

1985.5 アルバン・ベルク生誕100年記念公演 ベルク作曲 歌劇《ヴォツェック》マリー役 指揮:小澤征爾 演出:実相寺昭雄 管弦楽団:新日本フィルハーモニー交響楽団 合唱:晋友会 共演:多田羅迪夫ヴォツェック 下野晃,鼓手長 秋葉京子マルグレート 林誠アンドレス 山岸靖,大尉 岡本喬生,医師 衣装:唐見博 証明:吉井澄雄 舞台監督:小栗哲家 副指揮:増井信貴 高関健 日本語訳:松原千代繁 制作協力:二期会 於:5.7 大阪フェスティバルホール 5.8 東京文化会館 5.10 昭和女子大学人見記念講堂 5.11 名古屋国際音楽祭公演名古屋市民会館大ホール

1985.5 東京都交響楽団第215回定期演奏会 ベルクの生誕 100 年に因んで ツェムリンスキー作曲「抒情交響曲

op.18」ソプラノ独唱 指揮:若杉弘 共演:勝部太 Bar 於:東京文化会館大ホール

1985.8.3 第16回サントリー音楽賞受賞記念コンサート 東京公演第1夜 於:日本青年館 演奏曲: 1. J.S.バッハ作曲カンタータ「全地よ、神に向いて歓呼せよ」 2. R.シュトラウス作曲 オペラ「ばらの騎士」よりワルツ(オーケストラ 3. R.シュトラウス作曲「4つの最後の歌」 4. 三善晃作曲ソプラノと管弦楽のための「決闘」 5. A.ベルク作曲オペラ「ヴォツェック」より3つの断章 指揮:井上道義 管弦楽:新日本フィルハーモニー交響楽団

1985.8.8 第16回サントリー音楽賞受賞記念コンサート 大阪公演 演奏曲:オッフエンバック作曲 歌劇《ホフマン物語》抜粋 R.シュトラウス作曲 オペラ「ばらの騎士」よりワルツ R.シュトラウス作曲「4つの最後の歌」 指揮:井上道義 管弦楽:大阪フィルハーモニー交響楽団 共演:荒道子(A) 林誠(T) 於:大阪ザ・シンフォニーホール

1985.9 第16回サントリー音楽賞受賞記念コンサート 東京第2夜公演 日本歌曲のタペ 於:イイノホール

中田喜直:6つの子供のうた 團伊玖磨:5つの断章 三善晃:白く 林光:道、子供と線路 毛利蔵人:よしなうた(初演) 間宮芳生:「日本民謡集」より こきりこ、さんさい踊り、子守唄 共演(ピアノ伴奏):中田喜直 毛利蔵人 間宮芳生 中川俊郎 相澤尚子 野口龍(フルート)

1985.10.1,2 東京都交響楽団 創立20周年記念公演 221 回定期演奏会 マーラー作曲「交響曲第8番」一千人の交響曲 ソプラノ I 指揮:ズデニェク・コシュラー 管弦楽:東京都交響楽団 共演:大倉由紀枝 清水マリ 伊原直子 西明美 小林一男 木村俊光 岡村喬生 合唱:都響創立20周年記念合唱団 武蔵野音楽大学 東京放送児童合唱団(合唱指揮:郡司博,佐久間哲也,古橋富士雄) 於:東京文化会館

1985.10 TBS ラジオ「百万人の音楽」第16回サントリー音楽賞受賞記念(使用音源:受賞記念コンサートライブ録音) J.S.バッハ作曲カンタータ51番「全地よ、神において歓呼せよ」1.アリア 4.コラール 5.アリア、R.シュトラウス作曲「4つの最後の歌」1.春 2.9月 3.眠りにつくとき 4.夕映えの中で 指揮:井上道義 管弦楽:新日本フィルハーモニー交響楽団 ラジオパーソナリティ:芥川也寸志、野際陽子

1985.10 東京フィルハーモニー交響楽団第269回定期演奏会 マーラー作曲「交響曲第4番」大いなる喜びへの賛歌 ソプラノ独唱 指揮:尾高忠明 管弦楽:東京フィルハーモニー交響楽団 於:東京文化会館大ホール

1985.11 名古屋フィルハーモニー交響楽団演奏会 ソプラノ独唱 演奏曲:モーツァルト作曲《フィガロの結婚》からケルビーノのアリア “恋とはどんなものかしら、”モーツァルト作曲《コジ・ファン・トゥッテ》からフィオルディリージのアリア “岩のように”、J.シュトラウス作曲《こうもり》からアデーレのアリア “あなたのようなお方は”、ロッシーニ作曲《セヴィラの理髪師》からロジーナのアリア “今の歌声は” 指揮:井上道義 管弦楽:名古屋フィルハーモニー交響楽団

1985.11 FMスペシャル 朝のミュージック・ライフ フレッシュ・ミニ・コンサート シューベルト作曲:ガニユメード 水の上で歌う アヴェ・マリア 司会:黒田恭一 バーバラ寺岡 共演:ピアノ渡辺健二

1985.11 二期会オペラ公演・バッハ生誕300年記念 J.S.バッハ作曲「マタイ受難曲」ソプラノ独唱 指揮:外山雄三 演出:鈴木敬介 管弦楽:東京フィルハーモニー交響楽団 共演:蔵田雅之エヴァンゲリスト 高橋修一イエス 中村邦男ユダ 西明美 餐場知昭 多田羅迪夫 小川哲生ペテロ 有川文雄,祭司長 蜂谷幸枝,女I 水島範子,女II 森野信生,祭司II 柳沢安雄,祭司II 二見忍,祭司の妻 小島りち子,証人I 森靖博,証人II 合唱:二期会合唱団 二期会オペラスタジオオ研究生 於:日生劇場 11.24 11.27

1985.12 群響「第九」公演 ベートーヴェン「交響曲第9番」ソプラノ・ソロ 指揮:高関健 於:足利市民会館

1985.12 日本フィル第9「合唱付」公演 ベートーヴェン作曲「交響曲第9番」ソプラノ・ソロ 指揮:ジェームズ・ロッドラン 共演:春日成子 市原多朗 芳野靖夫 合唱:フェリス女学院短期大学音楽科 相模女子大学合唱団 鶴見大学女声合唱団 フェリス女学院大学女声合唱団シュメルツェン・コール 横浜三大学合唱連盟 他 於:簡易保険ホール 東京文化会館大ホール 神奈川県民ホール 厚生年金会館

1986.1 関西フィルハーモニー管弦楽団 第53回定期演奏会 グリーク作曲「ペールギュント」ソプラノ独唱 指揮:小松一彦 於:大阪ザ・シンフォニーホール

1986.2 '86 都民芸術フェスティバル公演 J.S.バッハ作曲「マニフィカート」マーラー作曲「交響曲第4番」ソプラノ独唱 於:東京文化会館大ホール

1986.2 '86 都民芸術フェスティバル参加公演 二期会オペラ公演 J.シュトラウス作曲《こうもり》ロザリンデ 指揮:尾高忠明 管弦楽団:東京フィルハーモニー交響楽団 於:東京文化会館大ホール

1986.3 第9「合唱付」演奏会ベートーヴェン「交響曲第9番」ソプラノ・ソロ 於:武蔵野市民文化会館大ホール

1986.3 桐朋学園大学オーケストラ第65回定期演奏会 ベートーヴェン作曲「交響曲第9番」ソプラノ・ソロ 指揮:於:東京郵便貯金ホール

1986.3 東京都交響楽団特別演奏会特別演奏会 ウィーン
のモーツァルト モーツァルト作曲「ミサ曲 ハ短調 K.427 (417a)」ソプラノ・ソロ 指揮:ペーター・マーク 共演:ラファエラ・ラヴェッカ 伊達英二 松本宰二 合唱:都響創立 20周年記念合唱団 合唱指揮:郡司 博、加納由貴夫 於:新宿文化センター

1986.4 新交響楽団第110回演奏会 マーラー作曲「交響曲第8番」ソプラノI 於:東京文化会館大ホール

1986.4 二期会オペラスタジオ創設30周年記念コンサート ベートーヴェン作曲「交響曲第9番」ソプラノ・ソロ 於:簡易保険ホール

1986.4 ハイドン作曲オラトリオ「四季」ソプラノ独唱 於:簡易保険ホール

1986.4 新日本フィルハーモニー交響楽団第139回定期演奏会 ワーグナー作曲 楽劇《ジークフリート》演奏会形式 ブリュンヒルデ役 指揮:朝比奈隆 於:東京文化会館大ホール

1986.5 二期会公演 プッチーニ作曲「蝶々夫人」マダムバタフライ役 管弦楽:指揮:佐藤功太郎 演出:栗山昌良 小林一男ピンカートン 栗林義信 於:練馬文化センター大ホール

1986.5 名古屋フィルハーモニー交響楽団第122回定期演奏会 マーラー作曲「交響曲第4番」ソプラノ独唱 指揮:尾高忠明 於:名古屋市民会館

1986.5 札幌交響楽団第270回定期演奏会 マーラー作曲
「交響曲第4番」ソプラノ独唱 指揮:尾高忠明 管弦楽団:
札幌交響楽団 於:北海道厚生年金会館

1986.6 日生劇場 ロッシーニ歌の饗宴 ロッシーニ作曲
「歌劇作品」ソプラノ独唱 企画・制作:鈴木敬介 於:日生
劇場

1986.6 二期会オペラ公演 ドニゼッティ作曲《愛の妙薬》
(原語上演) アディーナ役 総監督:中山悌一 指揮:佐藤功
太郎 演出:ヤコボ・カウフマン 舞台美術:堀尾幸男 照明:
沢田祐二 衣裳:八重田喜美子 舞台監督:加藤三季夫 合
唱指揮:江上孝則 音楽スタッフ:三沢洋史, 現田茂夫, 堀俊
輔, 小谷彩子, 武藤理恵, 足立桃子 言語指導:小栗克己
プロンプター:ウバルド・ガルディーニ 演出助手:平尾力哉
舞台監督助手:大仁田雅彦, 中村敬一, 幸泉浩司, 西村垂
郎 装置製作:東宝舞台製作部 衣裳製作:東京衣裳 小道
具:ザ・スタッフ 照明操作:G・S(ゼネラル・スタッフ) かつ
ら:丸善 履物:神田屋, ザ・スタッフ 制作:高丈二, 高橋大
海, 加藤三季夫 共演:山路芳久ネモリーノ 大島幾雄ベル
コーレ 佐藤征一郎ドゥルカマーラ 清水まりジャンネッタ
合唱:二期会オペラスタジオ研究生・他 バンダ:生方正好
栃木浩規 酒井陽 吉澤真一 野崎明宏 戸坂恭毅 長池陽
次郎 管弦楽:東京フィルハーモニー交響楽団 チェンバロ:
武藤理恵 於:新宿文化センター

1986.7 東京都交響楽団特別演奏会 マーラー作曲「子供
の魔法の角笛」ソプラノ独唱
指揮:若杉弘 共演:伊原直子 勝部太 於:東京文化会館大
ホール

1986.7 東京の夏「ジョイント・コンサート」ソプラノ独唱
演奏曲:オペラ・アリア、オペラ二重唱 共演:小林一男 於:
草月ホール

1986.7 大阪フィルハーモニー交響楽団第218回定期演奏
会 ハイドン作曲 オラトリオ「天地創造」ソプラノ独唱
指揮:朝比奈隆 於:フェスティバルホール

1986.9 石巻文化センター落成記念コンサート ジョイント・
コンサート 於:石巻文化センター

1986.9 京都市交響楽団第287回定期公演 フォーレ作曲

「レクイエム」ソプラノ独唱 於:京都会館

1986.10 J.S.Bach/W.A.Mozart FESTIVAL ソプラノ
独唱 共演:小林道夫 於:椿山荘コンサートホール

1986.10 第19回早稲他大学フロイデハルモニー演奏会
ベートーヴェン作曲「交響曲第9番」ソプラノ・ソロ
於:新宿文化センター

1986.10 サントリーホール オープニング・シリーズ公演 マ
ーラー作曲「交響曲第8番」ソプラノII
指揮:若杉弘 管弦楽:共演:ルチア・ポップ、ベルンハルト・ヴ
ァイクル、佐藤しのぶ、伊原直子、白井光子、他 於:サントリ
ーホール

1986.11 モーリス・アンドレ公演 ゲスト出演 演奏曲:J.S.
バッハ作曲「カンタータ51番」ソプラノ独唱 指揮:管弦楽:
於:サントリーホール

1986.11 第2回つくば国際音楽祭公演 J.S.バッハ作曲「カ
ンタータ51番」ソプラノ独唱 指揮:管弦楽於:ノバホール

1986.11 二期会オペラ公演 モーツァルト作曲《フィガロの
結婚》スザンナ役 指揮:演出:佐藤信 管弦楽:於:日生劇
場

1986.12 第22回金城学院メサイア演奏会ヘンデル作曲
「メサイア」ソプラノ・ソロ 指揮:管弦楽:於:愛知文化講堂

1986.12 BEETHOVEN No9公演 ベートーヴェン作曲
「交響曲第9番」ソプラノ・ソロ 指揮:管弦楽:共演:於:サン
トリーホール

1986.12 第246回定期演奏会Bシリーズ ベートーヴェ
ン:交響曲第9番 二短調 op.125《合唱付》ソプラノ・ソ
ロ 指揮:小泉和裕 共演:春日成子 大野徹也 勝部太 合
唱/都響創立20周年記念合唱団、東京オラトリオ研究会
合唱指揮/郡司 博、加納由貴夫 於:東京文化会館 新宿
文化センター

1986.12 東京都交響楽団特別演奏会 ベートーヴェン:交
響曲第9番《合唱付》ソプラノ・ソロ 指揮:小泉和裕 共
演:春日成子 大野徹也 勝部太 合唱/都響創立20周年
記念合唱団、東京オラトリオ研究会 合唱指揮/郡司 博、加
納由貴夫 於:新宿文化センター

1987.1 NHKニューイヤー・オペラコンサート J.シュトラウス作曲オペレッタ《こうもり》よりアデーレの aria 指揮:尾高忠明 管弦楽団:東京フィルハーモニー交響楽団 於:NHKホール

1987.1 東京都交響楽団第247回定期演奏会 都響日本の作曲家シリーズ1(貴志康一没後50年を記念して)ソプラノ独唱 貴志康一作曲「日本歌曲」赤いかんざし、かもめ、かごかき、天の原 指揮:小松一彦 於:東京文化会館

1987.2 サントリー音楽賞受賞演奏家シリーズVイタリアオペラコンサート 栗林義信 常森寿子 豊田喜代美によるイタリアオペラコンサート 指揮:管弦楽:於:サントリーホール

1987.2 【ドイツ】リサイタル ケルン日本文化会館主催 リーダーイベント「日本歌曲」「ドイツ声楽作品」於:ドイツ・ケルン文化会館

1987.3 【ドイツ】リサイタル 在独日本大使館主催「豊田喜代美 歌曲のタベ」「日本歌曲」モーツァルト作曲「モテット」於:ラ・レドウトゥ(ボン)

1987.3 小林道夫・豊田喜代美・林誠による世界の名曲 市民音楽鑑賞のタベ 於:武蔵野市民文化会館大ホール

1987.3 群馬交響楽団第255回定期演奏会 ベートーヴェン作曲「荘厳ミサ曲」ソプラノソロ 指揮:高関健 於:群馬音楽センター

1987.4 東京都交響楽団第254回定期演奏会 音楽喜劇《スペイン風の時間》演奏会形式 コンセプション役、幻想歌劇《子供と呪文》演奏会形式 お姫様役 指揮:若杉弘 『若杉弘 首席指揮者就任披露—ラヴェルの没後50年を記念して—』共演:三林輝夫 大島幾雄 近藤伸政 佐藤征一郎 斎藤昌子 春日成子 佐藤征一郎 清水まり 佐橋美起 青木道子 村田健司 合唱/都響創立20周年記念合唱団 於:東京文化会館

1987.4 大阪フィルハーモニー創立40周年記念公演 マラー作曲「交響曲第2番」ソプラノ・ソロ 指揮:朝比奈隆 共演:伊原直子 於:大阪ザ・シンフォニーホール

1987.5 第12回音楽鑑賞会—歌の調べ— 豊田喜代美・勝部太ジョイントリサイタル 於:東村山中央公民館ホール

1987.6 東京アカデミー合唱団第29回定期公演 アンドリュウ・ロイド・ウェッバー作曲「レクイエム」(日本初演)ソプラノ・ソロ 指揮:秋山和慶 管弦楽団:東京交響楽団 共演:若本明志 於:東京文化会館

1987.7 大阪フィルハーモニー交響楽団第226回定期演奏会 モーツァルト作曲「レクイエム」ソプラノ・ソロ 於:大阪フェスティバルホール

1987.10 朝比奈隆の軌跡 永遠のシンフォニー公演 ベートーヴェン作曲「交響曲第9番」ソプラノ・ソロ 於:ザ・シンフォニーホール

1987.11 アルカディア定期公演 モーツァルト作曲「大ミサ曲ハ短調」ソプラノ・ソロ 指揮:管弦楽:於:

1987.11 NISSAY OPERA SIRIES '87 モーツァルト作曲《コジ・ファン・トゥッテ》フィオルディリージ役 指揮:秋山和慶 演出:鈴木敬介 共演:柏木博子ドラベッラ、大島幾雄グリエルモ、小林一男フェランド 蒲原史子デスピーナ、佐藤征一郎ドン・アルフォンソ 合唱:二期会合唱団 助演:広木ひとみ 瀬戸川佐知 代役:田浦リエ 岩森美里 管弦楽:東京交響楽団 チェンバロ:森島英子 演出補:平尾力哉 装置:若林茂 照明:吉井澄雄 衣装:渡辺園子、舞台監督:小栗哲家 合唱指揮:増井信貴 副指揮:岡田司 川本敬治 堀俊輔 現田茂夫 コレパティトゥア:森島英子 小谷彩子 丸山美佐 青山理恵 平川寿乃 古藤田みゆき 舞台監督助手:中村敬一 岸本多加志 幸泉浩司 安河内郁哉 堀井基宏、柴田忠志 管弦楽:メーキャップ:田中尚美 舞台技術:日生劇場技術部 制作進行:家坂真理 美術制作:俳優座舞台製作部 衣装制作:工房いち 小道具:クリエイション かつら:丸善かつら 履物:神田屋 制作:日生劇場 於:日生劇場

1987.12 一万人の「第九」コンサート ベートーヴェン作曲「交響曲第9番」ソプラノ・ソロ 指揮:山本直純 管弦楽団:大阪フィルハーモニー交響楽団 京都市交響楽団 関西フィルハーモニー交響楽団 合唱団:「1万人の第九」特別合唱団 大阪フィルハーモニー合唱団 大阪音楽大学 共演:荒田祐子 林誠 岡村喬夫 於:大阪城ホール

1987.12 第23回金城学院メサイア演奏会 ヘンデル作曲

「メサイア」ソプラノ・ソロ 指揮:管弦楽団:於:愛知文化講堂

1987.12 東京都交響楽団第264回定期演奏会 ヘンデル=W.A.モーツァルト「オラトリオ・メサイア」ソプラノ・ソロ 指揮:若杉弘 合唱:東京オラトリオ研究会 合唱指揮:郡司 博 共演:木村宏子 佐々木正利 勝部太 於:東京文化会館

1987.12 日本フィルハーモニー・炎の第九公演 ベートーヴェン作曲「交響曲第9番」ソプラノ・ソロ 指揮:小林研一郎 於:サントリーホール

1988.1 NHKニューイヤー・オペラコンサート 演奏曲:ヴェルディ作曲《椿姫》よりヴィオレッタのアリア 指揮:管弦楽団:於:NHKホール

1988.1 新日本フィルハーモニー交響楽団定期公演 モーツァルト作曲「レクイエム」ソプラノ独唱 指揮:於:東京文化会館

1988.2 東京都交響楽団第267回定期演奏会 ブラームス作曲「ドイツ・レクイエム」ソプラノ・ソロ 指揮:ベルンハルト・クレイ 共演:大島幾雄 合唱:都響創立20周年記念合唱団 合唱指揮:郡司博 於:東京文化会館

1988.2 ハンガリー親善特別公演 ヴェルディ作曲「レクイエム」Sop.ソロ指揮:小林研一郎 於:昭和女子大学人見記念講堂

1988.3 大阪フィルハーモニー合唱団創立15周年記念公演 A・L・ウェッバー作曲「レクイエム」ソプラノ独唱 於:ザ・シンフォニーホール

1988.6 日本フィルハーモニー交響楽団特別公演 小林研一郎首席指揮者就任記念 マーラー作曲「交響曲第2番」ソプラノ独唱 於:サントリーホール, 東京文化会館大ホール

1988.6.25,28 東京交響楽団第342回定期演奏会 ファリャの饗宴 ファリャ作曲 歌劇「はかない人生」サルー役 指揮:秋山和慶 共演:錦織健 他 於:東京文化会館

1988.11 第3回国民文化祭 秋のアミティ名曲コンサート マーラー作曲「交響曲第2番」ソプラノ独唱 指揮:管弦楽:於:西宮市民会館アミティホール

1988.11 マエストロ朝比奈 80才記念公演 大阪フィルハーモニー交響楽団 マーラー作曲「交響曲第2番」ソプラノ独唱 於:サントリーホール

1988.12 第24回金城学院メサイア演奏会 ヘンデル作曲「メサイア」ソプラノ・ソロ 指揮:管弦楽:於:愛知文化会館

1988.12 朝比奈隆/新日本フィル(第9)ベートーヴェン「交響曲第9番」ソプラノ・ソロ 於:サントリーホール

1988.12 明治学院大学グリークラブ公演 J.S.バッハ作曲「クリスマス・オラトリオ」ソプラノ・ソロ 指揮:管弦楽:於:サントリーホール

1988.12 コーロ・ヌオーヴォ第12回演奏会「ドイツ・バロックを代表する3人の作曲家によるマニフィカート集」ソプラノ・ソロ 指揮:管弦楽:於:石橋メモリアルホール

1988.12 小澤征爾/新日本フィル(第9)公演 ベートーヴェン作曲「交響曲第9番」ソプラノ・ソロ 於:東京文化会館大ホール, 昭和女子大学人見記念講堂

1989.1 NHKニューイヤー・オペラコンサート演奏曲:モーツァルト作曲《フィガロの結婚》より伯爵夫人のアリア指揮:管弦楽:於:NHKホール

1989.2 広島交響楽団第102回定期演奏会 ハイドン作曲オラトリオ「天地創造」ソプラノ独唱 指揮:高関健 於:広島厚生年金会館ホール

1989.2 東京交響楽団第348回定期演奏会 ワーグナー作曲 歌劇作品 ソプラノ独唱 共演:ジークフリート・フォーゲル 於:東京文化会館

1989.3 大阪フィルハーモニー交響楽団岐阜長良川ライオンズクラブ第12回定期演奏会 マーラー作曲「交響曲第4番」指揮:ソプラノ独唱

1989.3 大阪フィルハーモニー交響楽団第239回定期演奏会 マーラー作曲「交響曲第4番」ソプラノ独唱 指揮:於:大阪フェスティバルホール

1989.3 NHKクラシックステージ ソプラノ独唱 指揮:管弦楽:於:NHKホール

1989.4 【米国】 SYRACUSE Symphony(シユラクュー
ス交響楽団定期演奏会)ウェッバー作曲 「レクイエム」ソ
プラノ独唱 指揮:秋山和慶 共演:若本明志 於:Crouse-
Hinds Concert Theater, New York, U.S.A

1989.3 【米国】 1989 EMBASSY SPRING
CONCERT (在米日本大使館主催 春 コンサート)米国・
ワシントン D.C .豊田喜代美ソプラノリサイタル「日本歌曲」
「オペラ・アリア」 於:ワシントン・コロン美術館アートギャ
ラリー

1989.5 ウェールズ男声合唱団公演 「日本の歌」「英国の
歌」 ソプラノ独唱
於:日田市小平会館, サントリーホール, カザルスホール, 高
山市民文化会館

1989.6 【米国】 J.S.Bach W.A.Mozart FESTIVAL
OF JAPAN J.S.バッハ作曲 「カンタータ209番」 W.A.
モーツァルト作曲 「歌曲」 ソプラノ独唱 於:カーネギーホー
ル リサイタルホール 米国ニューヨーク市

1989.6 TOKYO ACADEMY CHORUS(東京アカデミ
ー合唱団) ハイドン作曲 オラトリオ「天地創造」 ソプラノ・ソ
ロ指揮:秋山和慶 管弦楽団:東京交響楽団 共演:手島孝
教 宮原省吾 於:東京文化会館大ホール

1989.10 日本フィルハーモニー交響楽団第414回定期演
奏会 ヘンデル作曲 オラトリオ「メサイア」 ソプラノ・ソロ 指
揮:渡邊暁雄 管弦楽団:日本フィルハーモニー管弦楽団 共
演:西明美 佐々木正利 木村俊光 日本フィルハーモニー
協会合唱団 於:サントリーホール

1989.10 さい帯バンク支援チャリティコンサート ソプラノ
独唱 於:すみだトリフォニーホール

1989.11 みんなのオペラ第5作 チャイコフスキー作曲《ス
ペードの女王》クロエ役 指揮:小澤征爾 管弦楽団:新日本
フィルハーモニー交響楽団 於:山梨県立文化ホール

1989.11 東京都交響楽団第298回定期公演 ラヴェル作
曲「シェヘラザード」ソプラノ独唱 指揮:若杉弘 於:サント
リーホール

1989.11 NISSAY OPERA SERIES '89 團伊玖磨作

曲 歌劇《夕鶴》つう役 指揮:團伊玖磨 演出:鈴木敬介
管弦楽:於:日生劇場

1989.12 新日本フィル(第9)特別公演 ベートーヴェン作
曲「交響曲第9番」ソプラノ・ソロ
於:オーチャードホール, 東京文化会館

1990.2 貴志康一の世界「貴志康一生誕80年記念演奏会」
貴志康一作曲 「日本歌曲」ソプラノ独唱
指揮:小松一彦 管弦楽:於:大阪ザ・シンフォニーホール

1990.2 豊田喜代美ソプラノリサイタル演奏曲 於:カザル
スホール G.F.ヘンデル作曲カンタータ「私の胸はさわぐ」
Hwv 132a G.F.ヘンデル作曲オラトリオ「メサイア」より・シ
オンの娘よ大いに喜べ・正しきことを述べる者の足は美しい・
我は知る、わが贖い主は生きたもうことを・神もし共にいまさ
ば J.S.バッハ作曲カンタータ「悲しみを知らぬ者」BWV209、
J.S.バッハ作曲カンタータ「もろびとよ歓呼して神を迎えよ」
BWV51 共演:小林道夫 Cond,Cemb 佐久間由美子 Fl.
松野美樹 Trp. 管弦楽:チェンバー・オーケストラ TOKYO
ヴァイオリン:鈴木学、青木高志、飛沢浩人 ヴィオラ:井野辺
大輔、長谷川弥生 チェロ:山本裕康、山広美芽 コントラバ
ス:菅原豊人

1990.3 仙台宗教音楽合唱団第15回演奏会 J.S.バッハ
作曲 「クリスマス・オラトリオ」ソプラノ・ソロ 指揮:管弦楽:
於:イズミティ 21

1990.4 子どもたちに贈る音楽と心のハーモニーコンサート
ソプラノ独唱 於:名古屋テレビアホール

1990.4 東京都交響楽団特別公演 貴志康一作曲 「日本
歌曲」ソプラノ独唱 指揮:於:東京文化会館大ホール

1990.4 旧東京音楽学校奏楽堂公演 「日本歌曲-花の名
歌集」ソプラノ独唱 於:旧東京音楽学校奏楽堂

1990.5 水戸芸術館コンサートホール ATM 開館記念コン
サート 間宮芳生作曲 歌劇《オペラ・夜長姫と耳男》 夜長
姫役 於:水戸芸術館

1990.5 武蔵野合唱団公演ベートーヴェン作曲「荘厳ミサ
曲」ソプラノ・ソロ 指揮:管弦楽団:於:東京文化会館大ホ
ール

1990.5 神戸学院大学 豊田喜代美ソプラノ・リサイタル
「日本歌曲」「ドイツ歌曲」於: Memorial Hall Green
Festival

1990.6 バッハ・モーツァルトフェスティバル「バッハの夕」
ソプラノ独唱 於:長野県県民文化会館中ホール

1990.6 東京フィルハーモニー交響楽団第318回定期演奏
会 フォーレ作曲「レクイエム」ソプラノ・ソロ
指揮:尾高忠明 管弦楽団:東京フィルハーモニー交響楽団
合唱団:東京アカデミー合唱団 共演:福島明也
於:オーチャードホール

1990.7 大宮市制施行 50 周年記念協賛事業 Classic
Concert 新日本フィルハーモニー交響楽団公演
シューマン作曲「ミサ・サクラ」(本邦初演) ソプラノ・ソロ
指揮:於:大宮ソニックシティ

1990.7 SHUBERT 枚方フロイデ合唱団 シューベルト作
曲「ミサ曲第6番」ソプラノ・ソロ 於:ザ・シンフォニーホール

1990.9 アゼリアコンサートシリーズ「豊田喜代美ソプラノの
夕」日本歌曲」「ドイツ声楽作品」「歌劇アリア」 於:練馬
区文化センター

1990.11 NISSAY OPERA SERIES '90 公演 團伊玖
磨作曲 歌劇《夕鶴》つう役 指揮:管弦楽:京都市交響楽団
共演:於:神戸文化ホール(大ホール)

1990.11 青少年のための「日生劇場オペラ教室」公演 グ
ルック作曲 歌劇《オルフェオとエウリディーチェ》 エウリデ
イーチェ役 指揮:管弦楽:於:日生劇場

1990.11 NISSAY OPERA SERIES '90 公演 グルッ
ク作曲 歌劇《オルフェオとエウリディーチェ》 エウリディーチ
ェ役 指揮:管弦楽:於:日生劇場

1990.12 KAY合唱団第82回定期演奏会 ヘンデル作曲
オラトリオ「メサイア」ソプラノ・ソロ 指揮:管弦楽:於:ゆうぼ
うと簡易保険ホール

1990.12 労音なら公演 ベートーヴェン作曲「交響曲第9
番」ソプラノ・ソロ指揮:管弦楽:於:奈良県文化会館大ホール

1990.12 大阪フィル・アルカイック定期公演 モーツァルト

作曲「モテット」ソプラノ・ソロ 指揮:管弦楽:於:アルカイッ
クホール

1990.12 日本フィルハーモニー交響楽団第九特別公演 ベ
ートーヴェン作曲「交響曲第9番」ソプラノ・ソロ
指揮:於:簡易保険ホール

1991.1 東京交響楽団第368回定期演奏会 マーラー作曲
「子どもの不思議な角笛」ソプラノ独唱 指揮:於:オーチャ
ードホール

1991.3 東京フィルハーモニー交響楽団名曲コンサート マ
ーラー作曲「交響曲第4番」ソプラノ独唱 指揮:於:オーチ
ャードホール

1991.6 NHK交響楽団モーツァルト・シリーズ 1989-
1991・モーツァルト没後200年記念公演「ヨーロッパ諸都
市のモーツァルト」ソプラノ独唱 指揮:於:サントリーホール

1991.7 大阪フィル第30回東京定期公演 ベートーヴェン
作曲「交響曲第9番」ソプラノ・ソロ 指揮:於:東京芸術劇
場

1991.9 豊田喜代美ソプラノリサイタル「モーツァルトの描い
た女性像を歌う」演奏曲・《フィガロの結婚》より 愛の神照覧
あれ ・《ドン・ジョヴァンニ》より 手を取り合って、ぶってよマ
ゼット、あの恩知らずは約束を破って ・《魔笛》より 恋を知る
男たちは ・《イドメネオ》より もし父をうしなうならば ・《コ
ジ・ファン・トゥッテ》より 女も15歳になれば、岩のように動
かず 指揮:佐藤功太郎 管弦楽:東京フィルハーモニー交響
楽団 於:サントリーホール(大)

1991.9 一関文化センターコンサートサロン・デュオリサイタ
ル「日本歌曲」「オペラ・アリア」ソプラノ独唱 於:一関セン
ター大ホール

1991.10 ドイツ・バッハ・ゾリステン公演「オール・バッハ・
プログラム」ソプラノ独唱 於:昭和女子大学人見記念講堂

1991.9 NISSAY OPERA SIRIES '91・モーツァルト没
後200年記念6大オペラ公演 モーツァルト作曲 《イドメネ
オ》イリア役 指揮:飯守泰次郎 演出:鈴木敬介 共演:市
原多朗 他 管弦楽:於:日生劇場

1991.10 とちぎ文化の序曲・ステージ91主催 豊田喜代美

ソプラノリサイタル「日本歌曲」「シューベルト歌曲」「モーツァルト歌劇アリア」 於:宇都宮文化会館

1991.10 第31回三友合唱団定期公演 シューベルト作曲「悲しみの聖母」ソプラノ・ソロ 指揮:萩谷納 於:石橋メモリアルホール

1991.11 大阪フィルハーモニー第260回定期演奏会 ヤナーチェック作曲「グラゴール・ミサ」ソプラノ・ソロ 指揮:於:フェスティバルホール

1991.11 NHK交響楽団第1155回定期演奏会 マラー作曲「交響曲第2番」ソプラノ・ソロ 指揮:尾高忠明 共演:伊原直子 於:NHKホール

1991.11 NISSAY OPERA SIRIES '91・モーツァルト没後200年記念6大オペラ公演 モーツァルト作曲《コジ・ファン・トゥッテ》フィオルディリージ役 指揮:秋山和慶 演出:鈴木敬介 管弦楽:於:日生劇場

1991.11 豊田喜代美ソプラノリサイタル「日本歌曲とシューベルト歌曲」 於:甲南中学校・高等学校講堂

1991.12 子どもたちに贈る音楽と心のハーモニーコンサート ソプラノ独唱 於:名古屋テレビアホール

1991.12 いずみホール 甦る最後のきらめき「モーツァルト1791/1991」IV公演 モーツァルト作曲「レクイエム」ソプラノ・ソロ 指揮:管弦楽:於:いずみホール

1991.12 高松交響楽団40周年記念定期公演 マラー作曲「交響曲第2番」ソプラノ・ソロ 指揮:管弦楽:於:香川県県民ホール

1991.12 京都市交響楽団 1991BEETHOVEN SYMPHONY No9 CHORAL 公演 ベートーヴェン作曲「交響曲第9番」ソプラノ・ソロ 指揮:於:大阪ザ・シンフォニーホール

1992.1 米子労音主催「豊田喜代美ソプラノリサイタル/J.S.バッハ,日本歌曲」 於:米子市公会堂大ホール

1992.1 NHK交響楽団モーツァルト・シリーズ 1989-1991公演 ヘンデル作曲 モーツァルト編曲 オラトリオ「メサイア」ソプラノ・ソロ 指揮:若杉弘 於:サントリーホール

1992.2 山形交響楽団設立20周年記念・モーツァルト没後200年記念公演 モーツァルト作曲「戴冠式ミサ」ソプラノ・ソロ 指揮:於:山形市中央公民館

1992.3 NHK交響楽団第1167回定期演奏会 R.シュトラウス作曲「四つの最後の歌」ソプラノ独唱 指揮:山下一史於:NHKホール

1992.3 東京フィルハーモニーウエルザー・メストスペシャルマーラー作曲「交響曲第4番」ソプラノ独唱 指揮:於:オーチャードホール

1992.5 NHK交響楽団第1172回定期公演ベートーヴェン作曲「交響曲第9番」ソプラノ・ソロ 指揮:於:NHKホール

1992.6 志木市良い音楽を聴く会第8回コンサート「歌と室内楽の夕」 於:志木市民会館ホール

1992.6 バロック音楽の夕 J.S.バッハ作曲「カンタータ51番」ソプラノ独唱 指揮:於:三重県文化会館

1992.7 読売オーケストラハウス公演「スペイン歌曲と世界の愛唱歌」 指揮:於:新宿文化センター

1992.7 大合唱活動30周年記念演奏会 モーツァルト作曲「レクイエム」ソプラノ・ソロ 指揮:於:ザ・シンフォニーホール

1992.7 新日本フィル創立20周年記念コンサートシリーズスペシャルガラコンサート 於:オーチャードホール

1992.9 東京フィルハーモニー交響楽団オペラコンチェルタンテ・シリーズ第2回 サリエリ作曲 歌劇《音楽が第一、言葉は次ぎに》ソプラノ独唱 指揮:大野和士 於:オーチャードホール

1992.11 東京都交響楽団第359回定期演奏会 マラー作曲「嘆きの歌」ソプラノ独唱 指揮:若杉弘 於:東京文化会館

1992.12 愛知県芸術劇場開館記念事業 ヘンデル作曲「メサイア」ソプラノ・ソロ 指揮:管弦楽:名古屋フィルハーモニー管弦楽団 於:愛知県芸術劇場コンサートホール

1992.12 第九」演奏500回記念 大阪フィルハーモニー交響楽団 第九シンフォニーベートーヴェン作曲「交響曲第9番」ソプラノ・ソロ 指揮:朝比奈隆 於:大阪フェスティバル

ホール

1992.12 新日本フィルハーモニー交響楽団(第9)特別公演 1992 ベートーヴェン作曲「交響曲第9番」ソプラノ・ソロ 指揮:朝比奈隆 於:オーチャードホール 於:東京文化会館 於:サントリーホール

1993.1 東京都交響楽団公演 ラヴェル「マラルメの3つの詩」ソプラノ独唱 指揮:若杉弘 於:ソニックシティ

1993.2 日本フィル第18回九州公演 ベートーヴェン作曲「交響曲第9番」ソプラノ・ソロ 指揮:於:田川文化センター, 長崎市公会堂, 佐賀市文化会館, 大牟田文化会館, 福岡サンパレス, 九州厚生年金会館ホール, 臼杵市民会館, 宮崎市民会館, 鹿児島市民文化ホール, 熊本市市民会館, 石橋文化ホール, 唐津市民会館

1993.4 モーツァルトの宝石箱II モーツァルト作曲「レクイエム」ソプラノ・ソロ 指揮:管弦楽:於:昭和女子大学人見記念講堂

1993.6 東京フィルハーモニー交響楽団第348回定期演奏会 ベルク作曲「初期の七つのうた」ソプラノ独唱 指揮:大野和士 於:渋谷オーチャードホール

1993.6 大フィル・クラブ第6回音楽会ジョイントリサイタル 日本歌曲,ドイツ歌曲,スペイン歌曲 ソプラノ独唱 於:大阪フィルハーモニー会館

1993.6 Joseph Haydn 天地創造 ハイドン作曲 オラトリオ「天地創造」ソプラノ独唱 指揮:管弦楽:於:昭和女子大学人見記念講堂

1993.7 豊田喜代美ソプラノリサイタル 於:カザルスホール 演奏曲:J.S.バッハ作曲 アンナ・マグダレーナ・バッハのためのクラヴィエア小曲集より・レチタティーヴォ「満ち足りて心安かたれ」アリア「眠れ、疲れし眼」BWV.82・ジョヴァンニーニのアリア「お前の心をくれるなら」BWV.518・アリア「御身がともにいるならば」BWV.108※作曲:シュテルツェル、J.S.バッハ作曲 カンタータ「結婚カンタータ/消えよ、悲しみの影」BEV.202 W.A.モーツァルト作曲・アリア「この胸を眺めて」聖墓の音楽 K.42・アリア「怒り狂った四肢は咆哮し」第一誠律の責務 K.35 W.A.モーツァルト作曲 モテット「踊れ、喜べ、幸いなる魂よ」K.165 共演:大友直人 Cond 中野振一

Cemb 管弦楽:バッハ・カンタータ・アンサンブル

1993.8 MOZART MISSA in c-MOLL MAHLER KINDERTOTENLIEDER モーツァルト作曲「ハ短調ミサ曲」ソプラノ・ソロ 於:大阪ザ・シンフォニーホール

1993.8 彩の国元年さいたま芸術文化祭公演 J.S.バッハ作曲「ロ短調ミサ曲」ソプラノ・ソロ 指揮:管弦楽:於:大宮ソニックシティ大ホール

1993.9 東京都交響楽団題375回定期演奏会 ラヴェル作曲「マラルメの3つの詩」ブーレーズ作曲「マラルメの肖像(本邦初演)」ソプラノ独唱 指揮:若杉弘 於:サントリーホール

1993.10 第16回定期演奏会 藤沢福音コール シューベルト作曲「ミサ曲第6番」ソプラノ・ソロ 指揮:管弦楽:於:藤沢市民会館大ホール

1993.10 豊田喜代美ソプラノリサイタル 大阪イシハラホール開館記念公演「英国歌曲・ドイツ歌曲・日本歌曲・フランス歌曲」共演者:小坂圭太ピアノ 於:大阪イシハラホール

1993.10 ドイツ・バッハ・ゾリステン公演 J.S.バッハ作曲「マタイ受難曲」ソプラノ・ソロ 於:新宿文化センター, 仙台市青年文化センター

1993.11 大阪フィルハーモニー交響楽団第276回定期演奏会 ベートーヴェン作曲「荘厳ミサ曲」ソプラノ・ソロ 指揮:於:大阪フェスティバルホール

1993.11 東京フィルハーモニー交響楽団 オペラコンチェルトンテ・シリーズ 第6回 ドビュッシー作曲《ペレアスとメリザンド》メリザンド役 指揮:於:オーチャードホール

1993.11 交響曲第9番「合唱付」作品125 ベートーヴェン作曲「交響曲第9番」ソプラノ・ソロ 指揮:管弦楽:於:瀬戸市文化センター文化ホール

1993.11 青少年健全育成文化事業 豊田喜代美&荘村清志デュオリサイタル 於:新市町中央公民館大ホール

1993.12 荘村清志・豊田喜代美 デュオリサイタル「日本歌曲とスペイン歌曲」於:大阪いずみホール

1993.12 群馬交響楽団公演 ベートーヴェン作曲「交響曲第9番」ソプラノ・ソロ 指揮:高関 健於:足利市民会館、館林市民会館

1993.12 労音奈良「第九」公演 ベートーヴェン作曲「交響曲第9番」ソプラノ・ソロ 指揮:管弦楽:於:奈良県文化会館大ホール

1993.12 合唱団さきたま定期公演 J.S.バッハ作曲「ミサ曲口短調」ソプラノ・ソロ 指揮:管弦楽:於:狭山市市民会館大ホール

1994.1 Takugin New Year Concert ソプラノ独唱 指揮:管弦楽団:於:札幌市民会館

1994.1 石川県立美術館主催 豊田喜代美ソプラノリサイタル「日本の歌・西洋の歌」共演:小坂圭太ピアノ 於:石川県立美術館ホール

1994.1 NEW YEAR CONCERT オペラとシンフォニーの楽しみ オペラ・アリア独唱 指揮:管弦楽:於:ザ・シンフォニーホール

1994.2 広島交響楽団第144回定期演奏会 マーラー作曲「子供の不思議な角笛」ソプラノ独唱 指揮:高関健 於:広島国際会議場フェニックスホール

1994.2 山形交響楽団題 92 回定期公演 モーツァルト作曲 歌劇「フィガロの結婚」スザンナ役 指揮:於:山形県県民会館

1994.3 ムシカ・ハルモニア公演 R.シュトラウス作曲「四つの最後の歌」ソプラノ独唱 指揮:管弦楽:於:東京芸術劇場大ホール

1994.4 いずみホール4周年記念公演「日本の春・中国の春」ソプラノ独唱 於:いずみホール

1994.4 LIEDER VON AMADEUS 豊田喜代美&錦織健リートとオペラ・アリア集「リートとオペラ・アリア集」於:フイリアホール

1999.4 木下牧子作品展「歌曲のタベ」ピアノ:木下牧子ソプラノ:豊田喜代美 バリトン:三原剛 於:銀座王子ホール

1994.6 KAY89th Concert ドイツ レクイエム ブラームス作曲「ドイツ レクイエム」ソプラノ独唱 指揮:管弦楽:於:東京芸術劇場

1994.6 豊田喜代美ソプラノ・リサイタル 日本のうた 於:サントリーホールブルーローズ 演奏曲:北原白秋・詩/山田耕筰・曲:からたちの花、鐘が鳴ります 北原白秋・詩/橋本国彦・曲:薊の花、なやましきおそ夏の日 北原白秋・詩/梁田貞・曲:城ヶ島の雨 谷川俊太郎・詩/林光・曲:子供と線路 北山冬一郎・詩/團伊玖磨・曲:わがうた 阿倍仲麻呂・詩/貴志康一・曲:天の原 貴志康一・詩・貴志康一・曲:かもめ 他 共演:小坂圭太ピアノ 佐久間由美子フルート

1994.7 文化芸術会館室内楽の会 豊田喜代美(ソプラノ)、荘村清志(ギター)デュオ・コンサート 於:京都府立文化芸術会館

1994.7 ハイドン作曲 オラトリオ「四季」ソプラノ独唱 指揮:管弦楽:於:ザ・シンフォニーホール

1994.8 奥志賀高原「森の音楽堂」主催「デュオリサイタル」「日本歌曲とスペイン歌曲」共演:荘村清志ギター 於:奥志賀高原「森の音楽堂」

1994.9 東京アカデミー合唱団創立 30 周年記念演奏会 第36回定期演奏会 J.S.バッハ作曲「マタイ受難曲」ソプラノ・ソロ 指揮:秋山和慶 交響楽団:東京交響楽団 共演:加納里美 手島孝教 宮原省吾 田中勉 於:東京芸術劇場(池袋)

1994.9 札幌交響楽団第361回定期演奏会 マーラー作曲「交響曲第2番・復活」ソプラノソロ 指揮:尾高忠明於:北海道厚生年金会館

1994.10 大阪センチュリー交響楽団公演モーツァルト・アーバント ソプラノ独唱 於:大津市民会館大ホール

1994.10 第 25 回奈良県芸術祭参加公演 ヴォーカル・デュオ・リサイタル 於:河合町立文化会館

1994.10 新日本フィルハーモニー交響楽団公演 ヘンデル作曲「メサイア」ソプラノ・ソロ 指揮:於:埼玉県草加文化会館

- 1994.11 第34回三友合唱団定期公演 サンサーンス作曲
「レクイエム」ソプラノ・ソロ 指揮:萩谷納 於:石橋メモリアルホール
- 1994.11 川西りんどう祭'94 オープニング・コンサート ピアノと歌とギターのジョイントコンサート
共演:荘村清志ギター 於:川西市文化会館大ホール
- 1994.12 大阪フィルハーモニー交響楽団第284回定期公演
フォーレ作曲「レクイエム」ソプラノ独唱
指揮:於:大阪フェスティバルホール
- 1994.12 ベートーベン交響曲第9番「合唱付」ソプラノ・ソロ
指揮:高関健於:群馬音楽センター
- 1994.12 第5回記念 歓喜の大合唱 公演会 ベートーヴェン作曲「交響曲第9番」ソプラノ・ソロ 指揮:高関健於:群馬音楽センター
- 1994.12 名古屋フィルハーモニー第九特別公演 ベートーヴェン作曲「交響曲第9番」ソプラノ・ソロ
指揮:於:名古屋市民会館大ホール
- 1995.3 藤沢福音コール定期公演 J.S.バッハ作曲「マタイ受難曲」ソプラノ・ソロ 指揮:管弦楽:於:藤沢市民会館
- 1995.4 日本歌曲 花の名歌集 ソプラノ独唱 於:和光市民文化センター
- 1995.5 石川県立美術館主催「豊田喜代美マーラーを歌う」
マーラー作曲「リュッケルトによる5つの歌曲」
共演:小坂圭太ピアノ 於:石川県立美術館ホール
- 1995.5 静岡音楽館 AOI 開館記念公演 J.S.バッハ作曲「コーヒー・カンタータ」ソプラノ独唱 指揮:管弦楽:於:静岡音楽観 AOI
- 1995.5 オラトリオ東京創立公演ハイドン・オラトリオ「天地創造」ソプラノ独唱,指揮:管弦楽:於:カザルスホール
- 1995.6 KAY Choir The 91th Regular Concert J.S.バッハ作曲「ロ短調ミサ曲」ソプラノ・ソロ 指揮:管弦楽:於:池袋東京芸術劇場
- 1995.7 ブラームス ドイツ・レクイエム ブラームス作曲
「レクイエム」ソプラノ独唱 指揮:管弦楽:於:大阪ザ・シン
フォニー・ホール
- 1995.7 豊橋交響楽団創立30周年記念公演 マーラー作曲「交響曲第2番」ソプラノ独唱 指揮:於:愛知県豊橋勤労福祉会館大ホール
- 1995.7 被爆 50 年平和祈念チャリティ アートフェスティバル ながさきメモリアルコンサート'95 ジョイント リサイタル
於:長崎チトセピアホール
- 1995.8 ベートーヴェン「第九」演奏会 ソプラノ・ソロ 指揮:管弦楽:於:埼玉会館大ホール
- 1995.8 ナゴヤシティ管弦楽団特別公演 モーツァルト作曲「モテット」ソプラノ独唱 指揮:於:愛知県芸術劇場コンサートホール
- 1995.9 豊田喜代美 ソプラノリサイタル 四季のコンサート
秋「歌曲」シューベルト,ブラームス,シューマン,ヴォルフ,
マーラー作品 於:浜松教育文化会館
- 1995.9 読売日響名曲シリーズ マーラー作曲「交響曲第4番」ソプラノ独唱 指揮:於:サントリーホール
- 1995.10 徹底モーツァルト 第2夜声の響き ソプラノ独唱
於:ヨコスカベイサイドスポット
- 1995.10 【ドイツ】 LIEDER ABEND(歌曲の夕べ/ソプラノリサイタル) Schubert, Schumann, Brahms, Wolf, Strauss, Mahler 作品 共演:ピアノ:H.フィールテル 於:Palais Wittgenstein,Duesseldorf)
- 1995.10 東京フィルハーモニー交響楽団公演オペラ・コンチェルタンテ ヒンデミット作曲「オペラ3部作」ソプラノ独唱
指揮:大野和士 於:オーチャードホール
- 1995.11 三鷹市芸術文化センター・オープニング公演ガラコンサート J.S.バッハ作曲「カンタータ51番」ソプラノ独唱
指揮:沼尻竜典 管弦楽: 於:三鷹市芸術文化センター
- 1995.11,12 浜離宮朝日ホール3周年記念公演 モノオペラ「火の遺言」(世界初演)一柳慧作曲 大岡信作詩 共演者:
於:浜離宮朝日ホール, 倉敷市芸文館, 大阪いずみホール,
しらかわホール, 水戸芸術館
- 1995.12 オラトリオ東京第2回定期公演 ハイドン作曲オラ

トリオ「四季」ソプラノ独唱 指揮:管弦楽:於:紀尾井ホール

1995.12 群馬交響楽団創立50周年特別企画ベートーヴェン全交響曲連続公演 ベートーヴェン作曲「交響曲第9番」ソプラノ・ソロ 指揮:高関健 於:浜離宮朝日ホール, 椎名町総合文化会館・エコー

1996.1 ニューイヤー・オペラ・ガラ ロッシーニ, ヴェルディ, モーツァルト オペラアリア独唱
指揮:管弦楽:於:彩の国さいたま芸術劇場

1996.3 豊田喜代美ソプラノリサイタル 於:サントリーホール 演奏曲:C.ドビュッシー作曲:牧神の午後への前奏曲 G.マーラー作曲:リュッケルトの五つの歌 R.シュトラウス作曲:オーケストラ歌曲・セレナーデ・明日の朝・チェチーリエ R.ワーグナー作曲:楽劇《トリスタンとイゾルデ》より前奏曲 R.シュトラウス:四つの最後の歌 指揮:飯守泰次郎管弦楽:新日本フィルハーモニー交響楽団

1996.8 群馬交響楽団演奏会 R.シュトラウス作曲「四つの最後の歌」ソプラノ独唱 指揮:高関健 於:群馬音楽センター

1996.12 大阪センチュリー交響楽団特別公演ヘンデル作曲「メサイア」ソプラノ独唱 指揮:於:ザ・シンフォニーホール

1997.2 オペラ・アンサンブル モーツァルト四大オペラの魅力 《フィガロの結婚》《コシ・ファン・トゥッテ》《魔笛》《ドン・ジョヴァンニ》よりオペラ・アリアと二重唱 於:電力館

1997.4 かつしかシンフォニーヒルズ開館 5周年記念特別演奏会 モーツァルト連続演奏会「女声アリアの競演」ソプラノ独唱 指揮:大野和士 管弦楽:東京フィルハーモニー交響楽団 於:かつしかシンフォニーヒルズ

1997.7 徹底ショパン第4夜 ショパン作曲「歌曲」ソプラノ独唱 於:ヨコスカベイサイドスポット

1997.9 豊田喜代美&河野克典デュオリサイタル:シューベルト歌曲,モーツァルト歌劇アリア 於:明石市アワーズホール

1997.11 浜離宮朝日ホール開館5周年記念公演 折々のうた「万葉集」ソプラノ独唱 於:浜離宮朝日ホール

1997.11 浜離宮朝日ホール開館5周年記念公演 「山田耕筈と貴志康一」ソプラノ独唱 於:浜離宮朝日ホール

1997.11 静岡音楽館 AOI シリーズ 折々のうたII ソプラノ独唱 於:浜離宮朝日ホール

1997.12 第33回金城学院メサイア演奏会 ヘンデル作曲「メアイア」ソプラノ独唱 指揮:管弦楽:名古屋フィルハーモニー管弦楽団 於:愛知県芸術劇場コンサートホール

1997.12 カザルスホール 10周年記念 カザルスホール倶楽部クリスマスコンサート モーツァルト作曲「モテット」J.S.バッハ作曲「カンタータ209番」ソプラノ独唱 指揮:管弦楽:於:カザルスホール

1997.12 東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団 第九特別公演 ベートーヴェン「交響曲第9番」ソプラノ・ソロ 指揮:於:サントリーホール

1998.1 群馬交響楽団第352回定期公演 プッチーニ作曲歌劇《トスカ》演奏会形式(原語上演)トスカ役 指揮:高関健 於:群馬音楽センター

1998.1 第1回地方都市オーケストラ・フェスティバル公演 プッチーニ作曲 歌劇《トスカ》トスカ役 指揮:高関健 管弦楽:群馬交響楽団 於:すみだトリフォニーホール

1998.3 藤沢福音コーン創立20周年記念演奏会 ヘンデル作曲「メサイア」ソプラノ・ソロ 指揮:管弦楽:於:藤沢市民会館大ホール

1998.3 Beethoven ミサ・ソレニムス公演 ベートーヴェン作曲「荘厳ミサ曲」ソプラノ・ソロ 指揮:管弦楽:於:東京オペラシティコンサートホール

1998.4 JTアートホール室内楽シリーズ「世紀末と黎明の室内楽」公演 シェーンベルク作曲「月に憑かれたピエロ」ソプラノ独唱 於:JTアートホール

1998.6 朝比奈隆&新日本フィル ベートーヴェン・チクルスV ベートーヴェン作曲「交響曲第9番」ソプラノ・ソロ 於:サントリーホール

1998.9 九州交響楽団207回定期公演マーラー作曲「交響曲第4番」ソプラノ独唱 指揮:於:福岡サンパレス

1998.9 群馬交響楽団第358回定期演奏会 ベートーヴェン作曲「交響曲第9番」ソプラノ・ソロ 指揮:高関健於:群馬音楽センター

1998.9 大阪シンフォニエッタクワイア創立20周年記念公演 ベートーヴェン作曲「ミサ ソレムニス」ソプラノ・ソロ 於:フェスティバルホール

1998.10 新潟市民芸術文化会館開館記念事業公演 J.S. バッハ作品 ソプラノ独唱 於:新潟市民芸術会館

1998.11 マタイ受難曲 BWV244 J.S.バッハ作曲「マタイ受難曲」ソプラノ・ソロ 指揮:秋山和慶管弦楽:札幌交響楽団 於:札幌コンサートホール

1998.12 第34回金城学院メサイア演奏会 ヘンデル作曲 オラトリオ「メサイア」ソプラノ独唱 指揮:モーシェ・アツモン 管弦楽:名古屋フィルハーモニー管弦楽団 於:愛知県芸術劇場コンサートホール

1998.12 JTアートホール室内楽シリーズ公演「クリスマス カンタータのタベ」ソプラノ独唱 於:JTアートホール

1999.1 フロンティア ニューイヤーコンサート ベートーヴェン作曲「第九交響曲」ソプラノ・ソロ 指揮:管弦楽:於:柏市民文化会館

1999.2 この国に生まれた喜びをすべての子どもに第1回コンサート 21世紀子ども応援キャンペーン. ソプラノ独唱 於: NHKホール

1999.3 貴志康一生誕 90 周年記念公演 貴志康一作曲「日本歌曲」ソプラノ独唱 於:メイシアター

平成 11.4 木下牧子作品展[歌曲のタベ] ソプラノ独唱 共演:ピアノ木下牧子 於:王子ホール

1999.4 豊田喜代美スプリングコンサート 於:浜離宮朝日ホール 第一部:ギターと共に: 荘村清志ギター 演奏曲:J. ロドリゴ作曲:4 つの愛のマドリガル・何で洗えばいいのでしょう・君に夢中・愛しい人、どこから来たの・お母さん、ボプラの森に行ってきた F. タルレガ作曲:アルハンブラの思い出(ギター独奏) E. グラナドス作曲:昔風のスペインの歌曲集から・悲しみのマハ・ゴヤのマハ ・E. デッラックア作曲:ヴィラネル 第二部:ピアノと共に:小坂圭太ピアノ 英国民謡:イングランド民謡:埴生の宿、ロビンフッド・アイルランド民謡:サリーガーデン、トランペットの響き高らかに、ダニーボーイ・スコットランド民謡:ロッホ・ローモンド、アニーローリー・ウェールズ民謡:白い岩のデイヴィッド、なつかしき愛の歌、夜を通して、

G.F.ヘンデル作曲:オペラ《セルセ》よりセルセのアリア“オンブラ・マイ・フ”G.F.ヘンデル作曲:オペラ《リナルド》よりアルミレナのアリア“泣かせたまえ”F.レハール作曲:オペレッタ《メリーウイドウ》よりハンナのアリア“ヴィリアの歌” 共演:荘村清志ギター 小坂圭太ピアノ

1999.4 札幌交響楽団第412回定期演奏会 マラー作曲「交響曲第4番」ソプラノ独唱 指揮:尾高忠明 於:札幌コンサートホール

1999.6 豊田喜代美& 荘村清志 Joint Concert 「日本歌曲、世界の名歌、スペイン歌曲」 於:東久留米市民会館

1999.12 豊田喜代美ソプラノリサイタル 於:浜離宮朝日ホール 演奏曲:アダン作曲:オー・ホーリーナイト(賛美歌第219 番さやかに星はきらめき)W.A.モーツァルト作曲:モテット K165 より、J.S. バッハ作曲:クリスマス・オラトリオ BWV248 より・第 4 曲アリア「シオンよ備えよ」(アルト寺谷千枝子)・第 39 曲アリア「わが救い主よ、汝の御名は」・第 56 曲レチタティーヴォ「不正の輩よ、主を倒そうとするのか」・第 57 曲アリア「御手の一振りで無力な人間は失墜する」トーマ作曲:歌劇「ミニョン」第二幕より“私の名はティタニア”(ポロネーズ)オッフェンバック作曲:オペラ《ホフマン物語》より・舟歌-美しい夜、恋の夜(ジュリエットとニクラウスの二重唱)・逃げてしまったの、小鳩は(アントーニアのアリアJ. シュトラウス作曲:喜歌劇「踊り子」よりエルスラーのアリア“ズィーファリングに花が咲き” シュトルツ作曲:ウィーン小唄より“プラター公園に春が来て”賛美歌・天なる神には御栄えあれ:第 114 番(ウィリス作曲)・ああ、ベツレヘムよ:第 115 番(リードナー作曲)・高きみそらより:第 101 番(ルター、バッハ作曲)・我ら東方の三博士:第 52 番(ホプキンス作曲)・天には栄え:第 98 番(メンデルスゾーン作曲)・牧人よ:第 127 番(シュタナー作曲)・荒れ野のはてに:第 106 番(フランス古謡)

1999.12 '99 岐阜第九演奏会 ベートーヴェン作曲「第9交響曲」ソプラノ・ソロ 指揮:管弦楽:於:長良川交際会議場メインホール

2000.4 豊田喜代美・荘村清志ジョイントリサイタル 於:成東町文化会館のぎくプラザ

2000.5 もりのみやこコンサート 於:石川県厚生年金会館 ゲスト出演 演奏曲:ゴンドラの唄 ヴィリアの歌《メリーウィ

ドウ》よりアリア 指揮：榊原栄 管弦楽：オーケストラ・アンサンブル金沢

2000.5 朝日新聞社主催 千年の響き 燦めく時空のうた
ふるさとを訪ねて ソプラノ独唱

演奏曲：ふるさとの、故郷の廃家、五木の子守歌、島原の子守歌、美しき天然、波浮の港、ゴンドラの歌、宵待草、月の砂漠、故郷を離るる歌、ともしび、帰れソレントへ、ソルベグの歌、コンドルは飛んでいく、他 共演：五郎部俊朗、テノール
ピアノ小坂圭太 於：浜離宮朝日ホール

2000.6 JTアートホール室内楽シリーズ「カンタータのタベ」
公演 J.S.バッハ作曲 「カンタータ151番,78番」 ソプラノ
独唱 於：JTアートホール

2000.9 群馬交響楽団第376回定期演奏会 指揮：高関健
J.S.バッハ作曲 「マタイ受難曲」 ソプラノ独唱
指揮：高関健 管弦楽：群馬交響楽団 共演者：多田羅迪夫
イエス 波多野均エヴァンゲリスト 秋葉京子アルト 福島明也
バス 於：群馬音楽センター

2000.12 PFU クリスマスチャリティコンサート ソプラノ独唱
曲：ヘンデル歌劇「セルセ」よりオンブラ・マイ・フ、ヴィヴァ
ルディ「モテット/まことの安らぎはこの世にはなく」J.S.バッハ
「カンタータ147番/心と口と行いと命もて/イエスよ道をつくり
給え」指揮：ロビン・オニール 管弦楽：オーケストラ・アンサン
ブル金沢 於：金沢市観光会館

2000.12 21世紀ウエルカムチャリティコンサート群馬交響
楽団公演 ベートーヴェン作曲「交響曲第9番」ソプラノ・ソロ
指揮：高関健 共演：秋葉京子 五郎部俊朗 多田羅迪夫
於：群馬音楽センター

2001.2 オーケストラ・アンサンブル金沢 第100回定期演
奏会 ブラームス作曲 「ドイツ・レクイエム」 ソプラノ独唱
於：金沢観光会館

2001.2 オーケストラ・アンサンブル金沢 第15回 名古屋定
期演奏会 ブラームス作曲 「ドイツ・レクイエム」 ソプラノ独
唱 於：愛知県立芸術コンサートホール

2001.4 大阪センチュリー交響楽団 第68回 定期演奏会
ハイドン作曲オラトリオ「天地創造」ソプラノ独唱 指揮：於：
ザ・シンフォニーホール

2001.6 静岡県立静岡商業高等学校 文化公演 豊田喜代
美ソプラノリサイタル「日本のうた～世界のうた 於：静岡市
民文化会館

2001.6 TEPCO 地球館 Concert 豊田喜代美ソプラノリ
サイタル ピアノ小坂圭太 於：TEPCO 電力館

2001.7 豊田喜代美ソプラノリサイタル 於：浜離宮朝日ホ
ール イタリアオペラより

演奏曲：G. ドニゼッティ作曲：オペラ《シャモニーノリンダ》よ
りリンダのアリア“この心の光”、V. ベッリーニ作曲：オペラ《カ
プレーティとモンテッキ》よりジュリエッタのアリア“おお、いく
たびか涙にくれて”、G. ドニゼッティ作曲：オペラ《愛の妙薬》
よりネモリーノのアリア“人知れぬ涙” ※テノール独唱、G. プ
ッチーニ作曲、・オペラ「ボエーム」よりミミのアリア“私の名は
ミミ”、・オペラ「マノンレスコー」よりマノンのアリア“この柔ら
かなレースの中で”、・オペラ「トスカ」よりアリア“星は光りぬ”
※テノール独唱、・オペラ《トスカ》より“フローリア・トスカと”
自由と愛の二重唱、・オペラ《蝶々夫人》より“さようなら愛の
家よ”Tn. ・オペラ《蝶々夫人》より“ある晴れた日に” 共演：
ジョン・健・ヌッツォ Ten、ステイーヴン・ローチ（ローマ歌劇
場コレパティオア）

2001.8 アルカス SASEBO 開館記念公演 「イタリア音楽
のタベ」 於：アルカス SASEBO 大ホール

2001.9 石川県立音楽堂柿落公演 池辺晋一郎作曲 オラ
トリオ「呼びかわす山河」(世界初演)預玄院

指揮：岩城宏之 吉田浩之 Ten 前田綱紀 他 管弦楽：オー
ケストラ・アンサンブル金沢 於：石川県立音楽堂

2001.11 コラル・アーツ・ソサイアティー第9回定期演奏
会 ヘンデル作曲「メサイア」ソプラノ独唱 指揮：管弦楽：
於：新宿文化センター

2001.12 Symphony No.9 ベートーヴェン作曲「交響
曲第9番」ソプラノ・ソロ 指揮：管弦楽：於：浦安市文化会館
大ホール

2001.12 両毛地域第九演奏会 群馬交響楽団公演 ベート
ーヴェン作曲「交響曲第9番」ソプラノ・ソロ 指揮：高関健
於：足利市民会館大ホール

2002.2 第 18 回国技館 5000 人の第九コンサート ベートーヴェン作曲「交響曲第9番」ソプラノ・ソロ 指揮:管弦楽:於:国技館

2002.8 ウィーン音楽の夕べ アルカス SASEBO 公演 モーツァルト作曲 オペラ作品 ソプラノ独唱 共演:マルクス・ベルツ/バリトン 於:アルカス佐世保中ホール

2002.9 群馬交響楽団第394回定期公演 指揮.高関健 ベートーヴェン作曲「荘厳ミサ曲」ソプラノ・ソロ 於:群馬音楽センター

2003.8 二期会サマーコンサート パーセル作曲 歌劇「デイドとエネアス」よりアリア 於:北とぴあ

2003.12 群馬交響楽団公演 指揮.高関健 ベートーヴェン作曲「交響曲第9番」ソプラノ・ソロ 於:足利市民会館大ホール

2004.3 未来に伝える日本の唱歌～豊田喜代美さんと小学生による公演 第 14 回東京都平和の日記念行事 演奏曲:「日本の唱歌」 於:東京都庁第一本庁舎大会議場

2004.3 東京オラトリエンコール創立10周年合唱団さきたま創立20周年記念合同演奏会 J. S. バッハ作曲「マタイ受難曲」ソプラノソロ 指揮:岡本俊久 共演:畑儀文 小松英典 永島陽子 榊原哲 河野克典 於:新宿文化センター

2004.3 豊田喜代美ソプラノリサイタル シューベルト女声リートの世界～ゲーテの詩情 曲目:F. シューベルト作曲,J. W. v.ゲーテ作詞・糸を紡ぐグレートヒェン D118・クレールヒェンの歌 D210・クラウディーネのアリエッタ D239,6・月に寄す D296・ミニヨンの歌「ご存じですか、レモンの花咲く国」 D321・トゥーレの王 D367・グレートヒェンの祈り 564・恋する女の手紙 D673・ズライカ I 詩マリアンネ・フォン・ヴィンマー D720・ズライカII D717・ミニヨンの歌「言うな、黙っている」と D877,2・ミニヨンの歌「もうしばらく輝く姿のままに」 D877,3・ミニヨンの歌「ただあこがれをしる人だけが」 D877,4 メンデルスゾーン作曲:6 つの二重唱歌曲集 op63 より・挨拶:詩アイヒェンドルフ・秋:詩クリンゲマン、シューマン作曲:3 つの二重唱歌曲 op.43 より・秋:詩マールマン・美しい花飾り:詩ライニク 共演:中屋早紀子 M.Sop ピアノ小坂圭太 於:浜離宮朝日ホール

2004.7 KAY合唱団第 109 回定期演奏会 J.S.バッハ作曲「ロ短調ミサ曲」ソプラノ・ソロ 指揮:ウルリヒ・プレムシュテラー 管弦楽:KAY 室内合奏団 オルガン:草間美也子 合唱団:KAY 合唱団 共演:栗林朋子 川瀬朝比虎 浦野智行 於:東京芸術劇場大ホール

2004.9 生誕95 年天才・貴志康一の世界 貴志康一作曲「日本歌曲」全5曲(力車:本邦初演)共演:ピアノ小坂圭太 ピアノ尾高遼子 於:芦屋市民センター ルナホール

2004.11 東京オラトリエンコール第 11 回演奏会 ソプラノ・ソロ J.S.バッハ作曲「クリスマス・オラトリオ」ソプラノ・ソロ 指揮:岡本俊久 管弦楽:アンサンブル・アルス・ノバ 共演者:城守香 榊原哲 河野克典 於:石橋メモリアルホール

2005.1 【ドイツ】ライプツヒ:セント・ニコライ フェストコンサート J.S.バッハ作曲「クリスマス・オラトリオ」ソプラノ・ソロ 於:ニコライ聖堂

2005.5 二期会創立 50 周年バッハ・バロック研究会公演 J.S.バッハ作曲「カンタータ211番」ソプラノ独唱 於:サントリールホール(小)

2006.2 Liebe Kloster リーベ・クロスター 創作喜歌劇「リーベ・クロスター」 修道院長マリア役 於:吉祥寺シアター

2007.9 秋一夜の音楽会 アンナ・マグダレナ・バッハの楽譜帳 より J.S.バッハ作曲「カンタータ209番」より、「日本歌曲」 共演:ピアノ小坂圭太 於:鳩山会館

2008.5 豊田喜代美ソプラノリサイタル 渡辺護先生追悼「リヒアルト・ワーグナーと貴志康一ー東・西へのあこがれ」 於:東京文化会館小ホール 演奏曲:J.S.バッハ作曲・ミサ曲ト長調 BWV236 より「Domine Deus」二重唱・無伴奏パルティータ第二番 BWV1004 より「Allemande/アルマンド」※ヴァイオリン独奏 R.ワーグナー作曲:歌曲集「ヴェーゼンドンクの歌」(Wesendonk Lieder)・天使、止まれ、温室、悩み、夢。貴志康一作曲:歌曲・天野原、かもめ、赤いかんざし、力車、貴志康一作曲:ヴァイオリン曲・竹取物語 共演:ピアノ小坂圭太

2009.1 エルガー作品 海の絵(全5曲)、ヴァイオリン・ソナタ 貴志康一生誕 100 年記念演奏会 貴志康一作曲「日本歌曲」共演:ピアノ小坂圭太 於:東京国立博物館平成

2009.9 秋一夜の音楽会 荘村清志と共に 英国民謡、イタリア古典歌曲、スペイン歌曲 於：鳩山会館

2009.11 貴志康一生誕100年記念演奏会－尾高尚忠と共に 日本歌曲、ヴァイオリン曲、ピアノ連弾曲

共演：ピアノ尾高遵子 ピアノ小坂圭太 ヴァイオリン伊藤亮太郎、 於：芦屋市民会館ルナホール

2009.12 クリスマスコンサート ヘンデル作曲「メサイア」より“美しい足跡”、ブリス作曲「ノエル」他

共演：ヴァイオリン佐藤慶子 ピアノ尾高遵子 於：かん芸館

2011.9 《Mulier fortis》の音楽部分(ラテン語)を日本初演(沖縄県立芸術大学/Okinawa Prefectural University of Art奏楽堂).編曲楽譜校訂及び校訂浄写譜作成：福富秀夫.演奏者：豊田喜代美,大城治,山内昌也,宮城愛,増田勇人,岡田光樹,屋比久潤,新垣伊津子,庭野隆之,長谷川潤,糸数ひとみ

2012.3 《Mulier fortis》音楽部分を演奏(清泉女子大学旧島津公爵邸にて.Seisen University,Tokyo).演奏者：豊田喜代美,大城治,山内昌也,宮城愛,増田勇人,岡田光樹,庭野隆之,須賀麻里江,小林端葉,林翔子他

2012.3 豊田喜代美 ソプラノ・リサイタル バロック音楽・声楽と器楽の饗宴 J.S.バッハ：フルート、ヴァイオリン、通奏低音のためのトリオ・ソナタ BEV10381. Largo ・カンタータ51番 BWV51 「全地よ、神に向かいて歓呼せよ」Aria “Jauchzetz Gott in allen Landen” 全地よ、神に向いて歓呼せよ Recitativo “Wir beten zu dem Tempel an” 私たちは神殿に祈る Aria “Hochster, mache deine Guete” いと高きお方よ、あなたの慈しみを Choral “Sei Lob und Preis mit Ehren” 父と子と聖霊を褒め讃えよ Aria “Alleluja!” アレルヤ! B.シュタウト作曲・オラトリオ オペラ「Mulier fortis」より「不変」のアリア勇敢な心、愛される心“En cor durat, licet urat illud flamma saevior” 他。渡辺順生チェンバロ、花崎薫子チェロ、廣海史帆ヴァイオリン、宮崎容子ヴァイオリン、小林端葉ヴィオラ、菅きよみフルートトラヴェルソ、斎藤秀範トランペット、金城和美トランペット 於：サントリーホールブルーローズ

2013.3 熊本市細川家霊廟前及び庭で《Mulier fortis》音楽演奏。※参考資料の動画：NHKニュース検索「細川ガラシ

ャ描いたオペラ披露熊本」.演奏者：豊田喜代美,大城治,山内昌也,五郎部俊朗,増田勇人,糸数ひとみ

2013.3 《Mulier fortis》オペラ上演.沖縄県立芸術大学(Okinawa Prefectural University of Art)奏楽堂.楽譜校訂：福富秀夫,演奏者は豊田喜代美,五郎部俊朗,大城治,山内昌也,増田勇人,島袋君子,佐久間龍也,岡田光樹,屋比久潤,新垣伊津子,庭野隆之,糸数ひとみ.演出：平尾力哉.舞台監督：小栗哲家.舞台美術：小林優仁

2013/12 《Mulier fortis》オペラ上演. 上智大学創立100年記念公演.上智大学主催紀尾井ホール.ラテン語での歌唱の間に日本語の台詞を挿入しナレータの解説付.編曲楽譜校訂：福富秀夫(2011),佐久間龍也(2013).演奏者は豊田喜代美,加賀清孝,山内昌也,田中健晴,増田勇人,大上幸子,島袋君子,佐久間龍也,岡田光樹,須賀麻里江,小林端葉,庭野隆之,林翔子.演出/脚本：平尾力哉.舞台監督：小栗哲家,舞台美術：小林優仁,照明：辻井太郎,衣装：渡辺園子,舞台スタッフ：アートクリエイション

2014. 1 《Mulier fortis》オペラ上演.上智大学創立100年記念公演.主催長岡京記念文化会館(Nagaokakyo Memorial Culture Hall,Kyoto)にて.歌唱の間に日本語の台詞を挿入し解説者の進行付40分間の公演.演奏者は豊田喜代美,大城治,五郎部俊朗,山内昌也,増田勇人,大上幸子,玉置麻侑,佐久間龍也,岡田光樹,屋比久潤,小林端葉,庭野隆之,林翔子.演出/脚本：平尾力哉.舞台監督：小栗哲家,舞台美術：小林優仁,照明：辻井太郎,衣装：渡辺園子,舞台スタッフ：アートクリエイション

2017.3 沖縄県立芸術大学奏楽堂演奏会 バロック&無調の世界 共演：堀了介 佐久間龍也 岡田光樹 倉橋健 宮城理恵子。曲：J.S.バッハ・Willst du dein Herz mir schenken・カンタータ 51 番より”Jauchzet Gott in allen Landen”・G.H.Stoelzel:Bist du bei mir・A.ヴィヴァルディ：Piango gemo・G.F.ヘンデル《エジプトのジュリアス・シーザー》より”Piangero la sorte mia”・オペラ《リナルド》より”Cara Suposa”、武満徹・死んだ男の残したものは・悪女 沖縄民謡：ていんさぐぬはな 於：沖縄県立音楽学奏楽堂

2018.11 豊田喜代美ソプラノリサイタル《秋の瞳》木下牧子作品集 会場 サントリーホールブルーローズ曲目 委嘱作品

《暁の星/夏目漱石”夢十夜”より》世界初演・「六つの浪漫」より風を見たひと(C.ロッセッティ 詩、木島 始 訳) ,ほのかにひとつとつ(北原白秋 詩)・涅槃(萩原朔太郎 詩)・「抒情小曲集」よりうぐいす(武鹿悦子 詩)夕顔(金子みすゞ 詩)白いもの(北原白秋 詩)・「秋の瞳」(八木重吉 詩)より竜舌蘭,空が凝視している・「愛する歌」(やなせたかし 詩)よりひばり,ロマンチストの豚, きんいろの太陽がもえる朝に, 雪の街, さびしいカシの木 ピアノ田中悠一郎 木下牧子(ゲスト出演)

2019.5 チャリティコンサート《歌～マリアンブルーの風にのせて》曲・Ave Maria:ブルックナー,グノー,マスカーニ,シューベルト・グランディ・J.S.バッハ:Quia respexit・カッチーニのアヴェ・マリア 他 共演:ピアノ林翔子 於:近江楽堂(東京オペラシティ)

2019.11 大阪城エッゲンベルグ城友好城郭提携10周年記念『大阪城天守閣秋まつり』日本・オーストリア友好150周年記念事業 会場:大阪城天守閣前本丸広場 曲:シュタウト「Mulier fortis」より“私の心は耐えている”他。ダウラント「流れよ わが涙よ」、他 共演:リュート高本一郎

2019.12 クリスマス☆コンサート 曲①やさしきイエスよ②私の魂はただ火と氷を持つに過ぎぬ③私は聖処女のことを歌う④わが愛するお方は真なるお方なり、Mozart「Ave Verm」、カタルーニャ民謡「鳥のうた」、J.S Bach「無伴奏ヴァイオリンソナタ第3番より「ラルゴ」、ヘンデル「メサイア」より《How beautiful are the feet of them》他 共演:ピアノ尾高遵子, チェロ堀了介, ヴァイオリン岡田光樹 於:近江楽堂(東京オペラシティ)

(2021.3 オラトリオオペラ Mulier fortis(勇敢な婦人・細川ガラシャ)演奏会 ※コロナ禍非常事態宣言期間と重なったため一旦中止 於:東京文化会館(小))

2023.11 オペラ《Mulier fortis》コンチェルトアンテ 編集楽譜校訂完了報告 指揮:澤和樹 Constantia・細川ガラシャ:豊田喜代美 共演声楽家:金沢青児 小池優介 加賀清孝 小貫岩夫 大上幸子 西山詩苑 器楽奏者:鈴木愛美 吉川菜花 上園綾奈 吉澤知花 神倉辰侑 中島澪 コレペティトア:佐久間龍也 稽古ピアノ:林翔子 舞台スタッフ:林智子, 井坂舞. 於:旧東京音楽学校奏楽堂(東京・上野)

2024.5 CD リリース 貴志康一歌曲&木下牧子モノオペラ《暁の星》世界初演 フォンテック(FOCD9898)

収録曲:貴志康一作曲:赤いかんざし、かごかき、行脚僧/作詞:貴志康一、天の原/歌詞:阿部野人麻呂、ピアノ渡辺健二 木下牧子作曲モノオペラ「暁の星」夏目漱石“夢十夜”より、ピアノ仲村渠悠子

2025.9 豊田喜代美 公式演奏歴50周年記念リサイタル-ドラマチックソング・次代につなぐ「貴志康一」作品 歌曲:風雅小唄・赤いかんざし・行脚僧・藝者・大島おけさ(世界初演)・春の歌(世界初演)・花売娘・かごかき ヴァイオリン曲:月・竹取物語 ピアノ:渡辺健二 ヴァイオリン:澤和樹 貴志康一年譜プレゼン:甲南中学校・高等学校校長(山内守明) 於:サントリーホール ブルーローズ

■プログラムには上記の他に、共演者略歴、貴志康一情報、豊田喜代美情報の取得方法、舞台スナップ写真抜粋を掲載。両親、諸先生はじめ多くの皆様のお支えがあって公式演奏歴50周年を迎えることができました。深く感謝しております。今後も、次代につなげたい作品演奏、Mulier fortis 演奏研究、楽器としての身体の研究・実践に励み、本協会の理念である、幸せを運んで来る音楽の喜びを、皆さまと共に分ち合っ

ていけますよう努めます。よろしくお願いたします。

読売新聞インタビュー記事 9月12日

<https://www.yomiuri.co.jp/culture/music/20250914OYT1T5>

ぶらあぼ 8月号 <https://ebravo.jp/archives/193980>

天国と地獄・ダイアナ(月と狩猟の女神)

